



KOKUSHIKAN UNIVERSITY

国士館大学  
KOKUSHIKAN UNIVERSITY

1962  
2022  
YEARS

国士館大学 政経学部 創設60周年記念誌

国士館大学 政経学部



国士舘大学 政経学部 創設60周年記念誌

	目次
02	理事長挨拶
03	学長挨拶
05	学部長メッセージ
06	教務主任メッセージ
07	学生主任メッセージ
08	政治行政学科主任メッセージ
09	経済学科主任メッセージ
10・11	政経学部10年の歩み①：社会連携プロジェクトの取組
12	政経学部10年の歩み②：公務員相談室
13	政経学部10年の歩み③：政経学部による就職支援の取組
14~17	座談会1 政経学部の学びの魅力と目指す場所
18~21	座談会2 政治行政学科の学びの魅力と目指す場所
22~25	座談会3 経済学科の学びの魅力と目指す場所
26~30	記念講演会 I
31~33	記念講演会 II
34~37	記念講演会 III
38~47	記念講演会 IV

## 政経学部創設60周年 記念に寄せて

理事長 名誉教授 **大澤 英雄**



国士舘大学政経学部が創設60周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。また、記念事業の一環として記念誌が上梓されることになりましたが、これは国士舘関係者一同の大きな喜びとするところであり、本誌の編集に当たられた皆様に心から感謝と御礼を申し上げます。

10年前の創設50周年の年は、未曾有の災害であった東日本大震災に見舞われ、今回はコロナ渦で60周年を迎えることとなってしまいました。今回も記念講演会などが対面で実施出来なかったことは誠に残念なところです。しかし、ピンチをチャンスに繋げることを持論としている私にとっては、学生の皆様や教職員の皆様には記憶に強く残るものであろうと前向きに捉えています。

私が本学体育学部を卒業し、同学部の助手として本学に奉職した後、政経学部が昭和36年に創設されました。今から60年も前のことになりますが、二つの学部ができたことによって学内が非常に活気づき、希望に満ち溢れていた当時のことを現在でも鮮明に覚えております。適切な表現ではないかもしれませんが、私個人としましては親しみを込めて体育学部を長男坊、そして政経学部を次男坊と呼び、「次男坊と共に歩んで行く」という気持ちでございました。

国士舘大学は文武不岐(両道)を教育の柱としてきましたが、長男坊と次男坊の例えの如く、「鍛錬の体育学部」と「思想の政経学部」が創設されて兄弟ができたことによって、国士舘大学独自の教育体制の基礎が整ったと言っても過言ではありません。

政経学部の開設時、既に国士舘には柔道場や剣道場、体育館、グラウンドなどの運動施設が整備され、政経学部でも名師範の先生方がご指導に当たられていました。更に創立者柴田徳次郎先生は政経学部学生の心がけとして「一日一回は汗びっしょりになる」ことを挙げられていましたが、政経学部であろうと当然ながら「鍛錬」が必須だったのです。

政経学部創設の背景の一つとして、冷戦の真っ只中で安保闘争が激化し、世論が左傾化していたこともございました。しかしながら、冷戦も政経学部創設から30年で終わりを迎え、そこから更に30年経った次第です。現在も国際情勢に目を向けると依然として混沌としておりますが、本学及び政経学部は「国土」を養成しつつ、学園一丸となつてこの状況を乗り越えていかなければなりません。

政経学部が本学の牽引車として今後は更なる発展を遂げることを心から祈念し、政経学部創設60周年のお祝いのご挨拶と致します。

# 「政経学部創設60周年記念誌」 発行に寄せて

学長 佐藤 圭一

(政経学部政治学科・昭和54年卒)



国士舘大学政経学部が創設されたのは、昭和36(1961)年4月のことです。爾来、今年60周年を迎えることになりました。これを記念して「政経学部創設60周年記念誌」を発行されますことは、在籍する先生方の日々の研鑽を世に問うことだけに留まらず、学部発展の足跡を後世に残す価値ある企画だと考えます。

歴史を遡ってみれば、政経学部が創設された年は米ソ冷戦が峻烈を極め、第二次世界大戦終了わずか16年後にして第3次となる大戦への予兆が顕在化します。1月にはケネディ大統領が就任し、8月には突如としてベルリンが東西に遮断され、冷戦の象徴でもあるベルリンの壁が築かれます。10月にはソ連が西側を震撼させた最大規模の水爆実験の成功を重ねます。国内にあっては前年の60年安保闘争は騒擾と化し、混乱の責任を取り岸内閣は総辞職しています。世界中に暗雲重く垂れこめる恐怖の時が流れていたのです。

“真理の聖火、闇路照す！” 政経学部創設と同時に創刊された「国士舘大学新聞第1号」一面には創立者・柴田徳次郎館長の箴言が力強く明記され、同年5月27日の開学式での式辞では柴田徳次郎館長が政経学部創設の目的を次のように述べられておられます。「士は以って弘毅ならざるべからず、任重くして道遠し」(論語)。つまり、リーダーというものは、広い器量と強い意志を持たなければならない。リーダーの責任は重く、進むべき道のはるばる。更に、「文事ある者は必ず武備あり」(史記)、文と武は両者を兼ね備えなければならない、一方に偏ってはならないと。国士舘教育の神髄である「文武両道」＝“幅広い教養”と“心身共に強靱な人材”の修養により、日本を正しく導くリーダー、つまり真の「国士」養成を政経学部へ託したのでした。

半世紀の時が流れ、「創設50周年記念式典」は東北地方を中心に壊滅的被害を与え、未だ余震止まぬ「3.11東日本大震災」の発生から2か月余りに実施されました。それから10年を経た今日、再び昨年より世界を覆う新型コロナウイルス感染症拡大(パンデミック)の災禍に見舞われております。

地政学的要因より国家間の利害が衝突し合い、更には地理的要因によって大規模自然災害から逃れることができないのが日本の宿命といえます。

政経学部は創設目的を継承する学部として、「公德を以って社会を取り巻く諸問題を解決しようとする」人材、「国家や社会のあるべき姿を常に考え、公共の精神を持ち、社会のために進んで行動する」人材を入学受入れの方針(アドミッション・ポリシー)として定め、「政治学および経済学に関する学問的知識の教授により、知的探求心と社会に貢献する心を持った人材育成を目指す教育」(カリキュラム・ポリシー)を展開しています。

“真理の聖火、闇路照す！” 時代は変われども、政経学部には変わることなく日本人の心の奥底に脈打ち、日本人の精神文化の象徴ともいえる本学の教育理念「誠意・勤労・見識・気魄」を体現し、「国を思い、世のため、人のために尽くす」リーダーとしての「国士」養成が負託されているのです。

ここに、政経学部が佳節(還暦)を迎えたことの慶賀と共に、政経学部が引き続き本学の発展の中心的役割を果たされることを祈念してお祝いのご挨拶とさせていただきます。



## プロフィール

1. 最終学歴：東海大学大学院経済学研究科博士課程満期退学
2. 2018年より学部長
3. 専門分野：財政学、地方財政学、租税論

岩元 浩一

Iwamoto Koichi



## 政経学部創設60周年にあたって

国士舘大学政経学部は、昭和36年に創設されて以来、本年令和3年に学部創設60周年を迎えました。この大きな節目に当たり、まず今日に至るまで政経学部の発展にご尽力いただいた教職員の皆様方、卒業生・在学生の皆様方、さらには関係各位の皆様方に、改めまして深く感謝の意を表します。

政経学部は当初政治学科と経済学科の二学科でスタートしましたが、その1年後に経営学科が創設され、長きに亘り三学科体制で運営されてきました。その後平成23年に経営学科が学部化し二学科体制となり、平成28年には政治学科が政治行政学科に名称変更し現在に至っています。学生数はおよそ2400名であり、40名を超える専任教員を擁しています。

政経学部の教育の基本方針は、政治行政、経済分野の専門性だけに偏らない人間力、体力、気力、学際的知力、礼節力等バ

ランスのとれた総合力を持つ人材の育成にあります。そして、建学の精神に基づいて世界の様々な価値観を理解し、各国の歴史や文化を尊重する心を有していること。論理的思考力や主体的行動力を兼ね備え、それらを用いて、多様な人々と協働し、世のため、人のために尽くすことができること。このようなトップマネジメントおよびミドルマネジメントの中心的役割を担うことのできる社会人を養成することを、教育目的としています。

18歳人口が減少している今日、全国の私立大学の4割強が入学定員割れとなっており、大学を取り巻く環境は想像以上に厳しいものとなっています。あらためてこの機会に、われわれが置かれている状況を再認識し、さらなる10年への発展を目指すスタートラインとしたいと考えております。こうした背景から、政経学部では学

部創設60周年の記念事業として、「記念講演会」の実施、「記念論文集」の刊行、「記念誌」すなわち本誌の刊行の3本柱で取り組んで参りました。「記念講演会」は5月27日にオンラインで実施し、その様子を大学のHPにアップロードしてゼミや講義で活用できるようにしました。多くの卒業生、在校生が参加されたことは、政経学部発展の歴史を知る絶好の機会であったといえましょう。

「記念論文集」は、「政治・経済と防災」という表題としました。これは、本学部創設50周年に当たる平成23年以降、我が国は東日本大震災、熊本、北海道の大地震、広島、九州での集中豪雨といった大規模災害に見舞われました。そのため国士舘大学では、ブランディング事業として「防災リーダー養成教育に関する研究拠点の構築」を立ち上げ、防災教育に注力してきました。学部としても防災教育の必要性を学生と教職員で共有していくという意味も込めてこのような表題としたものです。ご多忙のところご寄稿いただいた諸先生方に厚く御礼申し上げます。

学部創設60周年を機に、これらの記念事業を手がかりとして、政経学部の更なる10年の飛躍をめざし努力、精進をしていく所存です。

最後になりましたが、60周年記念事業の実施に当たり、ご支援くださった国士舘大学ならびに多くの関係者の皆様方に厚く御礼申し上げます。



## プロフィール

1. 最終学歴：岡山大学大学院文化科学研究科博士後期課程修了
2. 2014年より教務主任
3. 専門分野：計量経済学、経済モデル現象の数値解析

石山 健一

Kenichi Ishiyama



## 理念は一貫しつつも、 大学入学者選抜方法は 多角的、多面的に

### 1 政経学部がカリキュラム面、 授業面でこれまでにどのような ことに取り組んできたのか

経営学科が分離独立し、政治学科と経済学科の2学科体制となった平成23(2011)年度から、政経学部は、従来の「理念と目標」に加えて、「政経学部の教育研究上の理念、目的」として、教育研究上の目的と3つのポリシーを定め、使命・目的に整合した教育研究組織を構築し、計画的に使命・目的及び教育目的を実現していくため、様々な改革をすすめて参りました。大きな出来事としては、学科名称の変更が挙げられます。政治学科は平成28(2016)年度より、政治行政学科に名称を変更し、コース共通科目と選択必修科目の履修条件を変更しました。経済学科は平成27(2015)



年度から選択必修科目、専門選択科目の履修条件を変更しております。また、平成26(2014)年度から行政・公共政策コースが公務員養成コースになり、平成25(2013)年度からはフレッシュマン・ゼミナールにおける外部委託業者によるキャリア教育が始まり、令和2(2020)年度には外国語検定試験の単位認定制度が導入され、この10年で政経学部は大きく変わりました。

### 2 政経学部が入試面で どのようなことに 取り組んできたのか

入学試験も大きく変わりました。特に、令和3年度入学者選抜からは、入学試験の呼び方や入試日程が変更されましたが、その選抜方法にも大きな変化がありました。政経学部は、受験生に対して、入学前の段階から、社会の動きに興味を持ち、日常的にニュースを読み、自らの考えや意見が述べることができる資質・能力を身につけておいてもらいたいと考えており、社会、国家、国際社会のあるべき姿や課題について、これまでに学んだ知識や情報をもとに論理的に考え、その結果を他者にわかりやすく説明できることを従来、小論文で評価しておりました。全学的な入試改革に伴い、令和3年

度入学者選抜からは、このような力を小論文だけではなく、口頭試問でも評価するようになりました。推薦選抜やスポーツ・武道選抜の面接も従来の3段階評価から、100点満点評価に変わり、合否への面接の影響が大きくなりました。受験生に対して、より精度の高い評価ができるようになったといえるでしょう。

### 3 これからの時代へ向けて、 政経学部としてどのような 取り組みが必要だと思うか。

とても難しい質問ですね。実は、2017年度以前の便覧には政経学部の「理念と目標」として、現代経済社会の時代に即応したトップマネジメントおよびミドルマネジメントの中心的役割を担う人材の養成と、政治、経済分野の専門性だけに偏らないバランスのとれた総合力を持つ人材の育成という二つの目標が掲げられていたのですが、2018年度から、「理念と目標」が削られ、二つ目の目標を明記した「政経学部の教育研究上の理念、目的」だけになってしまいました。政府が公表している労働力調査の結果を見ますと、2000年以降、多くの産業部門で役員の数が増加傾向にあることが分かります。今後、社会の中心はさらに小さくなると予想されます。個人的には「社会の中心的役割を担う人材の養成」のために教育に携わることができることを大変幸せに感じているのですが、社会のニーズの変化に対して、政経学部は、「理念と目標」にある二つの目標を維持するのか、それとも、一方を捨てて、生き残りを図るのか、どちらにせよ、大きな決断をする必要があると考えられます。



プロフィール

1. 最終学歴：東京農工大学大学院工学府電子情報工学専攻博士課程修了
2. 2009年より学生主任
3. 専門分野：体育学、身体と運動A、体育実習バドミントン

竹市 勝

Masaru Takeichi



# 学生の秘めた可能性を伸ばす 教育、そして知識・行動力・ 精神力を備えた人材の育成

## 1 他学部などと比較して、 政経学部および政経学部の 学生の特徴は何か。

政経学部は、1学年約600名の学生を抱えています。最も特徴的なのは、政経学部の学生は、具体的な将来の目標が入学時には、まだ決まっていない学生が他学部比べて多いということです。当然、将来を見据えて政経学部を選択した学生も多くおります。オープンキャンパスでの個別面談においても受験生の話を聞くと、まだ将来の目標が決まっていないと答える高校生が多いです。

しかし、これらの学生は、これから多くの選択肢を有していることから、様々な方面への可能性や伸び代を秘めている学生であると思います。政経学部における学びが、将来の目標を決めるきっかけとなるという点では、学部教育が果たす役割は重要であると思います。

## 2 政経学部の 学生の部活面での活躍、特徴 (過去、現在、これからの期待など)

2017年度まで、政経学部では野球部の学生を受け入れてきました。野球グラウンドは町田キャンパスにあり、授業後町田キャンパスに移動して練習をする

など、勉学と部活動の両立が困難な状況でしたが、これまで数名のプロ野球選手を輩出してきました。現在は、特定の部活動の学生を受け入れてはませんが、今後は優れた競技成績を持つ学生の受け入れを推進し、「知徳の精進向上」と「心身の修練」のお手本となるような学生を育ててゆくことを期待しています。

世田谷キャンパスには、可動床プール(水深0~3m)があります。この施設を活用し、競泳やアーティスティックスイミング等、プールを中心とした競技の学生を受け入れ、勉学とスポーツの両立をはかり、学部イメージアップやブランディング

強化を図ってはどうかと考えます。

## 3 これからの時代へ向けて、 政経学部の学生に どのような点を期待するのか。

世界情勢や日本情勢は、日々めまぐるしく変化しています。新型コロナウイルス感染症の世界的流行により、多くの尊い命が奪われ、世界経済は大混乱となりました。日本国内では、コロナ感染症だけではなく、地球温暖化問題、少子高齢化問題、勤労世代(20~64歳)の減少問題、貧困問題など、多くの問題を抱えています。

このように、未来に対する不安が山積する中、様々なストレスにさらされながら学生達は状況に対処してゆかなければなりません。今後、さらに出現する様々な問題に適切に対処できる知識と行動力、そして強靱な精神力を政経学部で学修してほしいと思います。そして、未来の日本を作り上げるために貢献する人材となることを期待しています。



## プロフィール

1. 最終学歴：東海大学大学院政治学研究科博士課程単位取得満期退学
2. 2018年より政治行政学学科主任
3. 専門分野：国際関係論

上村 信幸

Nobuyuki Uemura



社会に貢献する有為な人材輩出の伝統を高らかに！

## 警察、消防、防衛、行政、 民間企業等々の多彩な分野へ

国土館大学政経学部の政治行政学科は、幾多の有為な人材を輩出してきた伝統をふまえ、時代の要請に応えるべく現在の名称へ2016年に変更しました。急速に進む人口減少と深刻化する少子高齢化の問題に対して、地域の自立やまちづくりを含め、社会や国家の仕組みをどのように再構築していけばいいのかが問われる時代を迎えています。くわえて、近年コロナ禍の影響が色濃く社会に影を落としている状況にあって公務員志願者がゆるやかな増加傾向を示していること、学生の関心が従来の政治の理念・思想・歴史を主体とした政治学から、行政学やその関連科目等に象徴される政策や政治および行政の制度・実践を中心としたものへと徐々に変容し

てきていることなどの現状をふまえて、政治行政学科では様々な改革を行ない、充実に向け取り組んでまいりました。

その第一は、カリキュラム改革です。基幹科目である「公務員概論(基礎・応用)」「行政学(総論・各論)」「行特殊講義」等から、一般行政職志望者向けの「地方自治入門」「地方分権論」「政策デザイン」「都市政策入門」、警察志望者向けの「警察行政」、消防志望者向けの「消防行政入門」、自衛隊志望者向けの「日本の安全保障」等々、多様なカリキュラムの整備を進めてきました。令和4年度からは、「社会調査研究法」と「社会調査実践法」を新設し、国内外のスタディツアーや政策提言等の多様な活動を通じて、学生自ら社会に横たわる課題を見つけ、その解決策について調査研究することで、主体的かつ能動的学びを活性化することを目指してまいります。

第二は、公務員相談室の運営です。公務員相談室は、警察官・消防官(士)試験や、地方・市役所上級試験をはじめとする公務員志望の学生に対して、相談・指導体制を強化する目的で、2016年4月、政経学部附属政治研究所のもとに設置されました。公務員の仕事内容の紹介や、公務員試験の日程・種類、試験内容や勉強の仕方、併願方

法、行政機関へのインターンなど多岐にわたる情報提供や相談指導、小論文の添削や面接対策の指導、自主勉強会や4年生を対象とした直前2次試験対策なども実施することで、公務員養成指導体制の基盤として運営されてきました。

第三は、公務員養成を中心とした多様な進路に挑戦する学生の学びを促進し、さらに魅力ある政治行政学科の学びとなる多角的な取り組みです。政治研究所主催行事としましては、学生のキャリア形成支援のための「公務員&キャリア・ガイダンス」、政治行政学科の研究及び教育の促進を目的とした「シンポジウム」(ならびに「政治研究所講演会」)、政治学研究会、グローバルな視野で活躍できる人材育成を目的としたスタディツアー等々の取り組みを行なってきました。

建学の精神である「世のため、人のため」との高き理想をたずさえながら、世界にあって柔軟な発想と国境を越える軽快なフットワークを備えたグローバルな人材から、ローカルな舞台で持続可能な未来を切り開くべく活躍する文化・行政・教育の担い手まで、自らの力で考え行動することのできるシティズン(市民)へと育てていただきたいと念願する次第です。



## プロフィール

1. 最終学歴：早稲田大学大学院経済学研究科応用経済学専攻博士後期課程退学
2. 2018年より経済学科主任
3. 専門分野：労働経済学、人的資源管理論

熊迫 真一

Shinichi Kumasako



## 経済学科の新カリキュラムについて ～その目的と特色～

日本の大学進学率が50%を超え、大学に求められる教育は一部のエリート層のみを対象としたものから、より一般大衆を対象としたものへと変化していると考えられます。また今後18歳人口が大幅に減少すると予想される中、各大学はそれぞれの強みや特色を打ち出し高い教育の質を保つことが要請されています。このような状況の中で国士館大学政経学部経済学科では、“卒業後の進路を意識した教育”、“最低限の質保証”、“少人数教育によるきめ細やかな指導”の3点が実現できる仕組み作りを目指し、2018年からカリキュラム改革に取り組んできました。中堅・若手教員で構成されたプロジェクトチームを中心に検討を重ね、晴れて2022年入学生から新カリキュラムを適用できる運びとなりました。その新カリキュラムには以下のような3つの特長があります。

第1に、学ぶ内容と将来の進路との関係がはっきりとわかるようなコース制を設置しました。新たなコース制では、経済専門人材育成コース、税務・会計専門人材育成コース、専門企業人育成コース、国際企業人育成コース、公共人材育成コース、データ分析人材育成コースの6コースを設置しています。もともと経済学は応用範囲の広い学問であることから、経済学を学ぶ学生が希望する進路も多岐にわたっています。自らの夢を実現するために大学

で学ぶべき内容を示すことは学修効果を上げるためにも重要であると考えられます。中でも経済専門人材育成コースと税務・会計専門人材育成コースでは、大学院との連携により、学部在籍中に大学院修士課程の科目の履修を可能にする制度を設けています。

第2に、1年次から4年次までゼミナールを必修化し、学生一人ひとりにきめ細やかな指導が行える体制を作りました。具体的には、1年次に「フレッシュマン・ゼミナール」、2年次に「基礎ゼミナール」、3年次に「専門ゼミナールⅠ」、4年次に「専門ゼミナールⅡ」を設置し、少人数のゼミナールの中で、4年間を通して高度な専門知識と総合的能力を身につけてもらいます。

第3に、よりわかりやすい経済学入門科目や、データ分析の実践的な科目な

ど、新たに魅力的な科目を開設しました。具体的には、経済学を初めて学ぶ学生のために入門科目の内容を見直し、周辺知識から分かりやすく教えます。1年次に経済学の基礎を身につけ、2年次以降の応用科目へのステップアップが無理なくできるようにしています。また、文系理系を問わず、データ分析能力を身につけることが求められている中で、経済データを用いて分析する実践的な科目などを新設しました。

今後は大学間の学生獲得競争が更に激化していくものと予想されます。今回のカリキュラム改革によって教育効果が高まり、国士養成という大学の存在価値がこれまで以上に認知され、入学志願者が増えるといった好循環につながるよう、引き続き改善改革に努めていきたいと思えます。



国士館大学政経学会・埼玉県八潮市

国士館大学



八潮市

# 社会連携プロジェクト の取組



## 1 はじめに

人口減少や高齢化、防災・減災対策や社会インフラの維持管理、環境問題や子育て支援などの複雑で困難な課題があるなかで、持続可能な発展を支える機能として、大学など高等教育機関には大きな期待がよせられている。大学は、こうした要請に応えるかたちで本来有している教育や研究機能に加えて社会貢献機能を強化しつつあり、大学と自治体との連携や社会貢献のあり方が検討されている。

本学においても、2017(平成29)年3月28日、埼玉県八潮

市と相互の発展と人材育成を図る目的で、「国士館大学と埼玉県八潮市の包括的連携に関する協定(包括的連携協定)」を締結した。これまでに「八潮こども夢大学」、「防災教育」、「スポーツ振興」、「インターンシップ」などの多様な分野において本学と八潮市との連携事業が実施されてきた。2018(平成30)年度からは、新たな連携事業として、本学政経学会と八潮市による「社会連携プロジェクト」が実施されており、2021(令和3)年度まで継続中である。

## 2 2018年度 第1回大会(政策提言プレゼンテーション大会)

第1回大会では、参加した政経学部の8つのゼミが、八潮市の行政上の課題である三つのテーマ(①世代間交流等を通じた防災・防犯意識の普及啓発、②今、行きたくなる街「やしおづくり」、③空き家活用プロジェクト)のうちからいずれか一つを選択して政策提言を行った。2018(平成30)年11月28日、「政策提言プレゼンテーション大会」が、八潮市の八潮メセナ2階の集会室で開催された。本大会には、大山忍・八潮市長、本学・岩元浩一政経学部長、長谷川三雄政経学会長の3名が審査員として参加した。また、本学政経学部の教員や学生ら約70人、一般公開に訪れた近隣住民、八潮市議会議員や市職員など約30人、計100人以上が出席した。本大会の結果、最優秀賞に選ばれたのは、「防災食グルメコン

テスト」による世代間交流の促進と地区防災体制の整備を提言した、平石正美ゼミナールの発表であった。平石ゼミの発表リーダーの蛭田さんは、「地区の防災訓練に参加して調査した。防災訓練に楽しさをプラスし、住民の意識を『参加したい!』に変えられるよう、提言を作り上げた」と説明した。大山市長からは「全てが新しい概念や、試みを入れた貴重な意見。まちづくりを積極的に考えていただいたことで、まちづくりや行政に対する認識も変わったと思う」と述べた(本大会の内容は、2018(平成30)年12月17日付の『東武よみうり新聞』に「大学生が政策提言：八潮 国士館大生が発表」という見出しで掲載された。蛭田さんと大山市長のインタビューはこの新聞記事を参照した)



## 3 2019年度 第2回大会(社会連携プレゼンテーション大会)

2019(平成31/令和元)年度は、政経学会社会連携プロジェクトの2年目として、昨年度の提言内容を踏まえながら、八潮市や他自治体の事例をもとに地域課題を設定し、その解決に向けて地域住民やNPOなどの多様な主体が「共生・協働」する視点で「社会連携のあり方」を研究し、解決策を検討する「社会連携を通じた地域課題の解決策に関する提案」発表会(以下「社会連携プレゼンテーション大会」とする)を実施した。

大会当日までは、①八潮市大山市長を囲む座談会(2019年6月4日)、②「社会連携プレゼンテーション大会」に向けた平

石正美政治学研究科長によるレクチャー会(同年6月26日)、③大会案内・参加募集(同年6月26日~7月13日)、④各ゼミでの研究テーマの決定及び八潮市現地調査に向けた説明会(同年9月30日)、⑤八潮市現地調査計画書の提出(同年9月30日~10月7日)、⑥八潮市現地ヒアリング調査(同年10月4日~10月31日)、⑦学内中間報告会と中間報告書の提出(同年11月12日)、⑧最終報告書の提出(同年11月22日)、⑨社会連携プレゼンテーション大会の開催(同年11月27日)、という流れでプロジェクトが進行した。

表1 「社会連携プレゼンテーション大会 中間報告会」参加ゼミと研究テーマ等

	研究テーマ	代表学生	所属ゼミ	学科
1	これから各自治体への移住を考える若い世代が住みやすい街づくりとは ～そこから繋がる社会連携～	金本裕未	川村ゼミ	経済
2	ナッジを活用した高齢者支援と世代間関係の強化	山崎海斗	平石ゼミ	政治行政
3	図書館を拠点とした公共空間における居場所づくり ～サードプレイス概念を手掛かりとした社会連携の可能性～	嶽下莉奈	上村ゼミ	政治行政
4	食で"つながる"人とまちの魅力 ―フェス・祭りの課題を解決する「秘密」のレシピ―	鈴木昂佑	石見ゼミ	政治行政
5	子ども食堂と地方創生 ― 子ども食堂創設に関する研究 ―	松永稜生	的射場ゼミ	政治行政
6	地域ブランディング ～Reborn～	土屋良樹	織田ゼミ	政治行政
7	防犯活動とエリアマネジメント	小林拓夢	斎藤ゼミ	政治行政
8	地域の特色を活かした人と人とのつながりと産業づくり ―社会連携と都市農業の可能性―	関戸健太	古坂ゼミ	政治行政
9	八潮市スマートシティ化への試案 ～スマートロック普及の観点から～	竹田泰介	加藤ゼミ	経済

2019(令和元)年11月27日、埼玉県八潮市と本学政経学会が共同で主催する、第2回社会連携プロジェクト「社会連携プレゼンテーション大会」が八潮市の八潮メセナ・アネックス多目的ホールA・Bにて開催された。大山忍・八潮市長や八潮市議会議員、本学政経学部の教員や学生、近隣住民など合計約120人が出席した。

本大会の結果、最優秀賞に選ばれたのは、「ナッジを活用した高齢者支援と世代間関係の強化」を提案した、平石正美ゼミナールと、「地域の特色を活かした人と人とのつながりと産業づくり」の古坂正人ゼミナールの発表であった。平石ゼミの山崎くんは、「今までの日々の積み重ねと仲間を思いやり、1つの目標に向けてやり遂げたことが、今回の最優秀賞受賞につながったと思う」と説明した。古坂ゼミの平澤くんは「大学生活で初めてあれだけ大勢の人の前で、市長や市議会議員の方々がいるまで話すことができ、人前で話すのに自信がついた。大学生活では味わえない、何とも言えない充実感や達成感がある。これは、実際にやってみないと分からない、言葉では言い表せない感動である。そのくらい努力をしてきたからこそ感動があるし達成感もあるんだと思う」と述べた。同ゼミの石橋くんは「現地調査をはじめ嫌々だったけど、今思えば面白かったし、想像していた調査とはだいぶ違った発見が沢山あって楽しかった。大学生活で一番良い経験をする事ができた。この経験はこれからどこかで必ず活かせると思う」と話した。

大会後の挨拶で、大山市長からは「今回は非常にレベルが高くなっており、私自身も期待している」というお言葉もいただいた。

た。また大山市長は、「社会問題・課題は、八潮市以外でも国全体で多くある。社会問題は、改善点を見つけるのが難しい。見つけたとしても、実行し解決することが難しい。なぜなら、私たちは日々解決していこうという気持ちが必要で、また新しい課題が出てくるからである。学生たちも皆同じであると思う。これから先の人生を見据えたときにどれだけ、社会の一員として、活動して、自分の人生を全うして、地域をより良くしていこうと頑張ってください。最後に、今回よかった、頑張ろうというのが形になっていくと思う。それは、大学での、社会学習、経済学習といった『学び』につながってくるんじゃないかなと思う」とお話をいただいた。



## 4 2021年度 第3回大会(社会連携プレゼンテーション大会)

2020年(令和2)年度の社会連携プロジェクトは、政経学会と八潮市との間で、大会開催に向けて何度も交渉を重ねた。しかし、本学では新型コロナウイルス感染症対策等により、2020年度の春期授業が遠隔授業となり、各種の学内イベントが中止という状況になり、また八潮市も新型コロナウイルス感染防止の対策に追われている事情を踏まえて、2020年度の社会連携プロジェクトは中止することになった。

2021(令和3)年度は、社会連携プレゼンテーション大会の開催に向けて、Zoomなどのオンラインツールなどを活用して開催することになった。2021年度は、「子どもと

教育」が課題テーマとなった。これをメインテーマとして、①スポーツ・レクリエーションに親しめる環境づくり、②大学と地域等との連携による教育体制の充実、③ICT活用と情報活用能力の育成、の三つのサブテーマから1つを選択して、ゼミ単位で参加することになった。プレゼン大会までの流れとしては、①2021(令和3)年5月28日(金) Zoomミーティングを利用した八潮市による市の概要と市の取組についての説明、②大会への参加申込み・学内ポスター等で案内、③八潮市への質問メールによる調査、④10月27日(水)中間発表会、⑤11月25日(木)学内にて最終プレゼンテーション大会を開催した。

## 5 終わりに

令和3年度で、社会連携プロジェクトは3回目になるが、過去の大会に参加した学生たちからは「プレゼン大会の経験が就職活動に活かされた」、「大学時代の学びとして本当に良い思い出となった」との感想が寄せられている。

本大会にご参加ご協力いただいた皆様に感謝を申し上げますとともに、本学政経学会並びに八潮市のさらなる発展を期して関係各位に感謝を申し上げる次第である。



## 公務員相談室

日・時間に面談をおこなっていたが、2021年度からは相談室担当教員の拡充に伴い、面接練習や論文添削、自然科学系科目指導、警察官・消防官採用試験相談、自衛官採用試験相談など曜日・時間ごとのプログラムスケジュールにもとづいて相談対応をしている。また、本学manaba(クラウド型教育支援サービス)やメール、Zoom(Web会議システム)などを用いた遠隔指導も一部で実施している。

主に1,2年生に対しては公務員の仕事を紹介・説明しながら、各学生の適性やニーズに応じた目標設定の相談にのったり、何から手をつけてよいかわからない学生には勉強スケジュールや科目等の大まかな方向性を示したりしている。他方、すでに目指す公務員が決まっている学生に対しては、各年次の勉強方法、課外講座の受講、自治体研究の重要性などを助言する。3,4年生に対しては、面接・論文対策やエントリーシートの書き方など、より実践的な指導をおこなっている。例年春期には、警視庁の1次試験に合格した学生に対して、面接等の直前対策講座も開講しているが、毎年多くの学生が参加している。また公務員を目指す学生同士の自主勉強会なども開催している。

公務員相談室は、近年の公務員就職の学生ニーズに対応するため、学科名称を政治学科から政治行政学科に改称するのにもない2016年4月にスタートした。政経学部附属政治研究所のもとに設置されたが、相談室利用は広く本学の全学生を対象としている。警察官や消防官、自衛官などの公安職系公務員だけでなく、市役所等職員など行政職系公務員を志望する学生も対象として、様々な相談にのったり、アドバイス・指導をおこなったりする。相談室には大学休暇期間を除く春・秋期の年間を通じて、週4日(月・水・木・金)の10時から17時まで、政治行政学科の専任教員が相談員として在室している。2020年度までは原則として事前予約にもとづいて、学生の希望する曜

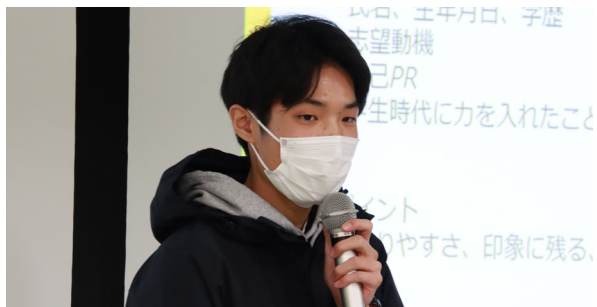
今後益々、公務員職に明確なやりがいや使命感を持てるような人材、あるいは八潮市連携プロジェクト「政策提言プレゼンテーション大会」などのより実践的な経験を通じて課題解決能力を身に付けた人材が必要とされる時代になってくる。各学生の個性を引き出しつつ、各人が抱える課題や不安について親身に寄り添うような相談・指導によって、能力・人格ともに国家や社会のために尽くすことのできる優れた公務員養成に今後も注力していきたい。



## 政経学部による 就職支援の 取り組み

政治研究所では、2008年度から現在まで、公務員をめざす学生を応援するため、年に数回、公務員&キャリア・ガイダンスを開催してきました。主に春期は、市役所や特別区などに就職し地方公務員となった先輩や、警察官・消防士・自衛官になった卒業生を招いて、公務員の実際の仕事内容などについての講演をしてもらいます。学生が身近に感じるよう、学生と比較的年齢の近い若手の公務員(卒業生)をお願いしています。

秋期は、公務員試験に合格した4年生の学生に、自らの合格体験談を話してもらっています。筆記試験や小論文、



面接などの試験内容や、どのように勉強に取り組んだのかなどの点について、毎回、具体的な情報を提供してくれます。公務員をめざす1~3年生の学生にとっては、身近な成功例から多くの刺激を受けています。4年生の先輩も後輩のために、とても親切に、そして、資料などよく準備した話をしてくれます。

一方、経済研究所では、就活が終わり内定を得た現役4年生を講師に迎え、就活支援企画「就職活動体験共有会」を2019年度から毎年開催しています。開催時期は、4年生の就活が終わり、3年生が就活開始に向け情報収集を開始する11~12月頃です。経済学科学生の就職先の大半が民間企業であることを踏まえて、民間企業2名、地方公務員1名の計3名から、最新の就活事情や経験談をお話いただいています。

4年生にはお話しいただくポイントを大きく「準備編」「実践編」「まとめ編」に分け、「準備編」では、自己分析と業界研究の進め方、自分に合った企業の見つけ方、ES(エントリーシート)の書き方など、実際に就活が始まる前の準備について指南いただいています。また「実践編」では、新型コロナ禍の中で面接もウェブ経由に移行していることから、ウェブ面接の注意点・失敗談、ウェブGD(グループディスカッション)の攻略法、就活スケジュールの立て方と優先順位、更には複数社から内定をもらった場合の1社への絞り方について、まさに実践に役立つノウハウを共有いただいています。最後に「まとめ編」では、就活を振り返り、「こうすればよかった」など後悔したことや反省点を後輩に率直に語っていただいています。直近の就活の経験談から失敗談まで、先人のノウハウが詰まった企画です。



# 政経学部の学びの魅力と



本日はお忙しい中でお集まりくださり、どうもありがとうございます。

**田中** ここに呼んでくださったのは、語学の先生方と体育実技という観点からでしょうか？そういう話かなと思っています。

その通りです。是非とも総合教育の観点で「政経学部」についてのお話をお願いします。では、早速最初の質問ですが、これまでの授業やお仕事などを通じて、国士館大学政経学部の特色とはどのようなものだと感じていらっしゃいますか？

**八木** 私は中国語で、齊藤先生は韓国語で、私たちは語学の授業を担当しております。田中先生は体育ですね。そして、私は政経学部の専門科目としては、現代

中国論を担当しております。現在の中国の社会であったり文化であったり、そういったところに焦点を当てながら、授業を行っております。専門は語学ですから、語学的な内容を軸に、現代の中国の社会であるとか、多様性であるとか、現代的なトピックについていろいろお話をすることを見せていただいております。政経学部の特色は、すごく素直な学生が多いこと、そして、しっかりと勉強している学生が多いことです。特に政治行政学科に関しては、しっかりと勉強している学生が多い印象を持っています。

そうですね。政治行政学科の学生ですか？

**八木** そうですね、政治行政学科の学生です。経済学科の授業は、私はゼミで持つことが基本なのですが、経済学科の学生はざっくりばらんで、要領よくやっている学生が多い印象がありますね。政治行政学科の方は、結構、真面目だなという印象があります。それから、政経学部の特徴としては、ゼミを非常に重視しているところがあると思っています。初年次からフレッシュマンゼミナールがあって、2年次には基礎ゼミ、3年・4年には専門ゼミというふうに進んでいきます。そして、それぞれの段階で少人数教育を通して、しっかりと本学の理念を学びつつ、これから社会に出て役立つことを系統立てて学んでいっていると思います。こういったところに政経学部の特色



# 目指す場所



があると感じております。

例えば、他学部の学生たちと比べて、政経学部の学生には何か特色がありますか？

**田中** 明るい、元気がいい学生たちが多くですね。

元気がある。いいですね。

**八木** 国士館というと、どうしても体育のイメージが一般的には強いと思いますし、そういうものを少し反映しているのかなとも思うのですが、政経学部のゼミには高校の時に主将をやっていた学生が結構います。フィジカル面での強さっていうのが、少しあるように感じております。そういったところを活かして教育ができれば

いい、私は思っています。

**齊藤** 私は語学を教えています。どこの学部の学生かというのはあまり意識しないで教えます。ですから、他学部の学生と比べて政経学部の学生がどうというのは分かりません。ただ、多分、他学部も政経学部もそうだと思うんですけど、八木先生がおっしゃったように、フィジカル面が強いこともあって、とにかく出席率が高いと感じています。変な言い方ですけども、他の学校で教えていると、全然ついてこれない学生は辞めてしまうんです。でも、国士館の学生は「とにかく出席する」ということを実行しているように感じています。ですから、出席することが基本的には当たり前になっているのだから

と思います。それから、警察や消防を目指している人が多くて、高校の時からそういう目標を持ってくる学生が多いんだなと感じています。

**田中** 政経学部の特色については、まずはホームページ等で掲載されていることが浮かびますが、それ以外ですと、私自身が保健体育部に所属しているので、体育の観点があります。現在、他の大学では、体育実技やスポーツの授業が選択になっていて、取らなくてもいいような状況になっています。でも、国士館の先代の先生たちが頑張られたということもあって、政経学部では政治行政学科も経済学科も体育実技を必修にしている、なおかつ、2年生以降もスポーツ実習を選択で取れるようになっています。すなわち、4年間を通じて体育・スポーツに携われるカリキュラム編成がされているところが、私としては政経学部の特色なのかなと思っています。スポーツを通じて、他人と協力し合うことや挨拶をし合うことを養っていくことができます。それに加えて、体育実習みたいに1年生から必修でやることによって、友達づくりをする場としても活用できます。そういう意味では、いろいろな学部でもそうなんですけど、初年時に体育を必修化させているところが、政経学部の一つの特色なのかなと感じております。しかも、剣道や柔道などの武道種目も結構多くあるので、そういうのも国士館らしいと感じますね。

他人と協力することは重要ですし、武道科目の充実も魅力的ですね。

では、次の質問です。ご担当の授業で、日頃どんな工夫をされていらっしゃるのか、お聞かせいただけませんか？

**齊藤** ゼミについては、まずはレポートの書き方を1から教えています。1年生にはレポートの書き方と、メールの書き方も教えています。基本的なところを教えないと、名前すら書いてこない学生もいます。ワードとパワーポイントの使い方も、一応、確認しています。といいますのも、韓国語の授業であったことですが、ワードで

文章を作成してくることを指示した時に、「ワードって何ですか？」と言ってきた学生がいたんです。それで、一通り説明をしました。結局、その学生が送ってきたものが、手書きで書いた文字を写真に撮ったものだったんです。これは本当にまずいと思ったんですよ。そういったことで、ワードとパワーポイントはまず簡単に使えるようにしています。

**田中** 私が工夫していることは、体育実技の授業では学生同士で考えさせたり、学生間で取り組ませたりするといったことに重きを置いていることですね。1ヶ月間、同じグループでやることもあるんですけど、基本的にはランダムに日替わりでグループを作って、そして、グループの中の1人をリーダーとします。「今日は君がリーダーね」と指名して、まとめてもらいます。つまり、「まとめ役をやってください」ということでやらせるんですね。例えば、試合の順番を決めさせたり、どういうフォーメーションでいくかということを話し合わせたりするだけなので、大したことはないんですけど、リーダーとしての役割を経験させます。いろいろな人の意見を聞いて、まとめさせる。そして、終わった後に反省を言わせる。このようなことを学生に主体的に考えさせて発言させているんですが、この辺りのことが、授業の中に取り入れていることであり、工夫していることです。

リーダーシップの訓練ですね。

**田中** それから、別の話になりますが、私は去年、特殊なゼミを担当したんです。いわゆるベテランの学生たちのゼミです。とりあえず、彼らとは頻りに連絡を取って、まずはゼミにはこさせることを中心的にやりましたが、学生が来るようになって、少しずつ変化していったのを感じたんですよ。「テーマを決めて発表しなさい」という指示を出して、これをひたすら繰り返す。大きいキーワードを決めて、それに関連するようなキーワードをいくつか見つけて、「じゃあ、今日はここを調べてくるように」ということをやりま



した。中には、何百冊も本を読んでいるような学生がいましたが、一番驚いたのが、本などで得た情報を根拠にして自分の意見を確立していた学生がいたことです。ようするに、論文と一緒にですが、これはすごいなと思いましたよ。人それぞれの能力・個性があると思うのですが、やっぱり何かきっかけを与えてあげれば、思わぬところで本領を発揮することがあると感じました。そういう学生に何かしらきっかけを与えることは重要なんですよね。

こっちら課題を出すと、それに従って向こうは課題を消化して、ちょっとずつ成長していくということですね？

**田中** そうです。そのうち論破されるんじゃないかというぐらいにいろんなことを知っていて、本当に面白かったです。

**八木** 私もゼミの授業ですと、まずは自分の考えをしっかりと言葉にして表現するというのを重視しています。それは私が語学の教師であることと少し関連していますが、しっかりと表現をすることに重点を置いたゼミをしています。何を書くにしても、まずは自分が何かを持っていないと、なかなか書けないと思います。逆に、先ほど田中先生がおっしゃったように、自分が興味のあることが明確になったら、いろいろとこっちも知らないようなことを調べて教えてくれるような学生もいます。こういったことがあるので、興味を引き出してあげることができた授業をするようにしております。

**齊藤** さっきと話が被ってしまうんですけど、なりたい仕事が決まっている子が多いので、それをテーマにすると、割と簡単に決まって行くように感じています。

**田中** テーマは学生の興味のあるものに

にしていて、学生が好きそうな「スポーツ」をテーマにすることもあります。いずれにしろ、最終的に何かを最後作り上げていくことは、すごく力になることだと思います。それから、発表者に対して質問をさせるようにしていますが、後から「質問をしないで」と言ってもなかなか上手く質問できません。ですから、先に「発表者の発表が終わったら、質問をしないで」と言っておくようにしていますし、発表者の内容を忘れてしまうだろうから、メモをとることも伝えています。

メモを取らせる。これはいいですね。学生たちは本当にメモを取らないですもんね。

**田中** スマホのカメラで済むと思っ

**齊藤** 昨年、オンライン上なんですけど、2・3・4年生の交流会をやったんです。縦のつながりを作ってあげることが大切なんだなと、すごく思いましたね。

**田中** そうですね。「縦のつながり」って言いますよね。私は体育学部だったので、部活の先輩がたくさんいて、後輩もいて、それでつながりってあったんですけど、確かに政経学部って、ゼミでしか縦のつながりを作れないですよ。

**齊藤** そうなんですよ。縦でつながることはすごく難しいことなんですよね。

その交流会はZoomのブレイクアウトセッションを使ったんでしょうか？

**齊藤** そうです。今年もやろうかなと思っています。

**八木** 言われてみますと、確かに、フレゼミと基礎ゼミだけでもやる価値はありますね。1年生は2年生に、1年経ってどうかということを知ることが出来ます。

ちなみに、何人ずつぐらいのグループを作るのでしょうか？

**齊藤** 5人、6人ずつのグループに

分けて、各グループには必ず4年生が入るようにします。そして、各グループの4年生が必ず回すようにします。「1回も発言していない人を作らないように気を付けて回してください」と伝えて、それを4年生にお願いしてやってもらいました。私は入らなかったの



で、何を話したかはよく分かっていないんですよ。

**田中** 確かに、そういうことがもっともあっていいですね。本当に縦のつながりはいいですね。他のゼミとのジョイントでもいいかもしれません。いくつかのゼミで卒論の発表会をするというのも、一つの手かもしれません。昔、フレゼミを持った時、永富先生に声をかけていただいで一緒にゼミ旅行をしたんです。ゼミ旅行と言っても、キャンプ場に行っ

てバーベキューをして帰ってくるだけのものですが、あれはよかったですよ。経済学科の学生と政治行政学科の学生との交流ができたので、本当に良かったです。

他学科との学生たちとの交流ができることは、とてもいいことですね。

**田中** そういう交流の場がほしいですね。ゼミみたいな内容でできる交流の場があるといいです。

**齊藤** そうですよ。私は女子大だったので、あまりよく分かりませんが、男子の方が友達を作るのが苦手ですか？

**田中** 多分、苦手じゃないですか。

そうですね。女の子同士だと、すぐに仲良くなりますが、男の子同士だと仲良くなるのに少し時間がかかるんじゃないでしょうか。

では、次の質問ですが、政経学部でどういう学生を育てたいとお考えですか？学生たちにどんな能力やスキル

を身につけてほしいですか？

**田中** 私が思うのは、協調性があるって、リーダーというか、中心的というか、まとめるようなことができる学生を育てたいと思っています。ただ、こちらから指示するだけではなくて、学生自らが積極的に行動する、そこに尽きますね。それは、私も指導教官からずっと言われてきたことです。「自らちゃんと時間を費やして、手を汚して、やりなさい」ということでして、これが私が心がけていることです。

**八木** 確かに口だけだと説得力ないですもんね。

そのために何かやらせていることはありますか？

**田中** 私がモットーにしているのは、私が自分でそれを実際にやることです。周りの先生には「お前はやりすぎだ」というようなことも言われるんですけど、私が実際にやっているところを見せて、学生にも気づいてもらうということを、ずっと心に留めてやっています。

**八木** 私がモットーとしていることは、自立して生きていける人間を育てること、自分の頭で考えて判断できる人間を育てることです。今の時代、ネットで調べたら大体のことは出てきますが、それが本当に正しいかどうかをきちんと判断するためには、正しい知識を得る方法を知らなければいけません。そういったことを日々の授業で学んでもらいたいと思っています。正しい知識に基づいて、自分でしっかりと考えて行動できる人間像、これを意識しながら教育するようにしております。自分で探して見つける力が、最近の学生には不足しているように感じるところがあるので、そういったところを意識しています。

いいですね。学生に自分で考えさせるため、何か工夫しているようなことはありますか？

**八木** まずは、何かしら答えを出させることです。その答えがそ

んなに大したことでもなくていいので、とにかく、まずは考えてみる。そこで何かしらの答えを出させてみて、そこからさらに掘り下げるために、どうしたらいいのかということと一緒に考えていきます。

さらに掘り下げていくんですね。なるほど。社会人になっていくわけですし、より正確な知識を得ること、そして、自立した人間になっていくことは重要なことですよ。

**齊藤** 私の場合は、とにかく比較させることです。自分が当たり前だと思っていることが、他でも本当に当たり前なのかといったことです。ニュースの発表を4年生にもやらせるんですけど、同じニュースについて、日本と韓国のサイトを見て比較させます。例えば、コロナだったらコロナで、同じテーマのニュースでも報道のされ方が違うので、どう違うかを比較して発表させます。もちろん、全部日本語で見ているというのもあるんですが、日本で報道されていることと韓国で報道されていること、「同じことでも違う」ことに気づいてほしいと思い、比較をさせています。八木先生がおっしゃったことに近いかもしれないんですけど、自分で「これは本当なのか？」という判断ができるような経験をさせるようにしています。特に、日本と韓国は似ているようで違うので、比べるといろいろと違います。そういったところに気がついてくれるといいなと思います。

比較させる。これもいいですね。何か他に、こんなものを身につけてほしいといったものがありますか？

**八木** 「比較させる」というのは、多様性に気づかせるということなんです。映画を見ている気付きですが、同じようなことを撮っていても、実はその背景にある「思っていること」、「感じていること」、あるいは「見た人が感じる」とは、実は全然違うことがあるんですよ。そういうのを、私は面白いと思います。そこに至るには、いろんな背景があるわ

けですね。同じものを見ても感じ方が全然違うことがあります。「多様性を理解する」ことに至るものだと思います。

そうですね、多様性の発見に繋がってきます。

**八木** リーダーシップって、先ほどもありましたが、確かに先生がきつとそういう教育をされているから、国士館でも評価されているんだと思います。

素晴らしいですね。

**八木** 実際に、人を引っ張っていくような力を持っている学生が、結構いるんじゃないかと思っています。それこそ、高校の時に主将をやっていた学生が多いように感じております。政経学部の学生は、どれくらいの人たちが部活に入っているんですかね？

**齊藤** 大学は分からないですけど、高校まで部活をやっていた学生はものすごく多いと思います。自己紹介をやってもらうと、高校の部活について触れる学生がいますが、「今のことを言って！」と言い直させることもあります。

**八木** ゼミでも必ず「部活をやっています」って言っている学生がいますし、部活にのめり込んでいる感じですね。必ず何人かいますね。



部活もどんどん積極的にやってほしいですね。

では、最後の質問ですが、政経学部がこれからどんな学部になったらいいと思っていच्छいますか？

**齊藤** そうですね。やはり、縦のつながりとか横のつながりができるといいのかなと思います。多分、横のつながりを作りたいんですけど、フレゼミがあると思うんです

ど、せっかく2学科あるので、フレゼミも学科間で交流してもいいのかなと思います。縦はゼミを持っていれば、無理やりやることもできるんですけど、1年生の時に、2・3・4年生と交流できることがガイダンス中にあってもいいのかなと思いましたね。

サークルはあまり活発じゃないですよ。今年呼び込みができないということがあるとしても、サークルはそんなに積極的じゃないので、学科内、学部内サークルでもいいから、サークルがあってもいいのかなと思います。それは学生がやることなんで、教員がやることではないかもしれないですけど、知り合いができれば、勉学の方も一緒に頑張ると思います。

あとは、希望としては、もうちょっと本を読んでほしいと思います。なぜかと言いますと、文章を書かせる際に、全部ブログみたいにするか、やたら行間を空けてくるかがあります。そういうことはありませんか？段落ごとに行間を空けることもあれば、逆に文頭で一字空いていないこともあります。

**田中** 新しい段落のところの一字分が空けられていないことですね。これはLINEとかメールとかの感覚ですよ。

なるほど。そうですね。

**齊藤** 本じゃなくてもいいんですけど、雑誌でもいいんですけど、紙媒体の文字をもっと見て、眺めてほしいです。内容を理解しなくてもいいから、こういう形なんだということを知ってほしいと思います。

**八木** 最初にこれを言うべきだったかもしれないんですけど、政経学部と言えば、一つよく言われるのは、公務員対策に力を入れていることです。それから、先ほどの教育理念と関係づけて考えるのであれば、私がモットーとしている「自立した人間の養成」と合わせていければいいと思います。つまり、公務員対策に関しては、長期的なというよりも、短期的な成果を求められることが多いと思いま

す。それはそれで大切なことなので、短期的な視野の成果を上げることも目指しつつ、長期的なことも組み合わせさせていただきます。「自立した人間」とか、自分の信念とか、そういったものを形成していくことが重要だと思います。短期的なものとか長期的なもの、2つの視点をバランスよく保てるような学生を養える学部でありたいというふうに考えています。教員としても、それぞれ得意不得意があると思います。私はどちらかというと、長期的な視野を大事にしたいなと思っている教員ですが、一方で、そういった実的な知識や技術というのを大切にするような先生もたくさんいらっしゃいます。ですから、どちらかに偏るというのではなくて、両方とも大事にしていくような学部であってほしいと考えております。

**田中** 国士館大学のイメージは、体育・スポーツに強いというのがありますけど、学生数や教員数を見ても政経学部は多いので、やっぱり中核であってほしいなと思うんですね。国士館を引っ張っていく存在であり、「政経学部を出れば間違いない」というような存在であってほしいと思います。学園の創立は104年と、伝統もあるので、建学の精神を養うための努力を、まずは教員がしなきゃいけないと思っています。教員がすることによって、建学の精神、国士館の教育を受け継いでいくのが重要であると思います。今、ふと思っていたのが、ゼミのつながりとか、縦のつながりとかもあるので、そういう場を發揮できる球技大会をやりましょう。

名案ですね。昔あったゼミ対抗の政経学部ソフトボール大会を是非とも復活させましょう。少々長くなってしまいましたが、本日はお忙しい中でお時間をいただき、どうもありがとうございました



## 政治行政学科の学びの魅力



本日はお忙しい中、お集まりいただきまして、どうもありがとうございます。では、早速ですが、これまでの授業やその他のお仕事を通じて、**国士館大学政経学部政治行政学科の特色**というのは何だと感じていますか？

**古坂** 私がやっている仕事の範囲の中でしか言えなくて恐縮ですが、私は政治学や行政特殊講義などの講義科目を担当していて、他に、学年担任や公務員相談室員をしています。それから、自治体と大学の「社会連携事業」という八潮市と連携したプロジェクトを担当させていただ

いております。その中で政治行政学科というのは、政治学・行政学などの教育・研究者としての先生方と、それを学んでいる学生がいらっしゃるの、社会から見てもその活動と動員されている資源として素晴らしいものがあります。そういう専門知プラス本学の建学の精神である誠意、勤労、見識、気魄のスピリットを持った先生と学生という、まさに社会貢献が求められる時代に、政治学や行政学をベースにしながら貢献できるような、そういう学科の特徴があるのかなと感じております。

誠意、勤労、見識、気魄！

**古坂** あとは、人間性を高めていくということが本学の特徴だと思います。特に政経学部の先生方はとても人間的に豊かで、学生思いだったり、同僚思いだったり、先輩思いだったり、人間的にも温かい人が多いので、そういうのが多分学生にも伝わって、専門知に温かい感情ののっかって、すごい懐の深い学部が政経学部かなと、仕事を通じて感じております。

政経学部の先生方には、私自身も親切にいただいております。

# と目指す場所



**古坂** 公務員志望の学生が多くて、実際に、自治体の職員とか警察、消防になっているOBやOGたちがたくさんいます。警察や消防の現場の人とか、自治体の窓口の人とか、現場レベルで社会を支えている人が政治行政学科のOB、OGたちだと思いますので、社会人になってからも社会貢献し続けているということが特徴かなと感じております。

八潮市との連携プロジェクトとはどんなことをなさっているんですか？

**古坂** 八潮市とのプロジェク

トでは、自治体（八潮市）の抱えている課題の解決を図るために必要な政策を提言するというをやっています。自治体が持っている資源を学生が学生目線で掘り起こして、政治学や経済学などの政経学部で学んだことを通じて、それを自治体の課題解決に結びつけるというプロジェクトです。こうした社会連携事業を通して結果的に、地域での課題解決につながって社会貢献にもなっていくと思います。さらに、学生が自信をつけるという意味でも、社会連携プロジェクトは意味があるのかなという

ふうに感じてやっているところですね。実際に、社会連携事業の話が公務員試験の面接ですと、学生も楽しんでやっているので生き生きと話すんですね。面接官に興味を持ってもらえます。学生のオリジナルのストーリーが出来上がってくるので。人事の人も、これ面白いねとか、こういう苦労してるんだ、ということで評価してくれるようです。

**山田** 政治行政学科は、ご存知の通り、公務員志望者が多く入学してきます。講義やゼミでも将来、公務員を目指す学生のために有益なものがたくさんあると思います。そして、そこで身につけた知識を市などと連携して実践する場も用意されています。そうした本当の意味での知恵を身につけられるのが本学部本学科の特色だと思います。私の専門は憲法ですが、憲法というのは基本的にどの公務員試験の科目にもほとんど必ず入ってくる分野。得点源なので、是非学生には興味を持ってもらいたいですね。

**板山** 私は入職して2年目なので、経験が少なく、お話しできることが限られますし、古坂先生がおっしゃったことと、かなり被ってしまうんですけど。一つは公務員養成に力を入れているということだと思います。私は専門が国際関係、日米同盟、安全保障ですので、防衛省や自衛隊、海上保安庁等を目指している学生に役立つような授業ができればいいと思っています。「日本の安全保障」授業では、実務家の方をお招きして、現場の話を伺う機会も設けておりますので、それもきっと学生にとって役に立つんじゃないかなと考えています。

やはり、公務員養成に力を入れていることが政治行政学科の特色ですね。

**板山** あとは、建学の理念ともちょっと通じるかもしれないんですけど、「活学」という、学問を机上の空論にするのではなくて、それを活かすというような考え方が、本学では大切だということをお伺いしております。やはり、八潮市との連携等、他の先生方の授業を拝見しても、実践的な内容が多いというような気がしています。ですので、私の授業でもできるだけそういうところを取り入れながら進めていきたいと思っています。それから、学科の雰囲気がよく、先生方が協力的だということも挙げられます。去年、一年目だった私を助けてくださる先生が多くて、入職させていただいて非常にありがたいと常に思っているんです。あとは、教育に熱心に取り組まれている先生が多いというのも特徴かなと思います。

板山先生はご担当の授業で、日頃どのような工夫をされていらっしゃいますか？

**板山** はい。去年、オンライン授業が中心になったということもあって、一番心がけたのは、言葉を大事にすることです。私も学部や大学院の辛い時期に、先生方のお言葉に助けていただいた経験をしたので、先生からいただく言葉って、同級生や家族からもらう言葉よりインパクトが大きいことがある気がします。あとは、今の学生は、一人一人が大事に育てられているお子さんが多くて、受験にしる、大学での学びもそうかもしれないですけども、親御さんと二人三脚で取り組まれている感じがします。ですので、私も可能な限り、特にゼミではそうですが、一人一人に心を配ってサポートするような関係を作ることができればと思っています。

一人一人に対するサポートは大事なことです。

**板山** それから、これも言葉と関連するかもしれないんですけども、発言しやすい雰囲気づくりというのを授業では心がけていて。ピリピリしたところで、あえてそこで発言するという訓練も必要かもしれないんですけども、それは他の機会もきっとあると思いますので、私のゼミではどちらかというと安心してリラックスした雰囲気の中で、間違いでも、おかしい発言でも、何でも出来るような。私は、学生の発言の中によいところを見つけて、どんな発言もできるだけ授業の本筋に持っていけるようにと心がけています。また、楽しみながら学ぶということも、学びを継続させる上で必要だと思うので、それを見出せるような授業にしたいですね。あとは、コロナ禍のためオンライン上でのやり取りがすごく多かったんですけど、毎回やさしいメッセージを書き込んでくれる学生たちがいました。コロナ禍ということもあって、私の体調を気遣ってくれたりとか、感謝の言葉とか。一番最後の授業の時に「先生の誇りになるよう、これからも頑張りたい」と、そこまで言ってくれた学生もいて、感動してしまいました。

これは板山先生の人徳ですね。発言しやすい雰囲気づくりって、例えばどんな魔法をかけるんですか？

**板山** 「発言したくなかったらパスでもいいから」と言っていて、一人一人当てていったりもします。雰囲気作りは難しいんですけど、どんな発言をしても受け入れてもらえるという安心感を感じてもらったり、自分なりに考えた意見を交換すると楽しくなることを伝えます。また、学生はどちらかというと、現在の問題に関心があるので、それに結びつけるような授業内容にするよう心がけています。あとは、分かったという楽しみってありますよね。難しいことを分からないでずっと

することはストレスなので、分かる喜び、楽しさを自覚してもらえるような授業にしています。

**山田** 私も憲法や政治制度論などの講義では、実際に、今、政治や社会で問題となっていることに結びつけて理解できるように工夫しています。大学は答えのない学問を学ぶ場ですので、賛成・反対だけでなく、その根拠を組み立てられるようなテーマ設定をしているつもりです。時事的なテーマだと、学生も興味をもってくれます。ただ、抽象的な概念や知識がでてくるとそこで諦めてしまう学生もいるように思います。はじめは難しくてわかりにくいことも、頑張って勉強した先に面白みがでてくる。物事に向き合う際には、そうした胆力がやはり大事だと思いますね。

**古坂** 胆力っていうキーワードはいいですね。

**板山** それはすごくいいです。胆力。それを養成するような教育を。

胆力を身につけさせるような教育ができれば素晴らしいと思います。

**古坂** 苦勞して学んで、楽しいなど。

**山田** それから、自分の意見を述べる際に根拠を示さない「べき論」だけで話す人がいますよね。政策的なこと、ただ「自分はこう思う」と言うのではなく、なぜそう考えるのか、土台となる知識や情報を踏まえて理解を掘り下げたうえで自分の意見を組み立てる、そういうスキルを学生が身につけられるような教育が大事だと思います。



**古坂** それは重要な指摘ですよ。エビデンスを持って、根拠を持って議論したりとか。そういうスキルが身につけられたら学生がもっと自信を持つとか、そういうことですよ。そこをメッセージとして伝えて、厳しい言葉をかけながら、でもそうやって根拠を持って議論しないと、薄っぺらくなってしまふよ、と。ちゃんとしなくちゃいけないということも教えて行くのも必要なのかな。



**板山** そう言えば、昨年からは公務員相談室のお仕事を担当させていただいているのですが、先生方が小論文や面接対策等、何度も繰り返し指導していらっしゃるのを拝見して、素晴らしいと思いました。

**山田** 文章を書くのが苦手な学生が多いので、書いて直してもらってを繰り返しながら、少しずつ作文に慣れていってもらう必要がありますよね。

**古坂** また、公務員相談室では、そのプログラムの一つとして、「公務員塾」と称した学生の主体的な学びを促進することを目的とした自主勉強会を開講しています。これは公務員志望の学生が週一回程度、公務員相談室などに集まって、数的処理などの公務員試験科目と一緒に勉強するという取り組みです。この「公務員塾」からは、国や自治体職員、警察・消防官などの多くの合格者を輩出しています。当初は自ら学ぶ意欲や習慣があまりない学生でも、他の公務員を志望する意識レベルの高い学生たちに引っ張られて、継続して試験勉強ができています。

**山田** 私がゼミ生にいつも

言っているのは、憲法それ自体の理解よりも、憲法を勉強する過程の中で、自分が分からないことが世の中にはあるんだということを認めるところからはじめて、それを分かるようにする努力をせよ、ということです。「先生、全然、意味分からないです」と、そう言いながら一生懸命、自分なりに調べて発表したり、毎回授業に出席して質疑応答で積極的に発言したりする学生は、おのずと自分の言葉を話せるようになる。将来、自分のフィールドで、きっと突き抜ける力があるなっていくのを感じます。

**板山** 人から言われてっというのじゃないですよ。

**山田** そうですね、どこかで気づかないといけませんよね。だから、こういう話も学生によってはなかなか伝わらないこともあるんですが、勉強が苦手でもそれを自覚して一生懸命やっている学生には、今みたいな言葉をかけるとすごく明るい表情になる、笑顔を見せてくれるから、やはり言ってよかったのかなと思います。

**板山** あとは、その時は分からなくても、あとで経験して、「先生の言葉は正しかった」とか、そういうのってありますよね。

**山田** 他にも、礼儀や誠実さも大事ですよ。遅刻や無断欠席をしないとか。

**古坂** 礼儀正しさもひとつの能力ですよ。それは力だから。

**山田** 人として大切な礼儀や誠実さというのは、その人の教養や品性が土台になっていますよね。人生においては、知識や能力も大事ですが、そういった人間力も大事だと思います。政経学部の理念と目標にも出てくる言葉ですよ。それで人生が開ける

ということもあるんじゃないでしょうか。またこれと関連して、人の話の聞き方、コミュニケーション力も重要ですよ。たとえば授業やゼミの発表で、わからないところをメモして質問する力、これを身に着けることはとても大事だと思います。社会にでると、質問しないということは、ちゃんと聞いていない、あるいは話(相手)に興味がないとみなされてしまいます。そういうことも学生には話しています。憲法自体を勉強するというよりは、憲法を一つの題材・手段として、そういう人間の地力の部分を養ってほしいないつも願っています。

今、とても重要な言葉「人間力」が  
出ましたね。

**古坂** さっきの「気づいてもらう」ということですよ、気づきかけをどこかで作ったりとか。例えば、同世代で礼儀正しくて、それがいいことなんだという見本になる人を見つけたとか。そういう気づきのところのちょっとした工夫をたくさんばらまいてあげることが、ゼミとか授業でできればいいんでしょうけど。あと、板山先生がさっきおっしゃったけど、言葉の掛け方ってすごく重要で、でも難しいんですよ、ゼミで真剣勝負で学生と向き合って話しているんですけど。

授業で工夫されているところで  
すね。



**古坂** そうですね、ゼミでいうと、一人一人の個性をいかに伸ばすかということで。個性を引き出すために、今、話したように先輩・後輩の関係をうまく作るとか、人間の関係性から認識してもらって、足りない部分とかを気づいて

もらうっていう。そういうの、なかなかできていないですけども、そういうことはゼミで心がけてやっています。

人間の関係性、これは本当に重要  
ですね。

では、次の質問ですが、政経学部  
政治行政学科でどういふ学生を育  
てたいと考えていらっしゃいますか？  
学生にどんな能力を身につけてほ  
しいとお考えでしょうか？

**山田** ゼミなどでは基本的な知識を身につけたうえで、そこに自分なりの思考や判断の論拠を示して付け加えてもらっています。そうした情報活用能力というのは、現在ネット情報が氾濫する時代において、特に重要なスキルだと思います。社会人になって様々な仕事に従事するようになって、そうした力は必ず役に立つと思います。

**古坂** 自分で考える力ですよ。言われたことをただそのままではなく、自分でこの部分は取り入れようとか、でもこれはちょっと自分には合わないからやめようとか、そういう工夫って社会人になると必要になってくると思うので、今のうちから、ただ「言われたからやります」じゃなくて、自分で考えて、自分で責任を持って行動できる力、人間力の一部なのかもしれませんけど、そういうことが身につけられたらいいと思います。

**板山** かなり重なってしまうんですけども、古坂先生がおっしゃるように、自分で考えて決断をして、自分なりの人生を切り開いていけるような力を身につけてほしいです。また、今の学生のうちも、社会人になってからもそうだと思いますけど、周りの人達との関係が大切だと思いますので、周りの人を思いやって行動できるような人であるとか。あとは、結果を出すには、ある程度、長期的に継続して何かを行うということが大事

で、その人の能力というよりも、ただ続けなかったからできなかつたことってあると思うんですよ。だから、継続的に努力することの大切さを伝えていきたいと思います。

**山田** そういう意味では、学生たちに何かしら大学で学んだ付加価値をつけて卒業させるというところは、すごく課題だなと思うんですよ。

**古坂** 公務員相談室の広報活動として、希望する自治体に学生が合格しましたとか。毎年四年生から「〇〇市役所に合格しました」とか「〇〇県警から内定をもらいました」という連絡が入ります。相談員としては、こうした合格者の体験記を積極的に情報発信することで、近い将来の自分のちょっと先の目指す方向性が明確になったり、継続して学ぶ意味がはっきりしたりすると思います。今現役公務員として活躍しているOB・OGを含めて、そういう情報をもっと発信できたら、政経学部のよさがより伝わると思うんですよ。そこがまだ十分に伝えきれていない。

**山田** 公務員試験というのは、大学の垣根をこえた他流試合ですから、そこで合格できれば一気に自信につながるとは思うんですよ。だから、そういう情報発信をもっとできれば、国士館でポジティブに努力して何かを達成しようという気持ちの芽みたいなものも育まれるかもしれない。だから、古坂先生のおっしゃるような情報発信をもっと早い段階、1年生の時からやっていって、「こんなに成功している先輩たちがいるんだよ」ということを伝えていけたら、早いうちから学生たちもやる気がでて、そのやる気も持続するんじゃないのかなあ。

**古坂** 政経学部のOB・OGには、本当に、首長さんもいらっしゃるし、地方議員さんもいらっしゃるし、大学の研究

者もいるので、そういう情報をちょっとずつ載せて、こういう方向性もあるし、いろんな可能性があるんだと、1、2年生の早いうちに示してあげればよいですよ。要するに、学生たちにとって自信につながるようにしていけばよい。これからそういう情報発信のところを、政経学部、特に政治行政学科、公務員相談室もそうですけど、強めていくと、少しモチベーションを上げてくれる学生が増えるんじゃないかと期待していますけど。社会連携ももっと情報発信をすると、自治体の方から政経学部と「連携しませんか」、「手を組んで何か研究をしましょうか」、とか。そういうふうになるとすごくいいし、そこに参加したいという学生が来てくれると、なお、いい循環が生まれると思います。

私も国士館大学政経学部のOB・OGには素晴らしい方々がたくさんいると思っております。板山先生、最後にどうでしょうか。

**板山** 国士館大学には、歴史的に培われた硬派なイメージがあって、それは大切にしていきたいと思うのですが、そのためか、男性が多く、政経学部もそうだと思います。ただ、実際は、女性にとっても居心地のいい環境だと思いますし、政治行政学科が力を入れている公務員は、女性にとって比較的働きやすい職場が多いというふうにも聞きますので、そういう意味でも、公務員の養成に力を入れている本学科に、女性にもっと来ていただけるとよいなと思います。



お忙しい中で、どうもありがとうございました。今日はとてもよいお話が聞けて、私も大変勉強になりました。

## 経済学科の学びの魅力と



お忙しい中お集まり下さり、ありがとうございます。早速ですが、これまでの授業やその他のお仕事を通じて、先生方が感じていらっしゃる経済学科の特色は、例えばどのようなことがありますか？

**貫名** 私は経済学を教える時まず初めに、学生に「経済」の語源を教えています。「経済」とは「経世済民」という漢語に由来しており、「世をおさめ、民をすくう」という意味になります。私の解釈では、「世の中の仕組みを知り、人々を豊かにする」、もしくは「人々を幸せにする」という意味になります。それは国士館の建学の精神である、「国を想い、世のため、人のため

に尽くす人材」と一致する内容だと思っています。つまり、経済学科で深く、広く学ぶことは、知識だけでなく人間性も高まるし、国士館の精神にもつながる、という気持ちを込めて授業に臨んでいます。

なるほど。これは私も見習うべき実  
にいい特色だと思います。

**加藤** 国士館大学は使命として、社会の中核になる人材を育成している大学だと考えます。その意味で、まさに広く社会に貢献する「国土」を育成しているのだという責任感をもって教育にあたらないと感じます。在学中には幅広い教養を身に

つけて欲しいと考え、専門科目、総合科目問わず最新の理論であったり、ケーススタディを取り入れ、自ら主体的に考える内容を心がけています。現代ではスマートフォンで調べれば、すぐに「答えらしきもの」に辿り着くように見えますが、果たしてそれが「答え」なのか、そもそも「答えがあるのか」といったことも含めて、学生には自ら考える力を持って欲しいと考えています。

最新のものの取り入れは重要なことですね。具体的なお話をありがとうございます。

**北村** 他の学部の1、2年生



# 目指す場所



に比べて経済学科の学生数は多いです。しかし、学部の特徴が感じられるかという、難しいところです。他の大学にも見られるように、経済学はマスな教育の学科、或いは学部だと思います。突出した特徴が何かと聞かれると、なかなか答え難くもあります。

**貫名** 確かに経済学科としての特色は難しいですが、学部として特色を出せばいいのではないのでしょうか。全国の国公立問わず多くの大学には経済学部はありますが、「政経学部」を持っている大学はそれほど多くはありません。経済学的な視点か

ら政策決定をどうしていけばいいか、政治学・行政学的な視点から経済の諸問題を解決するためにはどうすればよいかなど、政治行政学科と経済学科の科目を横断的に学ぶことによって学生は視野が広がるのではないかと思います。

「経済」だけではなく、やはり、強調されるべきは国土館の政経学部ですね。

次の質問ですが、担当されている授業、講義、ゼミ、実習などでは、日頃どのような工夫をされていますか？

**加藤** 私は国土館大学はやはり社会の中核を担う人材

の育成を社会から求められていると認識しています。従って、より理論的な内容に加えて、実学的な内容も意識しているのはゼミでも講義でも変わりません。もちろん、学問の理論的な部分というのは非常に大切で、それらがベースとなり実社会ではさまざまな応用がなされています。現代は大量の情報が、とてつもない速度で伝達する社会で、それに伴って社会構造が著しく変化しています。かつては緩やかだったパラダイムシフトが速まっています。そのあたりを意識して柔軟な内容とするよう心がけています。

実学的な内容について、授業で取り組まれているものはありますか？

**加藤** ゼミではケーススタディやアクティブラーニングを積極的に取り入れています。また、タイヘスタディーツアーとして引率したこともあります。

タイではどのようなことをされましたか？

**加藤** 現地の学生との交流を大切にしています。国土館の学生たちには、現地の学生がどういったことを学び、どのような関心を抱いているのか理解してもらうため、実際に講義を受講してもらうなどの取り組みを行っています。つまり、学生に「体験」してもらうわけです。教科書や講義からだけでは学ぶことができない貴重な「体験」を得ることができます。政治行政学科の鈴木佑記先生と一緒に、学科の垣根を越えて実施しています。そういった意味では、学科の壁を越えた学びもあるわけです。とにかく、自分の肌で感じてもらうことが重要なことだと考えています。

ちなみに加藤先生もタイ語を話されるのでしょうか？

**加藤** 「こんにちは」くらいしか言えません。鈴木先生に計画していただき、これまで2度行きましたが、私自身にとっても多くの学びがありました。鈴木先生は徹底的に学生自身が主体的に学ぶことができるよう全体を設計しており、例えば食べ物も、より現地の人の生活に近い、いわゆる観光客向けではないものを学生に体験させます。どの国でも、観光目的で行くと、ある程度産業化されたものを体験することになります。もちろん、そこにも学びはあるのですが、現地の文化や価値観を学生自身が「体験」として主体的に学ぶというのを大切にしています。

それは重要なことだと思いますし、いいお話ですね。

**北村** 私が工夫をしていることは、まず、受講生が参加意識を持てるようにする、ということです。教員の話の聞いているだけではなくて、ちゃんと自分の頭を働かせて、自発的に参加しているという意識が持てるように試行錯誤しています。あとは、教える私とちゃんとコミュニケーションを取っていると感じてもらうように工夫しています。そこで、自分の頭で考えながら受講できるような授業構成にしています。私の場合は統計学や数学、数理統計学なので、自分で考えるということと、参加意識をもつためには、結局は問題を解いてもらうという形式になりますが、説明の段階でただ話すだけでなく、説明しつつ問いかけをして、なぜそうなるのかを考えながら説明をきいてもらうように工夫しています。なぜそうなるのか理解したうえで、自分の頭で考えて問題に取り組むという流れになるようにしています。

それから、私の科目の特性ですけど、統計学の記述統計の部分は19世紀に出来上がっているものです。ま

た、推測統計は20世紀に、そして確率論も20世紀に基礎ができあがっているの、そこは大学の統計学として標準的な内容を網羅するようにしています。現在では殆どのがデータとして記録されているので、スポーツやマーケティング、株価など身近な例で統計学がどのように利用されているかを示し、興味をもってもらうように工夫をしつつ、スタンダードな内容を理解してもらえるよう心がけています。

ゼミに関しては、徹底して自発性と考える際の客観性を尊重しています。また、学修の修得状況について「増分」で捉えるようにしています。それぞれの学生が今いる位置からどれだけ伸びたかで、一人一人の達成度を捉えるようにしています。

特にゼミではどんなことをされていますか？

**北村** 私のゼミは卒業論文を2年かけて書くということが決まっています。3年生の春に、こちらから学修内容を提示し、それぞれにプレゼンテーション形式で学修してもらいます。ただ学修するだけでなく、誰かに向かって物事を論理的に喋ることで、内容の定着や気づきにつながります。春学期にこのような準備をして、秋からそれぞれのテーマを決めて、そのテーマについてパワーポイントにプレゼンの中身をどんどん足していくという感じで、内容を深めていきます。論文を書くのに必要なパーツが組み立つように、プレゼンを進めてもらって、最後に論文を書いてもらう、ということをしています。

論文のテーマというのは、先生の統計学ですか、数学ですか。そういったものですか？

**北村** 何のテーマを選んで、概ねデータを集めて傾向を見るという形式になります。テーマの中身は様々です。韓国K-Popアイドルのことを調べたり、鬼滅の刃のことを調べていたりする学生もいます。ただ、鬼滅の刃などは殆どデータがありませんから、その場合には文献とか、今ある資料を整理する論文となります。いずれの場合も論理構成をしっかりとすることは指示しています。

今流行りの鬼滅の刃ですか。思っている以上にいろいろなテーマがありますね。

**貫名** 私も専門分野が統計学ですので、計算をさせるという「体験」を念頭に置いています。例えば「相関係数」とだけ授業で説明しても、学生には簡単にイメージできないでしょう。その数字にどのような根拠があるのか、どのような式に基づいて結果を導き出しているのか、という流れを一つ一つ順序立てて計算できるようになっていけば、最初はイメージできなかった相関係数というものが体験によって理解できるはずです。

他にも、計算だけではなく、身近な事例を「体験」として取り入れています。国内総生産(GDP)の速報値は、3ヶ月に一度必ず発表されます。そのデータが発表された時に、学生たちが無意識に新聞やニュースを見ているだけであれば、ただ「通過しているだけ」になるでしょう。しかし、授業内でタイムリーに取り上げることで、GDPとはどういう意味があるのか、その数字はどのように成り立っているのかなどを改めて理解しやすくなる。そして、「あなた自身もこのデータに必要な人間なんだよ」と説明をする。最初は難しいとか自分には縁遠いと思っ

ていることも、授業を通した「疑似体験」として捉えることができれば自分ごととして理解が深まると思われ授業を組み立てています。

次はゼミです。私は地方の出身者なので、「東京には何でもある」と思っています。例えば、株のことであれば東京証券取引所、統計のことであれば統計資料館、金融のことであれば貨幣博物館など、経済に関わる施設だけでも数多くあります。コロナ前はそういう所へゼミ生と行っていました。実は、東京出身の学生でもそういう所が東京の中にあるって知らないんですよ。そういう所に行くことによって、学生自身も経済のプレイヤーである意識づけができる。疑似体験であったとしても、若い時に体験できたことは、将来、どこかで財産になって発揮してくれたらいいなと思っています。

お恥ずかしながら、東京出身の私も統計資料館の存在を知らなかったのですが、やはり学生たちを連れて行く喜びますか？

**貫名** ちょっとした遠足の気持ちにもなるし、小学校とか中学校の時に工場見学に行った時のような気持ちになってくれています。経済という目に見えないようなものも、実は目に見える場所がありそこで学べるということは、素直に喜んでくれています。

ゼミ生全員が参加しますか？

**貫名** 概ね参加してくれれます。また、コロナ前にゼミ旅行として広島へ連れて行ったこともあります。先ほどとは逆に、都会の学生は地方経済のイメージが湧きにくいので、「町おこし」とはこのようにやっていますよ、と口頭で説明してもわかったようで何もわからないのではない

かと思います。イベント当日にその現場に行き、実際に参加させることによって、他では得られない大きな意識づけができます。具体例を見せ、自分自身で体験することによって、地方では地方なりにいろいろともがいていることが分かってもらえます。

また、原爆ドームや資料館にも行き、広島原爆についても学ぶ機会を与えました。約75年という期間でどれだけ復興・成長できたのかということは、本で学ぶよりも広島でしか感じられないことでしょう。実際に広島の地を訪れ現場の空気に触れることによって、考えが変わった学生もいました。

いいお話ですね。私もたくさん場所へ学生を連れていきたいですし、実際に「見て感じる」ことは本当に重要なことだと思います。

さて、次の質問です。これまでと少々重なってしまうかもしれませんが、国土館大学政経学部で、あるいは政経学部経済学科で、どういう学生を育てたいとお考えでしょうか？学生たちにどんな能力やスキルを身につけてほしいと考えていらっしゃいますか？

**北村** まず、大学が掲げている「世のため」、つまり、社会に貢献するというのももちろんですけれども、社会に貢献するためには、自分の頭でちゃんと物事を考えられるような人間になっていただきたいというふうに思います。いろんな情報がありますけれども、その中でちゃんと適切な情報を自分で見つけて、自分で考えて適切な判断ができるという人になって欲しいと考えます。不適切な情報に踊らされて、不適切な判断をすれば、それは社会貢献にはつながりません。例えば、マジョリティが常に正しい訳ではありません。本当の意味で社会に貢献するためには、何が適切かを自分で判断し、そして行

動できる、ということですね。

あとは、私は国士館の四徳目の「誠意、勤労、見識、気魄」、これは何をやるにおいても、重要な要素だと思っています。ですので、誠意、勤労、見識、気魄という観点で物事に取り組む人になってほしいと思っています、何か具体的な能力やスキルを身につけるといよりは、四徳目のマインドで取り組めば、望む能力やスキルは自然と身につけられると考えています。

**貫名** 四徳目である「誠意、勤労、見識、気魄」を備えるというのは、人間として生きる最も基本的なことだと思います。また、四徳目を備えるための「読書、体験、反省」を実践し「思索」という行動は、よくよく考えたら「PDCAサイクル」と全く一緒ですよ。Planを立てるためには読書で知識が要るし、Doは体験そのものだし、反省はCheckだし、Actionは次への行動に対する思索である。国士館の精神を身につけ日常から意識をした行動をすれば、自ずと人間力は身につくよ、ということです。またよく言われる「コミュニケーション能力」ですが、ただ話すだけじゃなくて、書く能力も大事であって、さらには、あらゆる世代に伝えなければならぬということも教えています。「同世代に対してうまく話ができる」じゃなくて、「誰にでもちゃんと論理立てて伝えられる能力」というのが必要です。また、伝える力ばかりではなく「聞く力」も必要です。相手から何が求められているのか。自分の意思を押し通すだけではなく、他人の意見を聞きしっかり受け止めて物事を考えていくことも大切な能力です。

**北村** コミュニケーション能力については、ノリがいいとか空気が読めるとかというのを

コミュニケーションだと思っている人が多いですが、そうではなくて、配慮ですよ。人や物事に対する配慮が、結局はコミュニケーション能力だと考えます。配慮することとは想像力が必要で、想像力を働かせるためには、その時に適切なものが何であるかを自分で判断できなければなりません。ですから、コミュニケーション能力を身につけてもらうということは、物事を正しく理解できる人になってもらいたいということですね。

**加藤** 大量の情報が溢れている時代ですから、自ら考え判断するというのが難しい時代になっているのかもしれない。また、自分にとって正しく感じられるものであっても、他人の視点では異なる。このような基本的な概念すら忘れがちになります。物事を一側面だけで見ると、非常に視野が狭くなってしまいます。答えが一つではないことも数多くありますし、場合によってはそんなものないケースもあります。状況に応じた適切な判断ができる人材になっていって欲しいと思います。

**人に対する配慮に、聞く力に、状況判断、いいお話ですね。**

**最後の質問になります。政経学部はこれからどのような学部になればいいと思っていच्छいますか？**

**加藤** 政経学部はその名の通り、政治行政と経済に立脚しており、大学としてはいわゆるスタンダードな学部です。一方で、「定番」であり続けるためには、社会のさまざまな変化に、柔軟に対応していかなければ「定番」たりえないと考えます。「定番」であり続けるために、社会のニーズやパラダイムシフトを敏感に捉える学部であり、また教員でありたいなというように思います。

**北村** すごく共感します。定番であるためにはアップデートをし続けなければいけないと思います。よく出てくる話ですけども、「とらや」の羊羹みたいに定番といつつ、実は時々味を変えて存在しているわけで。それに加えて、アドミッションポリシーのペブリケーションをきちんとすることですね。準備をしてくる学生がたくさん入ってほしいですし、国士館大学の政経学部がどういう学生に来てほしくて、そして、ディプロマポリシーですね、どういう人を育てたいかということをしちゃんと理解して入ってきてほしいです。

**貫名** 私も常にアップデートし続けることが必要だと思います。伝統的な学びを提供することに加えて、新しい経済学の学びを提供することも大事です。現在の経済学科のカリキュラムを見た時に、例えば、ゲーム理論も都市経済学も地域経済学もありません。あるいは、ファイナンス分野も北村先生がご担当可能であるのに、科目として存在していないというのはもったいないです。時代の変化に応じてカリキュラム変更もできた方がいいかなと思います。さらに、最初にも述べた政治行政学科と経済学科の垣根をもっと緩くして、経済学科の学生が政治行政学科の科目を、政治行政学科の学生が経済学科の科目を取りやすくした方がいい。私の担当している経済統計学は、政治行政学科の学科科目となっていないからなのか、政治行政学科の学生はほとんど履修してくれません。学科を横断して履修しやすくするような仕組みも作っていかなければなりません。

**そう思いますね。結局、専門科目の講義って、自分の学科の学生しか**

**いないですもんね。私としまして、両学科の学生が混ざっていたほうが面白いと思います。**

**貫名** そうですよ。それと教員同士も、もっとお互いのことを知る場っていうのを作った方がいいと思っています。例えば、研究分野であったり、人となりであったり、何かもっと勉強会のような形で、お互いのことを知って、私は大事だと思っています。研究室の中に入ってしまうと、なかなか横のつながりがありませんからね。

**では、来週は記念誌の座談会ではなく、「世間話の会」を開きたいと思うので、ご出席の程をお願いします。というのは置いておきまして、では、60周年ということで何かありますか？**

**貫名** 今年は60周年だから、あと40年で100周年。100周年を迎える時って、2061年ですね。その時にも「政経学部」という看板が残っていたらカッコいいよね。学科構成や教育内容は大きく変化してもいい。例えばデータサイエンス分野が入っているといい。加藤先生の情報分野なんて、AIに食われてしまっているかもしれない。その頃僕たちは何をしているんだろうね。でも40年後って僕たち誰もいないだろうけど。

あとは、今回のコロナ禍での対応でよく分かったけど、対面授業とオンライン授業の両立は避けて通ることはできないでしょう。今から40年間、対面授業だけで生き残るってこともないでしょう。この先の40年にどのような変化を遂げるのか、とても楽しみです。

**ありがとうございます。では、そろそろ終わりにしたいと思いますが、いろいろいいお話が聞けて、私自身、勉強になりました。お忙しい中、長時間に渡って、どうもありがとうございました。**

# 政経学部創設60周年記念

## 記念講演会



### 開会の挨拶と 政経学部の現状説明



司会  
政経学部経済学科  
主任 熊迫真一

ただいまより、国土館大学政経学部、創設60周年記念講演会を開始いたします。私は本日の司会を務めます、政経学部経済学科主任の熊迫です。よろしくお願い申し上げます。

国土館政経学部は、昭和36年、西暦1961年に創設されました。今年が創設60周年にあたります。それを記念して講演会を開催することとなりました。

当初、ここ世田谷キャンパス多目的ホールに、ご講演の皆様やご来賓、学生が一堂に会し盛大に実施する予定でしたが、新型コロナウイルスの影響に鑑み、リモートでの開催に変更させていただきました。また、一部の内容は事前に収録されたものを使用いたします。予めご了承願います。

それでは、開会の挨拶と政経学部の現状説明に入ります。

最初に、大澤英雄理事長のご挨拶です。こちらは事前に収録させていただいております。それでは映像のほうをよろしくお願い致します。

#### 【大澤英雄理事長】

まずは創設60周年、本当におめでとうございます。

私も学生と一緒に、また政経学部の教職員とともに、一堂に会してお祝いに参加したかったのですが、そういった企画ができないことは、残念な限りです。おそらく学部の教員・職員の皆さんは、この60周年を迎える1年、あるいはそれ以上前から準備を怠らず頑張ってきたと思うんです。しかし、コロナ禍のため、やむを得ず一堂に会することはできなくなってしまいました。これは本当に残念なことです。

今回のご挨拶の依頼を受けまして、前回、50周年の記念誌を少し読ませていただきました。そして、その時の私のご挨拶文を振り返ることができましたが、「あー、こういうことだったんだな」というふうに思いました。50周年の時は未曾有の東日本大震災があった時になります。その時も今回と同じように企画通りにはいかなかったことを思い出したんです。しかし、私は常々、「ピ

ンチをチャンスに繋げるんだ」ということを強く思っております。ですから、そういう意味合いで考えるならば、50周年、そして60周年と、企画通りにいかなかったんだということについて、学生たちには50周年・60周年が記憶に強く残るものであろうと、前向きに捉えております。

先程申し上げた通り、教員や職員は1年以上前から企画に沿って準備してきたことと思います。そして、一気にこの方向を変えざるを得なくなったことに対しては、本当に残念なこととは思いますが、しかし、予定通りにできなくなった以上は、動画やオンラインを使った形で、今できる形で進めることが一番だと思っています。

学生もそうですが、教職員の方々にも、これを「記念すべき記憶に残る60周年」というふうに、強く記憶に留めていただきたいと思っています。これが冒頭、私からのお願いでございます。

さて、私は昭和31年からこの学園でお世話になっております。短大・体育科の学生として入学しましたが、その後、体育学部が設置され、卒業したのが35年でした。そして、政経学部が開設したのが翌36年です。ちょうど私が創立者にいわれて、ここで恩師たちの授業のお手伝いを始めた頃です。助手という初めての公務に従事させていただいたのは60年も前のことです。随分と昔のことですが、私はその時に感じたことを、今でも鮮明に覚えているんです。

学内に2つの学部ができたことによって、当然のことながら学生の数は倍加しました。しかしながら、学園の状況としては、それ以上の変化があったんです。それは学内が非常に活気づいたことです。そして、長男・次男という表現をしていいかわかりませんが、私は親しみを込めて、体育学部を長男坊、そして政経学部を次男坊といわせていただいていたんです。つまり、長男坊の体育学部のみではなく、次男坊の政経学部が誕生したことによって、次男坊と共にやっていくことになりました。長男坊と次男坊が一緒のこの学園が、非常に活気に溢れていましたことを、今でもよく覚えているんです。

理事長

名誉教授  
**大澤 英雄**



学長

**佐藤 圭一**



政経学部長

**岩元 浩一**



私は体育学部でサッカーを専門としてやってきましたが、政経学部が誕生したことによって、大変な勉強をさせてもらったのです。昭和36年というのは、私はまだ現役のプレイヤーを半分、そして指導者・見習いコーチとしての役割が半分、こういった私自身のこれからの本分をはっきり定めながら行こうとする最中でした。それまでは体育学部だけの中でクラブ活動に従事してまいりました。しかし、政経学部ができたことによって、学園だけでなく、クラブの雰囲気もものすごく変わったんです。

私は指導者としても初心者でしたから、当時は、クラブ活動は体育の学生がやるのが主であろうと思い込んでいました。実際に、体育の学生が主であることは間違いないんです。しかし、「座学、座学、座学」でやっている政経学部の学生と、「実技、実技、実技」でやっている体育学部の学生が、ある時間から合体する活動へと変わり、これが日々のスケジュールになっていったんです。

そこで現れてきたことが、体育学部の学生は何をやるにもスタートにギリギリ間に合って参加してくるということでした。逆に、政経学部の学生は、部員全体の数からすると圧倒的に少なかったんですが、練習の開始時間から30分あるいは1時間前からその活動の準備に入っているということがありました。「なんでこんなに違うんだろう？」と、私は考えましたね。

そして、気づいたことは、体育学部の学生は汗を流すことに既に飽きていたということです。昭和36年の当時は、朝の8時から授業をやっていました。午前2コマやって、午後1コマやって、そして、4コマ目がクラブ活動だったんです。そうしますと、1日のうち、汗を流して動き回ることに対しては、体育学部の学生は、もう食べ飽きていたんです。逆に、政経学部の学生のほうがはるかに新鮮なんです。今まで「座学、座学、座学」をやってきて、政経学部の学生には「よし、ここでもって自分の好きなサッカーをやるんだ」という意気込みがありました。これが体育学部と政経学部の違いだったんですが、最初の半年くらいは、本当に訳がわからない状態だったのを覚えております。

この「食べ飽きている」ということは、昭和36年を期して、体育学部と政経学部が合体した形で活動をしている中で気づいたことでした。体育学部の学生よりも、政経学部の学生のほうがはるかに食いつきが早かったんです。その結果、政経学部はそれぞれ政経の専門の中で、卒業生は立派に成功している方々がたくさんいました。さらに、体育学部がありながら、政経学部の卒業生には、スポーツ界で活躍した人も結構多かったんです。

政経学部の学生は、練習が始まる1時間前から来て、その準備ができています。更には、靴の紐一つ結び付けるのであっても、政経学部の学生は1分かからずになんかできてしまう。一方で、既に運

動に食べ飽きてしまっていた体育学部の学生は、紐を結ぶのに5分、10分かかってしまう。そして、笛が鳴ってから初めて立ち上がって集まってきて説明を聞く。もっと言いますと、目の輝きが違ったんですよ。これは決して体育学部の学生が怠け者という意味ではないんです。

やはり人間の集中力の持続は、こういうところに限界があるんだということを改めて学びました。従って、我々はこれから体育学部の学生と政経学部の学生が混ざった状態で、どうすればいいのだろうか。このような差がある状態で、どうやって最大限に効果的なトレーニングが、あるいは、的確なコーチングできるかということを考えました。

その結果、時間を変えることしかないという結論に至りました。政経学部の学生には少し待たせることになりますが、体育学部の学生にもその時間を最低60分は空けることにしました。今までの授業は、陸上競技、柔道、あるいはボールゲーム、いろんなことをやり過ぎて、これから大好きなサッカーをやるんだけれども、どうしても今一つ、政経学部の学生にはかなわない。私はまだ指導者の初心者ではあったんですけども、この「集中の持続！」ということ踏まえて、トレーニングのメニューと時間帯を考えなければならぬこと、そして、コーチングするべきだということに気がついたんです。

昭和36年政経学部と体育学部が一緒になって、あの明るい活気のある雰囲気が出てきたことを、今でも本当に良く覚えております。それから、1日のある時間、例えば120分。この120分の自分たちが政経学部も体育学部も一緒になって一番好きな競技、スポーツをやっているグループの集中力の違いが顕著にあらわれていました。私は随分と若かったのですが、今になって考えてみますと、「生きた学びをしたな」ということを、つくづく感じている次第です。

「集中力の持続」、これは自分の仕事である、サッカーを教えるということ、そして、みんなと一緒にそれを共同の研究者として新たな開発をしていくんだということを考えるに当たって、非常に重要なことでした。やはり、人間の集中力の持続には限度があるんだなということは、今でもいろんなところで活用しております。

最後になりますが、学生たちには、「自分の中にある知らない自分」を、できるだけ早いうちに見つけてほしいと思っております。

自分自身を深く見つめ、周りの刺激に触れることによって、自分の眠っている才能が目覚めることがあります。「自分の知らない自分」です。これは何か環境が変わる時に、自分にとって力になるものです。つまり、自分の武器になるようなものですから、自分にとって一番得意とする部分を伸ばしながら、まわりからの刺激



を受けることで、もっともっと豊かな毎日にしてほしいと思っております。

これを私の60年余の指導者、監督、あるいはコーチとしての学びの中から、政経学部創設60年の記念日にお伝えする言葉にさせていただければありがたいと考えております。ちょっと長くなりましたけれども、ここで終わります。

続きまして、佐藤圭一学長のご挨拶です。佐藤学長、よろしくお願ひいたします。

## 【佐藤圭一学長】

皆さん、こんにちは。

私はですね、自分が政経学部出身の者ですから、過去を振り返りながら、少しお話しさせていただきたいと思えます。

まずは、今年めでたく創設60周年を迎えます。60年、つまり還暦ですね。還暦というのは、ご存知の通り、干支が一巡して、自分の誕生日の年ですね、そこに戻ることを意味します。今日は、丑年5月の27日です。実は、60年前の昭和36年、1961年の開設時も5月27日だったんです。国士館大学にとっては11月4日の創立記念日、そして、この5月27日がとても大切な日だったんです。その訳はといいますと、まず一つは、世界各国にはそれぞれ海軍記念日というのがあるんです。日本はどうかというと、1904年から1905年にかけて戦った日露戦争において、日本は日本海海戦で勝利をします。それが5月27日でした。もう一つあります。それは皆さん知っていると思いますが、国士館館歌の第二番に、「松陰の祠に節を磨し」というのがあります。この松陰は吉田松陰のことです。吉田松陰は1830年に生まれて、1859年にわずか29歳2ヶ月で亡くなるんですけれども、吉田松陰なくしては日本の明治維新はなかったといわれています。そして、国士館生は国のために一身を捧げた吉田松陰の志を思い、国士館生は礼節をもってそれを磨く。そういう意味が今の「松陰の祠に節を磨し」という歌詞に込められております。吉田松陰が亡くなったのは、10月27日です。すなわち5月27日は吉田松陰の月命日にあたります。今は理工学部ですけれども工学部、そして文学部、法学部、これらはみんな5月27日に開学式を行っております。

では、60年前、1961年に政経学部は何を以て、何を目的につくられたのでしょうか。それについてちょっと話したいと思えます。それを考えるには、やはり60年前に創始した、柴田徳次郎館長のお言葉に見事に表れています。それではお願いいた

します。中国の論語です。

「士は以て弘毅ならざるべからず、任重くして道遠し」

これはリーダーというものは、器が大きくなければいけないんだ、と。リーダーになるためには、責任は非常に重い、そしてまた、道は険しく遠い、という意味です。次は中国の史記です。

「文事ある者は必ず武備あり」

まさにこれ、国士館なんです。最初の論語の一文は、先ほど言いましたように、大きな度量、そしてリーダーとしての責任を全うする、という意味が込められています。もう一つ、文と武、一方に偏っちゃいけない。このバランスが大事なんだと。そして、武道をやるものは、必ず学問を修めよ、そういう意味です。まさに、前者は国士館の国士の養成、まさにそれにピッタリです。これは文武両道、国士館の教育の理念が反映させています。こういう理念の下国士館政経学部が60年前にできたのであります。

政経学部ができた当時、今もありますけれども、学舎として今の6号館が建設されました。驚くのは、その「文」、つまり学問を修めるために整えられた錚々たる教育人です。紹介します。後ほど、出井伸之先生が講演されますけれども、丸印の方がお父様です。お父様の出井盛之教授です。国際金融論の大家です。懐かしい顔ばかりで、私も習っております。この方が内田繁隆博士という、私の指導教授です。学者然としており、ものすごい博学でした。日本政治史、政治学原論を担当されておりました。神川彦松博士です。国際政治の大家です。そして田村幸策博士。先生はチャールと直に会談をしました。外交史の権威です。皆様当代一流の学者です。逆に言うならば、よくぞ国士館、昭和39年、これオリンピックの年ですけれども、これだけの人を集められたと驚くばかりです。それにはやはり柴田徳次郎という方の、学識、それから理想、ビジョン、そういったものが、この大家たちを魅了するものであったとしか思えないんです。「神川先生に教わった」、「田村先生に教わった」、「内田先生に教わった」、これだけで東大であろうが京大であろうが、みなに驚かれます。誇りでした。これだけの人が集まって頂けたということです。まさに、識見があったのだらうと、改めてわかることでもあります。もう少し紹介させてください。先ほど出井先生を紹介しましたがけれども、例えば、行政法の大家にして最高裁判事の澤田竹治郎博士、そして理論経済学の権威、榎崎敏雄博士、中国古代経済史の世界的権威、田崎仁義博士。まさに、世界に冠たる学者が国士館に集まられただけでも、誇りだと思います。

次に、私の個人的なことを話させていただきます。私が国士館に入ったのは、1975年、昭和50年、今から46年前のことです。すでに日本の大学は、いわゆる大衆化されました。創始者は、私の入学した2年前に亡くられております、国士館は近代化、大衆化の波が押し寄せていました。

入学前の前の年に、服装も自由化されたんです。私自身、学ランを着たこともないし、もちろん買ったこともないんです。私は、青森県の弘前市から上京したんですけれども、振り返ると、服装についてはいまだ赤面です。なぜかということです、この中にはわかっていたかと思えますけれども、当時はフォークソングが大流行でした。吉田拓郎、井上陽水、泉谷しげるといったところでしょうか。それからグループでは、グループサウンズ後のチューリップだとか、オフコースとか、そういう時代でした。実は私も、吉田拓郎の歌にあるように、肩までは髪が伸びてなかったんですけれども、かなり長



髪でした。そしてですね、JUNのダブルのプレザー、そして当時は先駆けだった銀縁のメガネ、ベージュのパンタロン、そしてハイヒールの茶色の革靴を履いて、入寮式に臨んだんです。全く国士館の質実剛健とは真逆の関係でした。まあ恐ろしい目で睨みつけられたんですけども、幸い、しごきには合いませんでした。そういう近代化、自由化の波が国士館にちょうど押し寄せた時代でした。そして、私はその当時ですけども、今と逆で地方出身者が大体8割です。首都圏からだいたい2割です。ですから、みんなアパート、下宿、寮に入っていました。そして私自身も、東京に来て、親元から離れて、まさに青春を謳歌しました。友達と旅行に行ったり、楽しい思い出がたくさんあります。ただ、アパートといってもですね、お風呂はなし、銭湯です、共同トイレ。そういう時代でした。それが当たり前の時代でした。仲間たちと会う目的もあったんですけども、大学ではほぼ皆勤でした。そして勉強にもそれなりに精は出したんですけども、ただ私はまだ未熟というか、純粋無垢でした。内容も、理解できないままに専門書を読む自分に酔った時期もありました。ただ、岡養武という方の『近代ヨーロッパ政治史』とかですね、それから林健太郎先生の『世界の歩み』、あるいはまた佐藤功という方の『比較政治制度』、この本はもう何回も何回も読み返したことを思い出します。ただ、背伸びして、マルクスの『資本論』、レーニンの『帝国主義論』も読んでんですけども、これは全く理解出来ませんでしたね。理解できないままに、ただ読んだという満足感だけは残った思い出があります。困ったこともありました。それは何ととっても、当時の政経学部、男女の比率がとんでもない状況でした。3%しか女子がおりませんでした。男子が800人に対して、女子が25、26人という状況でした。それから、今と違ってスポーツ実習も剣道、柔道、合気道だけでした。あとは選択できません。私はその3つはいずれも未経験者だったものですから、単位取得に苦労したことを今でも覚えております。

政経学部、あるいは国士館がガラッと変わった2つの点があります。それは、1つは、平成20(2008)年に、今の34号館ができた、この時です。それまでは1、2年生は今の町田キャンパスに通っていたんです。3、4年生で世田谷にきました。34号館ができましたから、通学の範囲が広がりました。そしてもちろん、新しい建物、トイレ、ラウンジ、学食もそうです、当時はマスコミを賑わしました。「これが国士館です!」「変わった国士館です」、そういうフレーズでした。これが現代の国士館の礎を築いた、というふうに考えます。皆さんご存知の通り、世田谷キャンパスには塀も垣根も一切ありません。自由で開放

的な空間が生まれたと思います。そして、何ととっても、あの2011年の3.11東日本大震災の時です。あの時に、人が、傷ついた人に寄り添うこと、あるいは、人のために尽くすということがいかに大切かを悟りました。例えば、警察に対する意識、国家に対する意識、消防官に対する意識、自衛官に対する意識が明らかに変わりました。3.11はつまりパラダイムシフトを起こしたんですね。要は、まさに本学の教育理念である、国を思い、世のため、人のために尽くす、これがいかに貴重であるか、尊いかということを再認識したのです。それが東日本大震災でした。もちろん、ものすごい犠牲を払いましたが、これによって国民の意識が明らかに変わったことは事実です。このことによって、国士館がそして政経学部が創設以来、取り組んできた「国士養成」という言葉が人々の理解に供することになったと考えます。

しかしながら、政経学部にはまだまだ課題があります。1つ目には、私は先ほどいいましたように、政経学部政治学科を出まして、大学院、そして修士課程、博士課程と進み、助手で入職し、助教授、教授になったんですけども、最高学府に教えるにふさわしい業績、そして本学の誇りである建学の精神を体現する、多くの政経学部出身者が、教育者として、研究者として大学に残っていただきたいと考えております。

2つ目です。世界で活躍する人材の養成です。政治経済の動向を見抜く力、そしてコミュニケーション能力。これは大事なことですけれども、政治経済の専門的知識の他に、自分の国、つまり日本の歴史を自分の言葉で話せる、そういった教養豊かな人材を養成しなければならないと思います。そのためには、時代はいかに変われど、本学の綱領、つまり読書、体験、反省、思索、これを励行し、そして教育の理念である誠意、勤労、見識、気魄、これを身につけ、そして最後に国を思い、世のため、人のために尽くせる。こういう尊い人材を養成することにこれまで以上に力を傾注すべきと考えます。

以上で、簡単ではありますが、同じ政経学部の卒業生として、実体験を交えて政経学部の歴史を回顧しながらお話しさせて頂きました。改めて、政経学部開設60周年、誠におめでとうございます。そして、伝統あるこの政経学部が、さらなる発展を遂げますことを、心からお祈り申し上げます。本日は誠にありがとうございました。そして、ご清聴ありがとうございました。

続きまして、岩元浩一政経学部学部長の政経学部の現状説明です。岩元学部長、よろしくお願いたします。

## 【岩元浩一政経学部長】

皆さん、こんにちは。政経学部長の岩元です。これまで、大澤理事長、そして佐藤学長から60周年の創設に関するお言葉いただきました。本日は緊急事態宣言の中、結果的にオンラインという形で開催になりましたけれども、今日は、これだけいろいろな形での情報伝達の手段が進んでおります。もちろん、この場にいらして、皆様方にご静聴いただくということも非常にありがたいことですが、オンラインを通じて、様々な形で、この60周年の記念講演会というものをご静聴いただくということは、大変ありがたいことだというふうに思っております。

先ほど理事長、学長からお話がありましたように、私はこの政経学部の現状と、これまでの経緯というものを含めてお話し

しさせていただきます。

政経学部は、1961年、昭和36年に、当初、政治学科と経済学科という、2学科で創設されました。その後、翌年の昭和37年に経営学科が創設されて、ずっとこの3学科で政経学部の運営して参りました。現在、ご承知のように、経営学科は2011年、ちょうど10年前になりますけれども、ここで学部として独立をいたしました。そして、政治学科は2016年に政治行政学科というふうに名称を改めて、新しく政経学部としてスタートいたしております。

元々、国士館大学は、先ほどありましたように、体育学部そして政経学部という2学部が、当初の学部として運営されてきたわけですが、政経学部の教育理念というのは、ホームページ等でしっかりと謳われていますように、人間性と専門性をともに、自らが育むことができる人材の養成であります。国を思い、世のため、人のために尽くす人材を養成するという、この考え方に則っています。特に政経学部では、政治経済分野の専門性だけに偏らない、もちろんこの専門性も非常に重要なですが、しかしそれだけに偏らずに、建学の精神に基づく体力、気力、人間力、そして学際的な知力をバランスよく取り入れた、総合力を持つ人材を養成していく。これを教育理念として、深い人間力と強い精神力、自信に満ち溢れた威風堂々とした態度、幅の広い国際的な視野を持つ、独創的な人間を養成していきたい。これは、学生の皆さんが今この国士館大学の政経学部に入學した時から、常に教職員が皆さん方に対して、あるいはOBの方々も含めて、養成していくことを呼びかけてきたわけでありました。政治学、あるいは経済学、これ一見、聞きますと、非常に難しいようなイメージがありますが、これらに関する深い学問的な知識というものをまずしっかりと教授していく。そして、知的な探究心、社会に貢献する心を持った人間を養成していく。その中で、具体的に政経学部でそれらを実現していくためにはどうすべきか、ということ。政経学部は、少人数教育というものを、4年間継続していきます。1年生の時のフレッシュマンゼミナールから始まって、2年生の基礎ゼミナール、それから3年生、4年生の専門ゼミナールと。大学教育が、今までのような大講義形式で一気学生に対して教授していくということだけではなくて、一人一人に対してきちっと寄り添って教育をしていく、あるいは様々な形で指導していくとすることができるのは、これはやっぱり何と申しても少人数が重要です。その少人数の中で、各学生の皆さん方が一人一人どういった大学生活を送っているのか、あるいは、いろいろな形での悩み事だとか相談事だとかに対しても積極的に対応していく。これが、今、大学の中に求められているんだろうと思います。もちろん、一方で、専門的な知識をきちっと教育していくということも必要なことなんです。ただ、やはりそれだけでは社会の中に出た時に通用しない。だから、きちっと社会人として、十分に通用する人材を養成していくということが、国士館大学政経学部の中でも、もちろん他学部でもそうですけれども、求められていることは間違いありません。

それぞれの学科のことにしてお話ししますと、政治行政学科では、社会の問題を見つけて解決法を探るということであります。これが学びの基本的な考え方です。大学は何のために学ぶのか、あるいは何を学ぶとするのか、こうしたことを自らが考え、そして判断する力を養っていくためには、政治学理念や歴史、あるいは思想、こういったものを通じて、政

治と人間について考えていく。これが政治行政学科にあります。これは政治行政学科にありませぬ。将来、公務員として働く上で必要な国家の統治機構、あるいは地方自治体の仕組みや政策について学んでいく「公務員養成コース」。それから、国際社会の対応や関係性、あるいは各国の政治や文化について多角的に学ぶ「国際関係・地域研究コース」、という3つのコースがあります。

今までのように、それぞれの専門性をどういう形で大学に入った時に学んでいけばいいのかということ、迷うことなく、1年次においてこの3つのコースに一番適合する、あるいは、できるだけその個人の資質を見抜いて、そのコースの中で専門性を学んでいってもらおうという指導を1年次において行ってきております。実際のところは、やはり1年生というのは、なかなか自分の専門的な知識をしっかりとそこで学んでいくために、どういったコースで学んでいけばいいのか、ということを見出すことは難しいところがあります。そこを、先ほどいいましたように、少人数教育の中で個別の面談を行う、あるいはオリエンテーションを行う、そこでそれぞれの資質に適合した形でこの3つのコースのどこに行けばいいのかということ、こちらから指導していきます。

それからもう一方の経済学科につきましては、経済というのは、どうしても様々な形で貨幣というものが関わってきています。ただ、経済も基本的には哲学、理念というものが非常に重要なですが、やはり我々の身近な生活を支えているものが、やはり貨幣という部分が大きいということになると、まず身近なところからお話をしなければいけないわけです。ただ、それは身近な具体例として挙げる時にはいいんですけども、学問として考えた時には、その中の日本の経済の発展に貢献するような十分な専門的な知識、教養の習得ということが欠かせないわけです。身の回りもそうですし、社会全体も大きく変動する現代社会に対応できる能力、あるいは資質を兼ね備えた人材。こういう人を国士館大学政経学部経済学科の中では養成していきたい。そして、経済の基礎理論、制度、政策、これらを体系的に学んで、いわゆるグローバルエコノミーといわれる中で、日本経済が抱えてきている多くの課題を検証して、それをどういった形で改善し、あるいはその方向性について、なるべく各人が自らの力の中で対応していけるような形をとっていききたいわけです。

ですから、経済学科の皆さん方はですね、今、4コースありますけれども、これらは来年度からは「経済専門人材コース」、「専門企業人の育成コース」、「公共人材育成コース」、「税務会計人材育成コース」、「国際企業人材育成コース」、そして「データ分析人材育成コース」という6コースに再編成されていきます。なぜそういう形で再編していくのかということ、はですね、学んでいく内容と自分の将来の進路との関係が明確にわかるようにして、より専門的な人材を育成することを目的としているからなのです。

これから先の政経学部での学びというものについて、今、聞かれている学生の皆さん、そしてOBの皆さん、そういった方々が当時在籍していた時と今の政経学部の現状はかなり違ってきていると思いますけれども、これから先のさらなる発展、次の10年に向けて、ぜひともご支援を賜りたいと思っております。

簡単ではありますが、政経学部の現状説明とさせていただきます。ありがとうございました。



# 政経学部創設60周年記念

## 記念講演会



### 第1部講演 出井伸之氏

司会 政経学部経済学科  
主任 熊迫 真一

Profile

出井 伸之 Nobuyuki Idei  
クオタムリープ株式会社 代表取締役会長 ファウンダー&CEO

早稲田大学第一政治経済学部経済学科卒業後、ソニー株式会社に入社。外国部、オーディオ事業部長、取締役などを経て、1995年に、新卒入社からの抜擢はソニー創立以来初となる社長に就任。その後、最高経営責任者、会長を歴任。内閣官房IT戦略会議議長、社団法人日本経済団体連合会副会長、ソニー株式会社最高顧問、ゼネラルモーターズ、ネスレの社外取締役なども務める。

2006年に、「日本×アジア」の視点で次世代のグローバル企業とリーダーを生み出す事業を行う、クオタムリープ株式会社を設立。大企業変革支援、ベンチャー企業育成支援活動を中心にを行っている。

出井伸之と申します。国士館大学政経学部、創設60周年にお呼びいただきまして、大変ありがとうございます。私の父がここで講義をしておりましたのが、1945年から65年というふうに川村先生から伺っております。私は、父の詳しい経歴を全然知らないんですけども、そのお話を聞き、大変懐かしかったです。

父の講座名を見ると「世界の中の日本経済」というものがありました。父が講義した時期は、アジアを日本は振って、ヨーロッパに擦り寄っていた時代です。「世界の中の日本経済」の講義の具体的な内容はどのような話か知りませんが、ここはまだ産業革命の第1期とあまり変わらないのかなと思います。これからは、やっぱりアジアというものが地理的にも近いですし、非常に重要になると私は考えているので、今、私だったら「アジアと日本経済」というような題名が面白いんじゃないかなと思いました。また、国際経済論の4単位というのも父は担当していました。当時は国際通貨基金の問題というのがテーマのようです。実質経済とアメリカの金融企業というものの衝突というのが今に起こるかなということで。実際には現在では、国際通貨基金という国のお金というよりも、やっぱりヘッジファンド、その他随分ありますけれども、民間の金融機関というようなものの影響の方が、大きいと思います。現在、日本は国際通貨基金であるアジア開発銀行を通じてアジアに相当お金を貸しているわけですが、これはお金を貸しているわけで、アジアの投資に回っていないように思うんですね。ですから、もしも、私が今講義をするのであれば、やっぱりこの辺が面白いかなと。それから、父はドルの貨幣本位制度を講義で取り上げています。これは、今だったら中国の人民元が、ビットコインのような仮想通貨ではなくて、デジタル通貨となってどういうふうになるかというようなものを講義するのではないのでしょうか。数年くらい以内に中国のデジタル元が来るとは思いますけれども、アメリカの通貨とぶつかってくると思います。また、通貨が国単位の通貨というような位置づけの他に、仮想通貨によって民間の通貨ができたということが世界経済の混乱を招くのか、または成



長を招くのか、というようなことも、国際経済論の重要なポイントになるように思います。だから、時代が変わっても、国際経済論の単位数は変わらないんじゃないかなと。経済の講義の内容としては素晴らしいことを親父は喋っていたな、というふうに思います。

今日は、時代の変遷と、それを支配する一つの技術的な規則について、ちょっとお話しさせていただきたいと思います。



私は、ソニーに1960年に入りました。父の影響か、ジュネーブのほうに留学いたしまして、2年ほど勉強してまいりました。テーマはヨーロッパの経済統合ということから、どういう企業に

変化が起こっているかということレポートを書きまして、これを父に見せたところ大変喜ばれました。父の跡は継がず、結局ソニーに入ったのですが、実は私はソニーに入ってエコノミストをやるということだったのです。志と違って社長になってしまいましたけど。

日本というのは何度も大変な変革をしているわけですが、まず、明治維新から1945年の敗戦まで、一つのパラダイムを形成していたわけですね。戦艦大和とか、零戦とか。そういう意味で日本は産業革命に乗った国です。アジアで唯一、産業革命に乗り遅れなかったという、または、最後に飛び乗ったというか、そういう国でありました。この時期、父が教えていたと思うんですけど、経済的には、「収穫の逓減の法則」という考えに支配されていました。例えば自動車がスピードを上げていくとガソリンの消費量は増えるけれども、それに比例したようにはスピードは上がらないというような考え方で、この収穫逓減という法則でもの作りは支配されていました。

そのところから、1945年からは産業革命の第2期という時代に入ります。これはコンシューマー商品の革命時期になります。ソニーも1946年にできたわけですから、創業期はちょうど産業革命の第2期ということになります。ここになりますと、半導体を中心にして、「収穫の逓増の法則」という考えが出てきました。工場が大きければ大きいほど、普通のものだったら、例えばテレビだったら効率が下がるわけですが、半導体においては大きければ大きいほどかえって有利だと。これは経済原論にも出ていますけど、これを収穫逓増の法則と呼びます。半導体にはムーアの法則というものもあって、18から24ヶ月くらいで半導体の性能は倍増するというようなことがいわれています。ここで、収穫逓増の時代が始まりました。ソニーは半導体技術で大きくなったようなものですが、逓増の法則には全く関係がないような小さな企業からスタートしました。1960年の売り上げっておそらく80億くらいの中小企業だったと思います。これはもう少し後の話ですが、この収穫逓増の法則を利用して大きくなった会社があります。それは韓国のサムソンという会社ですね。これは圧倒的に半導体に特化して、メモリをたくさんつくったということで、その結果一流企業になるわけです。そういう意味で、収穫の逓減、逓増というようなものとは、経済を動かす、企業そのものが変革する材料になったと思います。

その次にですね、情報革命の1期というものがあります。この表を見ていただくとよくわかりますように、1854年から1945年と、1945年から1995年と、それぞれの時代が100年、50年さらにその次は25年と短くなっていきます。要するに世界の経済の変化というのは、倍増の時間の軸でもって大きくなっているわけですね。モノづくり産業革命という時代から情報革命に入りますと、新しい法則が出てきます。これがメトカーフの法則ということで、ネットワークのバリューというのは、繋いでいる数のバイト2乗に比例するというのです。例えば4の2乗が16ですけども、8の2乗は64というようなことで、繋がっている数が増えれば増えるほどネットワークが急拡大していくわけです。

ここで情報のスーパーハイウェイ構想の話をしたと思います。1993年、クリントン政権の時に、アル・ゴアという副大統領が情報の

スーパーハイウェイ構想をやるということを発表しました。私がロサンゼルスに出張していた時に、これはわざわざ聞きに行ったんですけど、エンジニア5人くらいと聞きに行きました。どんな構想かと言うと、インターネット網を充実させて、アメリカの金融産業を助ける、それからイーコマースをやるぞ、この2つのことです。インターネットを使った商品を、ビジネスをやるぞ、というようなこと発表したわけです。この時に、聞いている人の中からインターネットを何人使っているかというようなことをアル・ゴアが聞きまして、まだまだ本当に20%くらいしか使っていなかったということで、インターネットのごく初期にあたるわけです。ソニーもこの時にもうインターネットをやっていましたが、エンジニアの裏仕事ですね。要するに、会社の正式なプランではなかったということです。この演説を聞いて、私は非常にショックを受けたわけですね。インターネットというものは、恐竜は隕石が落ちて死に絶えたというように、何千年か前の話ですけど、それと同じようなことが世界で起こったんじゃないかというふうに思いました。それで帰ってきた1994年の1月にレポートを書きまして、21世紀の初頭にはネットワークを利用した巨大企業が出現すると。それから通信インフラを利用したビジネス統合者が大きく成長すると。3つ目に、メディアが変わると。要するに、ラジオとかテレビという一歩通行のマスメディアではなくて、これは対話するパーソナルメディアになる、というように私は思いました。これでこのことを大賀社長と伊庭専務という当時のヘッドに出したんですけども、あまり反応は個人的にはもらえなかったです。「いいレポートだな」というようなことは全くいわれなかったです。この頃は本社のコーポレートコミュニケーションの責任者ということで取締役にもなっており、会社を代表して出張して、ショックを受けたということで、このレポートを書いたんです。

そうしているうちに私が社長になって、いろいろ変革を起こしたんですけども。同時に、IT戦略会議の議長というものを早稲田大学で同期だった森首相にいわれまして2000年に就任しました。日本のリーダーの一員としてインターネットを何とかしようということで、5年以内にアメリカを超える超高速インターネットをつくるかと、新高度経済成長するとかを目標にして、2年間議長をやったわけです。政府は基本政策としての基本法、要するに、デジタル化の基本法というのを、(最近これを改正しようとしていますけれども)つくっただけでした。法律をつくっただけで満足をしたということで終わってしまったのは残念なことです。この時に森さんにITのことを「イット」といってもらって、記者に大笑いされて、それがマスコミにも伝わって、ITというものが有名になったということがありました。森さんはこれに対して怒っておりましたけれども。

インターネットをチャンスとして捉えるということが私には非常に必要だと思ったんで、社長になった時に、デジタルドリームキッズというビジョンをかかげました。デジタル技術に社運をかけるということ、ドリームキッズ、要するに目がキラキラした子供みたいな人をお客にしようということで。今までテレビとかそういうものをつくってありましたけれども、変わらなきゃいけないぞ、というようなことを、社長としては申し上げました。

ですが、結果的にはですね、グーグルとか、アマゾンとか、フェイスブックとか、アップルというような巨大なプラットフォーマーというものができて、これはBtoBからBtoC、CtoCに変わるような真ん中にあるプラットフォームなんですけれども、これができて、大企業に成長していきました。中国ではバイドゥ、アリババ、テンセントというような同じようなことができていくわけですね。

日本としては、このプラットフォーマーというものがなぜ日本にできなかったのか、未だに私はわからないですけども。例えば、グー

ルの一番の技術は検索エンジンですね。実は検索エンジンは、インターネットの黎明期、日本は突出した技術を持っておりまして、これを利用すればプラットフォームになったかもしれないということなんですけれども、民間は政府に遠慮したんでしょうか、为什么呢か。これは慶応の村井先生にも聞いたんですけど、なぜかわからないという返事だったんですね。ドイツの私の友達が2人いるんですけど、この人たちがドイツがなぜインターネットで出遅れたのか、プラットフォームができなかったのか、というようなことで、ドイツと日本が似ているというようなことで本を今年書いたんですね。今ドイツで売っておりますけれども、「未来を台無しにするつもりか？」とドイツ人についているわけですね。この本というのは、日本語訳が今年の秋には出る予定でございますけれども、彼らは私に電話してきて、「お前も日本のことを書け」と言われたんですけど、こんな実名を挙げて書く勇気はなかったんですから遠慮させてもらって、ただ本の前書きだけ書いてあります。ドイツ、日本っていうものが、これから、コロナというようなものをきっかけにして本当に変わるんじゃないか、というようなことも書かれていまして、私は日本人にも参考になるように思います。

今が情報革命の第1期がちょうど終わったところですね。それで情報革命の第2期に入ると今度は収穫加速の法則が適用するんじゃないかというようなことをいっている人がおります。これはやっぱり本当に起こるかもしれない。経済の更なる大変換ですね。それは大いに注目しなければいけないと思います。コンピューターのAIによって、2029年までにはコンピューターは人間レベルを超えるだろうと、知性を超えるだろうということですし。ポストヒューマンの誕生というようなことがアメリカでいわれてもう随分経ちます。この「収穫加速の法則」を提唱したレイ・カーツワイルが言っているシンギュラリティというものが大変話題になりまして、アメリカにはいくつかのシンギュラリティ大学というようなものがございまして。世の中がこれからどう変わるだろうかというようなことを考えるうえで、今までいくつかの基本の法則をお話ししましたが、こういうものに加えて、仕上げとしてポストヒューマンが、要するに、ロボットが人間よりも賢くなるというようなことも言われています。私はこんなことはこないと思うんですけど、これが起こることによって人間がどうなるかというようなことが、5年くらい前、アメリカでも随分話題になりました。これはユートピアになるという人と、いや、もう人間としてもディストピアになるという人がいましたけど、ディストピアになるといったほうが本が売れるせいか、アメリカの学者たちは、悲観論のほうが多かったですね。なぜ日本ではこれを討議しないのかというのが不思議ですね。今頃インターネット革命という、20年前に起こったことをなぜ話をするのかということですけど、日本の国策というものかどのように日本の将来に影響を与えるかの重要な事例であるからです。大学のほうでもぜひそういうことを教えていただきたいというふうに思います。



アル・ゴアの演説を聞いた時に、インターネットは隕石で、変革しない企業は恐竜のように死んじゃうぞと思ったわけですが、この絵のように2020年のコロナの到来も私は隕石でないかと思っています。今コロナの最中で、業績のいい企業、悪い企業とありますけれども、本質的には、日本そのものがデジタル技術によって変わっていかなくやいけ

ないんじゃないかという、きっかけにコロナがなるという、チャンスにもなるというふうには私は思います。今のコロナによって短期的にビジネスが倍になったぞ、というような話をする人もいますし、潰れそうだとっている人もいるわけですけども、そういう捉え方ではなく、コロナの到来を今まで遅れてきたDXというか、デジタルの変革というようなものを実行していかなければならないきっかけとしてポジティブに捉えるということですね。ドイツが、デジタル時代に遅れたことをコロナを一つの踏み台として変わるぞ、ということが書かれた前述の本は、大変参考になると思います。

これから先ですけども、世の中というものは倍速で変わっていきますから、2020年までが25年間ですので、次の期間はこの25年の半分の13.5年しかありません。ですので、2033年には大変な変化というものがある日本に起こっても、また世界中に起こっても不思議じゃないなというふうに思います。

一方でプラットフォームですけども、あまりに影響が大きかったものですから、国が反発しております、特に中国では、このパイドゥとアリババとテンセントというものに対して、政府のほうからだいぶプレッシャーがかかって、国有化されても不思議ではないというふうになっております。これは個人のデータというものに対して、どういうふうに扱うべきかということが焦点です。日本はプライバシーとかそういうことで随分いわれていますけども、何をどう使ったらいけないかというようなことに対して、全く動きがないように思います。ヨーロッパのほうはベルリンから発して、これをどういうふうに取り扱っていかうかというものは、社会的な運動になっておりますので、それが非常に良いことであるというふうに私は思います。

このようにして産業革命の時代から情報革命の時代が変わってきたわけですけども、これは企業のほうにいわせると、工場より、無形資産が大事になったということですね。私がソニーの社長をやっていた時には、工場は日本だけでも世界中でも50ぐらいの企業があったし、何万人という人が働いていた訳ですけども、これが今、ソニーは割と好成績を上げていますけれども、工場は数もものすごく減りました。ブランドイメージだとか、著作権だとか、そういう無形資産に有形資産から価値が移っていくぞということが、これが企業側のポイントです。何もデジタルでハンコが要らないと、そういうようなことじゃなくて、それは守りのデジタル化ということで、本当の攻めのデジタル化とは、ビジネスモデルそのものというようなものを見直して、それから無形資産というようなものを大切にしていこうということがポイントになると思います。

あまり全てがこうなるというふうには考えてはいけませんけれども、本当に2033年までの13年の間にこの次の変革が起こるというふうに学生さんには考えていただきたいと思います。一般の勉強も就職も大変だと思いますが、ちょうどコロナと第2期情報革命というようなものがぶつかっている時ですので、ぜひこのことは考えていただきたいというふうに思います。

簡単ですけども、私のスピーチを終わらせていただきます。学生さんも、以上のことを書いた本も多数あると思いますので、ぜひ読んでいただきたいと思います。簡単ではございますけれども、以上を持ちまして、60周年のお祝いの言葉に代えさせていただきます。

ありがとうございました。特に私なんかの年代ですとソニーのファンが多いなと思いますね。ソニーの商品の全てがクールだと。そのソニーを率いていたのが、当時の出井社長で、日本を代表する経営者だったというふうに思います。その出井さんがですね、今回、出井盛之先生のご縁で、また正しい第2期情報革命、またコロナの影響ということを踏まえて、大変示唆に富むお話をいただきました。大変勉強になったと思います。ありがとうございました。

# 政経学部創設60周年記念

## 記念講演会



### 第1部講演 山本昌邦氏

政経学部経済学科  
主任 熊迫 真一

#### Profile

山本 昌邦 Masakuni Yamamoto

1981年、国士舘大学卒業。現役時代のポジションはディフェンダー。冷静な判断と鋭いタックルを武器に、ユース代表、ユニバーシアード代表、日本代表とそれぞれの世代で、代表選手として活躍。大学卒業後は、ヤマハ発動機株式会社サッカー部に入団。翌1982年には日本サッカーリーグ2部優勝、1983年天皇杯優勝とチームに貢献。1987年、29歳で現役引退。引退後は、ヤマハ発動機のコーチ、ジュビロ磐田の監督などを歴任。1997年ワールドユースでは監督として、ベスト8の好成績を収める。その後、日本代表コーチとして2002年ワールドカップのベスト16進出に貢献。ワールドカップ終了後、オリンピック日本代表監督に就任。2009年より、母校・国士舘大学体育学部の客員教授として活動をしている。



皆さん、政経学部60周年ということで、関係者の皆さん、本当におめでとうございます。今日は貴重なお時間をいただきましたので、学生の皆さんには、全ての可能性が開けていると思うので、そんな勇気を伝えられたらなというふうに思います。

政経学部の出身なんですけれども、スポーツの仕事しかしたことがなくてですね。大好きなサッカーで人生、一生を過ごしております。今日はですね、政経学部のお話なので、サッカー界のビジネスの話をもっとささせていただきます、その後、一流選手の特徴の話をさせていただきます、後半にまた、我々のマネジメント、要するに人をどう育てていくかということが未来の頂点への道だと思っているので、そんなお話が少しできればなというふうに思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

サッカーの仕事しかしたことがないんですけれども、人生、生きてこられました。人生、得意なこととか、好きなことにチャンスがあるんだろうなというふうに思っております。

実は、今、ご紹介いただいたんですけれども、日本代表のほうの育成の指導を、20歳以下のワールドカップを4大会やらせてもらって、オリンピックも、アトランタオリンピックから3大会コーチか監督をやらせていただいて、2002年のワールドカップということで。

サッカーをやっていてよかったと思うのはですね、サッカーの頂点がとてつもなく高いところにあるということです。サッカーは、国連の加盟国数よりも国際サッカー連盟の加盟国数の方が多いんですね。その頂点を、高い高い頂点を目指すから、我々も成長できるということがあったと思います。

2002年、日本代表のコーチでワールドカップ日韓大会、学生の皆さんが生まれる前、生まれた頃のお話で恐縮なんですけれども。初めてワールドカップという舞台で日本が勝った。その日韓大会で勝った試合がロシア戦ですね。ちょうど後ろ

のここにブルーのユニフォームを飾っておいたんですけれども、これがロシア戦の時に僕が着ていたユニフォームです。皆さん、視聴率が何パーセントあったと思います？今では信じられない69.9%で、日本のスポーツの歴史に残る、日本中が盛り上がった瞬間。2018年のロシアのワールドカップであれば、皆さん見て記憶に残っていると思うんですけれども、2年前ですけれども。西野監督で決勝戦、いえ初戦ですね、これは初戦ですね、初戦のコロンビアに勝った試合が、なんと視聴率が48%で、紅白歌合戦よりも年間の視聴率のナンバーワンを、ワールドカップのある年はサッカーが取るといって。サッ

カーのスポーツのイベントの中で、サッカーワールドカップがとてつもなくお金も動くし、大きな大会です。その次が多分、ラグビーの大会で、オリンピックはその下くらいの規模になります。なぜかという、オリンピックは17日間しかないんですね、開会式から閉会式まで。サッカーは開会式の前から始まってしまいですけど、日程が長いんですけども、17日間。ワールドカップのサッカーというのは1ヶ月と1日あります。地球のお祭りです、地球規模です。なぜかというんですね、毎日、例えば1時、4時、7時、みたいなキックオフ時間になりまして、32チーム出てきて、64試合あるんですけども、1時、4時、7時だと、地球上で、その時間にみんながその試合しかないからその試合を見るんですね。だからメッシのことが有名になるし、クリロナのことをみんながわかる。オリンピックは、これは仕方がないことなんですけれども、17日間、映っているのはその国のメダルを取りそうな競技の人ですね。国士館でいえば、柔道やレスリングやシンクロでたくさん選手を輩出してたんで、で、日本の人はみんな知っているんですけども、世界中の人がそれを見ているかという、何100競技と一緒にやっているので、世界中の人が知っているわけではないということにマーケットの違いがありまして。これは、国際サッカー連盟のすごいところなんですけども、1時、4時、7時が1ヶ月近くずっと続いて、グループリーグの最後だけがキックオフ時間を一緒にするんですね。そこだけ2試合一緒にするんですけども、ここは得失点差で差が出ないようにするための仕組みで。これがずっと1ヶ月間続いていって、最後の決勝戦に行くので、1ヶ月間は本当に地球上がワールドカップ一色になるというのが。それが1ヶ月と1日続くというところに経済的なメリットがあって、とてつもない放映権であるとか、スポンサーのマナーであるとか、こういうものがいくので、その選手の給料が、昨日もニュースでやっていましたけども、メッシが給料をたくさんもらうとか。女子では大坂なおみさんが一番だということで誇らしい限りですけれどもね。

実は、A代表もやっていたんですけども、実は20歳以下の代表というのをずっとやってきたんで、人を育てないと未来がないということは本当によくよく痛感しました。まず、ワールドカップに行くためにどんな選手が活躍するかという、自信のある人しか活躍しないんですね。サッカーが上手い程度で活躍できるわけではなくて、やっぱり実績を積み上げて、サッカーの世界というのはワールドカップ。オリンピックというのは男子の場合、23歳以下ですね、プラス、オーバーエイジという3人の年齢制限のない人を使えるんですけども、その3人を使うことでお客さんにたくさん来てもらえる。ブラジルが前回、リオで優勝しました。このネイマールがキャプテンで出るわけですね、お客さんいっぱい入るわけですね。サッカーのスタジアム、今回の東京オリンピックは、東京オリンピックといっていますが、札幌も会場です、宮城県のスタジアムも会場です、鹿島スタジアム、日産スタジアムが決勝戦で、埼玉スタジアム、そして日本の男子の開幕は味の素、調布でいきますね。全て5万規模で、大体5万、7万という規模で一斉に試合をやるので、そこにたくさんの人が入るから、サッカーの男子のオーバーエイジというところが必要になってくる。オリンピックは、サッカーの場合は育成の大会という見方が強いんですね。23歳以下ということで。女子はフル代表。女子はメダルを取ると

思いますね、今回。なぜかという、17歳と20歳の世界大会で、2年前に彼女たちは17も20も優勝しているんですよ。その子たちが2つ年齢が上がって、今の若手も世界チャンピオンの子たちなんですよ。「私たち、負けませんから」というぐらいの自信満々にプレイしますから。今回、優勝できるかどうか、アメリカが強いので微妙なんですけども、次くらいは確実にメダルを取れるような状況なんだろうと思います。やっぱり人材育成というのは、本当に時間とお金がかかって、たくさんのいろいろな世界大会にいった経験を見せて、ということをやってきた成果だろうと思っています。

こんなビジネスの話をしていると、皆さんには政経学部の60周年なんていいかもしれませんが。僕の得意な分野ではなかなかなくて。そうですね。

一流選手をたくさん見てきましたけども、特徴がはっきりしていますね。僕が見てきた一流選手は、みんな負けず嫌いという特徴がありました。共通している特徴。2つ目が、人の話が聞けるとか、オープンマインドな心を持っているとか、いろんなことを吸収しようとするオープンマインドな気持ちというのがすごいですね。自分の持っている才能程度じゃ無理ですからね。この辺が一流選手に共通していたなところですよ。3つ目がですね、高い高い目標を具体的に持っています、みんな。本田圭佑ってわかりますかね、賞味期限切れちゃったかな。消費期限は切れていないですね、まだ現役で、海外でやっていますから。オリンピックも目指しているようですが。本田圭佑、長友佑都とか中村俊輔とか。教え子みんなたくさんいるんですけども、長いこと育成とオリンピックの3大会、12年間やっていましたからね、たくさん教え子いるんですけども。本田圭佑、彼はガンバのジュニアユースというところに行ったんですね、中学にね、ガンバのジュニアユース。で、ユース、高校のほうのチーム、ガンバでそのまま大阪に上がりたかった。が、落とされましたよね。ガンバには彼よりも上手な子がいっぱいいたんでしょね。で、その子たちがユース、高校のほうのチームに上がって、彼は落とされて、それで星稜高校に、石川県金沢に行くわけですけどもね。それで山の上の寮で雪まみれになってね、結構練習していました。それで、高校選手権で頑張って、この世界に戻ってきて、今があるんですね。彼、ワールドカップ3大会連続出場しています。4年に1回しかないですからね。しかも、彼は3大会連続ゴールなんですよ。彼しかいません。ワールドカップ3大会連続出る選手って、まあ10人ぐらいしかいないんですね。この24年、6大会連続出ています、ずっと。でも急に出たわけじゃなくて、アトランタオリンピック、西野さん監督、僕がダメダメな使えないコーチ。で、28年ぶりにオリンピックに出たんですよ。その自信満々の中田英寿みたいな世代がこうやったら勝てるんだって言って、98年のフランスのワールドカップにあって、そこからずっと連続で出るようになって、我々サッカー界の夢が実現できるようになって、いよいよこれから優勝を目指そうじゃないかというのが今の状態。若い子たち、才能のある子もいっぱいいます。そうそう来週、20歳以下の代表チームの合宿があるんですけどもね、国士館の2年生の望月くん選ばれています。僕、団長なんで、こないだご挨拶に伺いました。その20歳以下の代表ですから、いずれフル代表に行くかもしれないですけどね。そんな感じでやっています。その本田圭佑の話に戻りますけど

も、本田圭佑は15の春、中学から高校に行く時に落とされて、泣いたでしょう。辛くて、悔しくて、もう自分の夢が打ち砕かれたような瞬間だったと思いますね。そもそも彼の卒業文集ですよ、小学校6年生、12歳の時に何て書いてあったと思います？12歳の時の卒業文集が、給料は40億円稼いで、これこれこうで、セリエA、当時はイタリアが一番強くて、イタリアのセリエAで背番号10番をつけてプレイして、どうたらこうたらと事細かに、小学校6年生がよくこんなこと書けるなと思うくらい。40億ってわかっているのかなって言うくらいね。やっていましたけど、その夢は全て実現していますね。クラブのオーナーになって、日本中にサッカー教室を展開し、セリエA、イタリアでACミランで3、4年前まで背番号10番つけてプレイしてやっていたわけですね。で、皆さんに質問があります。本田圭佑は、長友佑都も中村俊輔も同じような境遇なんですけども、中学の時に彼らより上手な子はいっぱいいたわけですよ。今はその上手だ、上手だといわれてクラブの上に乗った人、長友佑都は東福岡高校ですけども、上に上がりたかったけれども、どこもプロで誘ってくれなくて。東京の大学に来てやっていて、認められて、FC東京に行って、今があるんですけども。その時に彼らよりも上手だ、上手だ、天才だ、天才だといわれて上に上がっていった人、プロに行ったりとか、クラブのユースに上がってプレイしていた人、今どこにいるんですか？長友佑都も3大会連続出場です。本田圭佑も3大会連続出場の3大会連続ゴール。中村俊輔にしてもずっと代表を支えてきた。じゃあ、彼らよりも上手い上手いと言って横浜マリノスで俊輔より上手で上に行った人、ガンバで彼よりも上手だと言って上に行った人、どこの代表にいるんですか？どこに行っちゃったんですか？自分の持っている才能よりも大事な才能は、努力する才能、諦めない才能。彼らは15の頃に、長友は18の頃に、心が折れたと思いますが、諦めずにやってきて、日本のサッカー、世界の舞台で大活躍をしているわけですよ。諦めない才能がない人は、なかなか難しいというふうに思います。

技術と戦術と体力で、この赤い部分がパフォーマンスになりますね。サッカーでは技術も大事で、戦術も大事で、体力も大事で、で、技術的に「こいつ上手だな、10点」「能書きをたらしたら最高」みたいな選手、あと体力測定したら、今何でもわかるので、で、掛けるゼロがゼロという。「才能あるね」っていわれたけど、掛けるゼロ、何でしょう？これは、こういうことなんですけど、技術、戦術、体力は急にゼロにはならないですね、急に悪くなったりするってことはないんです。技術は一生ものなんで、子供の時に身につけた技術は一生使えます。体力的なことも、今テクノロジーが進んでいますので、全部データで、日本代表選手の後ろにセンサーみたいなものが入っていて、何回スプリントをしたとか、何メートル走ったとか、最後の15分にこいつは何も走っていないとか、全部よくわかるんですね。ボールのことはカメラ3つでデータ全部、誰が何本ペナルティエリアにパスしたとか、どういうふうに入ったとか、全部データで捉えられるようになっていて分析しています。今日の話は、この技術、戦術、体力を、このメンタル。これを根性のお話だと思った人は、我々の業界では生きていきません。感情のマネジメントのお話です。心のお話です。心の部分をどうやっていくかという感情のマネジメント。技術がなくても、掛ける100、感情、諦めない人、メンタルの部分で努力を

続けられる人、こういう人が、ここが大きくなって、一流選手になっていった、というのが僕の感想なんです。全ての皆さんに可能性があるというのは、諦めずに少しずつ毎日、成長していれば、技術があった、戦術、体力がすごかった、だけど、先ほどの冒頭の名前を出した選手たちよりも上手い人たちがいたはずなのに、どこにもいなくなってしまう。諦めたからなんです。努力が足りなかったからなんです。こういうことを、諦めないで続けていけば、必ず良い方向にいくんじゃないかなというふうに思っています。

ユース代表、20歳以下を、もう長いことやっていたし、オリンピック3大会やっていますので、選手たちに伝えてきた言葉がありますので、それをぜひ皆さんにもお伝えしたいと思います。

選手たちに伝えてきた言葉。

勝つことが大切ではない。勝ちたいと思うことが大切なんだ。諦めないことが大切なんだ。自分がしたことに絶対に満足しないことが大切なんだ。気を抜かないことが大切なんだ。自分に期待をしてくれている人をがっかりさせないことが大切なんだ。

もちろん、勝つためにプレイをするんですね。でも、負けた時はチャンピオンのように堂々と負けを認めればいいんです。負けた時に、ピッチが良くなかったんだよ、風が吹いたんだよ、相手がずるいことしたんだよ、審判が間違えたんだよ、と言いつけ探す人は、自分は完璧なんだ、まわりが良くないんだよと言っていることになってしまうんですね。堂々とチャンピオンのように負けを認めて、どう自分が成長したら次の試合に勝てるんだろう、自分がどうプレイしていたら試合に勝利をすることができたんだろうと。大きな敗戦で負けを認めた上で、次の成長にどうつなげていくかということなんです。大切なのは勝つことではないんだと。大切なのは挑戦し続けることなんだと。ずっと選手たちには勇気づけてきました。選手にね、ミーティングで。「おお、君のそのサッカーシューズ、誰が買ってきてくれたんだ？たくさん合宿、遠征に行ったな。その費用は誰が払ってきてくれたんだ？おじいちゃんがいるな。おばあちゃんがいる。お父さん、お母さん、兄弟、学校の仲間、先生、コーチ、監督、そしてチームメイト。みんなに支えられて、今、お前たちはこの代表チームで、世界に挑戦するんだよな。いいか、試合に負けるなんてことはね、こんなにちっぽけなことなんだ。ビビんなくていいぞ。失敗なんか恐れるな。でも、君に期待したいことはある。こういうことはできるよな。その最後の一秒まで、最後の一滴まで、できることを振り絞れ」

まあ、こういうんですね。それでもやられちゃう世界があるんですよ。サッカーのワールドカップだからなんです。とてつもない、100年の歴史があって。自国の監督以外で優勝した国はこの100年、1つもありません。この50年、連覇した国もないぐらい競争が激しい世界です。だから、いいですよ。だから、夢があるから、強くなっていくんですね。僕はこの業界で仕事をしてきて本当に幸せだなと思っています。未だに50年までになんとかしたいなと思っていますけれども。相当、長生きしないと駄目なんですけどもね。

時間も押してきたので、我々のマネジメント。選手に寄り添うことが仕事で、選手のいいところをどう引き出せるのかというところが大事なことになります。僕らは、主語の使い方というのは、すごく使い分けているんですね。試合のマネジメント

の中で。良かった時の主語というのは、「君たち、選手のお手柄なんだ」「お前たち」「君たち」という主語でしゃべっていくんですけども、負けた時、良くなかった時、うまくいかなかった時の主語は「我々」と、使い分けています。試合後のミーティングの話ですけれどね。「今日の我々はね」と。「我々」という主語は、その沈みそうな泥舟に自分も乗っているということ表現して、選手の感情に寄り添うということ。調子が良かった時は「お前たち」「君たち」という主語で、選手のお手柄で話していくんですけど、才能は一切、褒めません。努力したことを大きく評価します。コツコツ、こんなことをやってきたから、今日いいプレイができて、見事なゴールだったな。最後の2分に、あの苦しい時間に君がゴールできるなんて、練習を見ていたぞ、ずっと。と、こういう主語の使い分けをやっていくんです。

時間が限られているので、最後にこんなお話をしましょうか。代表でもそうですし、Jリーグでも監督をやらせてもらって、ミーティングの話をします。試合前のミーティング、そうですね、2時間前ぐらいまでにホテルでおこなって国立競技場へ行く、みたいなミーティングはこんな感じなんですけどもね。僕はいつも時間ぴったりにか、ちょい遅れて行くくらいに行くようにしています。23人だったら23個しか椅子が並んでないですね。それも互い違いでみんな顔が見えるように、そんなもんはコーチングスタッフやスタッフがみんな用意してくれていて、全部セットされます。僕はこの監督業を役者としてかっこよく演じているだけなんです。スーツと来て。じゃあ、最後の戦、これでJリーグに優勝できるというシチュエーションだと仮定しましょう。こんな感じです。

「みんな揃ってるな。今日、いよいよ俺たちの歴史的な一日が始まる。俺は自信を持ってぞ。お前たちがどれだけ努力してきたか、どれだけチームが一体感を持っているか、まとまっているか、結束しているか、全く俺は不安がない。今日、歴史をつくろう。新たな歴史を俺たちがつくるんだ。そして、支えてくれた家族、みんなに素晴らしい夜をプレゼントしようじゃねえか。支えてくれたサポーターに素晴らしい夜をプレゼントしよう」というようなこと。まあまあ戦術のこともいいですね、サッカーだから戦術はこうで、相手がこうくるぞ、みたいなことをいいますよ。我々はこういうメンバーで、こうだと。でも、スポーツ、サッカー、団体競技でスタメンの11人とそれ以外のサブというポジションができますね。サブのやつの名前を出して、一体感を出すために、「何とか、俺、今日、お前の最後の15分のプレイで勝負を決めたいと思っている。今日はベンチスタートだけどな。お前がヒーローになるんだ。頼むよ、良い準備をしていてくれ」今、交代が5人なんですけどね、コロナの関係で。普通は3人なんで、2人目も出します。3人目は使えませんね。あ、4人目は使えませんね。俺、出ないってことじゃねえか、ってわかっちゃいますからね。そんなことはうまくやります。で、選手に、「最後に、君たちの大事な人からメッセージを預かっている」と。そのメッセージを我々はプロなんで、編集マンがちゃんとついていますから、分析して、映像を撮ってきて、その選手にとって大事な人、家族から映像を集めて6分にまとめとけ、とかいうんですね。「よし、最後にこれを見て国立へ行こう」といって映像が流れて。その映像に、まず、おじいちゃんが登場しまして、今日試合に出る孫の名前ですね、「なんとか君、おじいちゃん、幸せだよ。今日、何とか君、試合に出るな

んて、日本一になるなんて、こんな幸せなことはない。今日、国立競技場におばあちゃんに行ってるよ」といってくれるんですね。で、選手の奥様が登場してね、その選手はもう膝の大怪我でほとんど1年リハビリ生活をしたような奴が最後の試合に間に合った。「なんとかさん、あなた、本当に辛かったと思います。苦しかったと思います。でも、あなた、家で本当に明るく振る舞ってくれましたよね。私、どんだけ助かったか。今日、精一杯応援しますね」って泣きながらいってきますよ。これ、テイク3だからなんですけどね。撮りなおしてね、「もっと感情を入れてやってください、奥さん」という感じですけどね。で、3番目にね、プロだと結婚している、ちっちゃい子供もいたりするんで、その小学校1年生の娘が出てきて、「パパ、今日、絶対に1点取ってよ。約束だよ。私、学校に行ってみんなに自慢するんだ」っていってくれるんですよ。足が折れても走っちゃうんですよ。足が折れて走るのは良くないことですけども。そのくらいの覚悟で。要するに、感情のマネジメントができて、みんながまとまって大きな目標に向かっていく時に、とてつもない達成感があるし、このグループにいて良かったな、このチームにいて良かったな、って。これが味わえるのがスポーツの醍醐味だと僕は思っているんですけどもね。

時間が来ましたので、特に学生の皆さんには、一步、出たら国士館大学の学生だというふうにいわれるわけで、さすが立派だな、と思ってもらえるような行動を心がけてください。そういうものが、いずれ、小さな努力が大きな実を結ぶことかと思えます。皆さんに伝えたいのは、失敗の量が多い人が、成功の量も多くなります。失敗を恐れて何もしないことが、人生、失敗します。ぜひ、チャレンジしてください。そのチャレンジした結果、また次の壁が見えてくる。諦めないことが大切です。僕はこの大学で、人生の基本は学んだと思っています。理事長をはじめ、たくさんの先生方に、本当に感謝してもきれないくらい成長させていただきました。

他の競技も、柔道の齊藤仁さんと一つ違い、二つ違いでした。同じ柔道とサッカーの監督でね、オリンピックに行ったり、素晴らしい仲間に出会えたことが、僕の自信にもなっています。ぜひ、人脈作りとか、友達とか、学校の授業はもちろんですけども、ぜひ、成功より成長を求めてやっていただきたいというふうに思っています。

お話のほうはこのあと座談会もあるので、締めさせていただきます。以上になります。今日は本当におめでとうございます。先生の皆さん、先生方、本当におめでとうございます。ありがとうございました。

どうもありがとうございました。サッカー、世界に、レベルの非常に高い中で、国旗を背負ってですね、世界に行く大変さを、またそういった中で、一流の選手を見てきて、成功の要因といった話ですね。このお話を聞かせていただいた学生の皆さん、大変勉強になったと思います。また我々教員も、山本さんが、主語の使い分けですね、こういった時にはこういうふうな言い方をするといいところ、大変勉強になりました。我々も意識して、教育のほうに携わっていかなければいけないというふうにも思った次第です。山本さんにはこの後、第2部座談会にも引き続き、ご参加いただきますので、よろしく願いいたします。ありがとうございました。

それでは、第1部講演は以上となります。ここで15分の休憩に入ります。第2部は3時10分から開始いたします。よろしく願いいたします。

# 政経学部創設60周年記念

## 記念講演会



### 第2部 卒業生座談会 — 国士館政経学部の過去、現在、未来—

司会 政経学部経済学科  
主任 熊迫 真一

大変お待たせいたしました。ただ今から第2部座談会を開始いたします。この座談会は、国士館大学政経学部をご卒業され、各界でご活躍の方々と、政経学部の過去、現在、そして未来を語り合おうというものです。ご参加いただけます方々を、卒業年次順にご紹介いたします。

株式会社第一ビルメンテナンス代表取締役、三浦光一さんです。

**三浦**：よろしくお願いいたします。

先ほどご講演をいただきました、山本昌邦さんです。

**山本**：よろしくお願いいたします。楽しみにしております。

有限会社春華堂代表取締役社長、山崎貴裕さんです。

**山崎**：よろしくお願いいたします。

花巻東高等学校野球部監督、佐々木洋さんです。

**佐々木**：よろしくお願いいたします。

磯崎自動車工業株式会社代表取締役社長、磯崎拓紀さんです。

**磯崎**：磯崎と申します。よろしくお願いいたします。

それでは最初に、お一人ずつ、これまでのご経歴と大学との関わり合いについて、大学時代の思い出なども踏まえながら10分程度でお話しただければと思います。三浦さんからお願いできますでしょうか。

**三浦**：はい、わかりました。皆様、こんにちは。昭和53年政経学部経済学科卒業生の株式会社第一ビルメンテナンスの三浦と申します。よろしくお願いいたします。

今日は、国士館大学政経学部60周年記念、誠におめでとうございます。また、60周年記念講演にお招きいただき、ありがとうございます。大げさかもしれませんが、今の私があるのは、国士館大学の政経学部があったからと、改めて今日の先生方のお話を聞き思っています。

思えば、高校の恩師から、三浦くんは国士館大学が一番向いて

いる、といわれて、国士館大学に入れさせていただきました。私の恩師と国士館大学には、本当に改めて感謝申し上げたいと思います。今日の60周年記念にちなんで、私の自己紹介と学生生活の時の心境を少しお話し申し上げて、私の挨拶とさせていただきますと思います。

私は、昭和49年、国士館大学に入学して初めに思ったことは、「井の中の蛙、大海を知らず」これをまさしく実感しておりました。日本全国から集まってきている先輩や同僚を見て、その人なりや考え方のスケールの大きさ、あるいは熱量に圧倒されたように思います。私が学生時代の頃は、学内には常に挨拶が飛び交い、先生と生徒の熱量の大きさと活力に圧倒されていたことを思い出します。活動意欲があり、熱量がある学生に教えている先生方のご指導も、本当に大変なことだったと思っています。

私は、部活は日本拳法部に所属していましたが、思い出すと、ただただ必死に先輩に食らいついていたように思います。大変だった、辛いと思ったことも多くありますが、今となってはとても楽しい思い出になっています。4年間の中で先輩に鍛えられ、教えられ、そして先生に教えられ、鍛えられ、そのおかげで今の私の人格と精神性が身についたように思っています。この年齢で思うことは、学生の頃の辛い、苦しいは、自分が成長するための一時的な痛みだけであり、つまり、子供の頃、関節が伸びる痛さと変わらず、成長する痛みであるのかなと、このように今、考えております。

学生時代の思い出を話すというと、たくさんありすぎて、なかなか話し切ることができませんが、一言で言えば、毎日のように、先輩、後輩、同輩とよく飲み、よく遊び、よく語り合っていました。先生や先輩、後輩とよく語り合っていて楽しんでいるうちに、気がついてみれば、あっという間の4年間を送っていたように思います。

大学で学んだことを一言で言えば、国士館大学の建学の教え、この精神に尽きるのでは、と私は思っています。私はこの年齢になって、この建学の精神の言葉の力に今さらながら驚きを感じています。

学生の頃は、特に意識したわけではありません。社会に出て、



株式会社第一ビルメンテナンス  
代表取締役 三浦光一



山本昌邦



有限会社 春華堂  
代表取締役社長 山崎貴裕



花巻東高等学校  
野球部監督 佐々木洋



磯崎自動車工業株式会社  
代表取締役社長 磯崎拓紀

気が付いてみると、この建学の精神をただ単に実行していただけないのかと、私は今、思っております。国士館の建学の精神、誠意、勤労、見識、気魄。学生の時にはよく意味もわからず、私は唱えていました。私の思う誠意とは、言ったことを実行する、言葉に出したことを実行する、それが約束を守ることにつながる。また、私の思う勤労とは、一つのことを一生懸命行う。一度取り組んだら、他のことを考えずに最後までやり抜く。また、私の思う見識とは、学んだこと、知識を実行に移して行動すること。その見えないものを、実行、行動することで、見えないものの本質が見えてくると私は考えています。また、私の思う気魄とは、自分の信念に基づいて、正しいことを強い心を持って、何があっても諦めないで臨んでいくことです。

学びは真似る、真似て習うから学習という言葉が生まれたと聞いております。まさしく国士館大学はその学びの場であったように思っております。不勉強な私が大変おこがましいのですが、一言、参考のために申し上げるとすると、私が子供の頃から実行していること、思いを強くする、あるいは、思いを長く持続して、その思いを達成するまで諦めないことを私は実行してきました。思いを別の言葉に置き換えると、目的・目標となります。これを「志」といってもいいかと思えます。志の小さい人は、志の大きい人に勝つことはできない。この言葉を、目的・目標に置き換えてみると、目的・目標の小さな人は、目的・目標の大きな人に勝つことはできないということです。大切なことは、学生のうちに何でも体験する、そして、実践の中から物事の本質を掴み取り、人生の目的・目標を立て、卒業していくことではないかと私は思います。大学の4年間は、社会に出る準備期間になります。自分の人生をより良くつくっていくための、とても大切な時間となります。

ご覧になっている学生と先生方の益々のご発展とご多幸を祈念いたしまして、私のご挨拶とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

どうもありがとうございました。それでは、次に山本さんお願いいたします。

**山本**：山本です。よろしくお願いいたします。皆さん完璧なスピーチ、尺も全く問題なく、尊敬します。先輩、お疲れ様でした。僕は2番手だっただけでわかっていなかったんで、先ほどの講演でも、学生の皆さんはじめ、皆さんに聞いていただいたので、ここは簡単に。

昭和56年に卒業しました。この歳になるまでサッカーの仕事しかしてきていないので、先ほども話したんですけども、大好きなサッカーでこうやって人生を過ごしてきました。すごい幸せなことだなと思っております。

まずですね、現在の仕事なんですけれども、僕は日本サッカー協会の技術委員というメンバーで、代表チームダイレクターという仕事があるんです。サッカーの場合、A代表からオリンピック、20歳以下、17歳以下と世界大会があったりして、その狭間も全部代表チームがありまして、そこの団長みたいなことで結構海外も行くんですけども、今コロナで作業が止まっていますけれども、トレーニングセンターを持っているので、そこで合宿をやったりする。また来週も20歳以下の代表チームの合宿が幕張であるんですけども、そこに国士館の2年生の、20歳以下なので2年生なんですけど、望月という、190cmを超す、彼は三菱養和のアカデミー出身。そんな後輩にも会える、この仕事は楽しみです。あと、J3のアスルクロー沼津の会長とか、静岡県サッカー協会の副会長もやっていますので、ぜひ、春華堂さんにはお世話になりたいなと思っているところです。

子供たちの未来のために社会貢献みたいなことが、これから未来の話なので。後半はこんな話ができればなと思っているんですけども。

僕はこんな仕事をやっているんですけども、過去、何で政経学部に入ったかということなんですけども。政経を選んだ理由は、当時、まだプロサッカーリーグはなかったので、サッカーで就職はできたんですけども、ヤマハに。仕事は半分やらなきゃいけないので、会社に行って、僕は購買部というところに配属になって、部品の値段を決めたりとか、そういう政経を出ていて役に立ったなということがありました。体育学部のほうにいくサッカー



の連中も多いんですけども、体育の教員とか。クラブとかに行くので、スポーツの選手たちなので、そっちのほうに行く奴が多かったんですけども、僕は日本代表から大学

時代、ユースの代表、20歳以下からずっとA代表まで上げてもらったんで、大学でこの人生全部をつくってもらったといってもいいと思います。

政経学部の利点がありまして、1、2年は鶴川なんですよ、当時。サッカーのグラウンドは鶴川にあったので、体育学部は世田谷に行くんですけども、彼らは往復で疲れて帰ってくる。でも、1、2年は雑用が多いんですよ、グラウンド整備とかね。で、「僕ら近くだから代わりにやっておくわ」みたいな感じで。空き時間も帰って昼ご飯を食べて、昼寝する時間もありましたし、これが結構メリットでした。3、4年になって余裕が出てくると世田谷に行くんで、世田谷に通うといろんな刺激はありますよね、都会に出ていくということで。そうやって社会勉強をした。大学時代、代表で、クラブで夕方の練習なんですけれども、それで体力万全で行くために、この4年間で、と思って政経学部で。勉強もちゃんとしていたつもりなんですけども、学生主事の先生には本当にお世話になりました。僕は代表選手だったので、海外遠征でヨーロッパに1ヶ月行っちゃったりすると、追試、追試で「本当はお前、落第だけだな」といわれながら、「先生、すいません」といって、夏休みとか春休みに追試を受けさせてもらって単位をもらったとか、そういうお世話になったことしかないですね。ギリギリしてもらって単位取れたとか、本当にご迷惑をおかけしました。こんな学生時代で。

学生の皆さんには、今日、後半のお話になると思うんですけども、ぜひ、大好きなことを仕事にすると、得意なことは必ずあるはずなので、こういうものを仕事にすれば、人生幸せなんだろうなというふうに思います。苦手なこととか、嫌いなこととかは、頑張れません。得意なこととか、人より上手にできることとか、好きなことを。学生の皆さん、これを聞いていると思うんですけど、楽しいことを選んじゃダメですよ。楽しいことは、楽な道ですから。同じ2つの道があったら、厳しい道に行ったことが成長の道なんで、それは大好きなことだから、たぶん我慢できるし、人生の、自分の役に立つことなんで。サッカー選手でいえば、ご飯も食べるし、休養も仕事だし、トレーニングも仕事なんだけど、そのまわりのことも頑張れる人が一流選手になっていく、そのほんのわずかな差なので、そういうようなものを、学生の4年間でぜひ身につけてもらって、たくさん後輩が政経学部ですからね、経済的にもガッツとやってもらって、スポーツに国士館の卒業生を応援してもらえるような活躍をぜひしてもらって、一体感を出していきましょう。以上です。

ありがとうございました。それでは続きまして、山崎さんお願いいたします。

**山崎:** はい、ありがとうございます。平成10年度の卒業の山崎と申します。よろしく願いいたします。

私は、静岡県の浜松市でうなぎパイの製造販売を営んでおります。今回は創立60周年ということで、誠におめでとうございます。それから、今回、パネルディスカッションにお声をかけ

ていただきまして、本当にありがたく、そして感謝申し上げたいと思っております。

自分は、通常4年で卒業するところ、6年間お世話になって卒業させていただきました。遠回りをしたのが、良かったのか。今、思えば満足できる国士館大学生活だと思っております。

うちの会社は創立130年を超えてきて、今、4代目をさせていただいております。自分の役目としてですね、先代よりのれんを受け取ったので、受け渡すのが自分の役目だと思っております、その受け渡す時に、次に引き継ぐ人へ「よりこうなったら良かったな」「自分もこれだけできたな」というところまで頑張れたらという思いでやっております。コロナというこの時代の中ではありますが、うなぎパイはお土産に関わるものですから、どうしてもお土産が下がり気味でちょっと元気がないような形なんですけれども、その中でも笑顔で頑張って何とか乗り越えていきたいなと思っております。

国士館に入学したきっかけというのも、大きな声ではいえませんが、目標も何をしたいというのがなかったんですから、親に「東京の大学に行きなさい」と、「できれば、政経学部を選びなさい」ということで、国士館大学を選ばせていただきました。

入学してから本当に良い仲間巡りに巡り会えてですね、ものすごく楽しい時間を過ごさせていただきました。近くの食堂とかに行ってもですね、国士館大学の学生だということで、みんな騒いで迷惑をかけたのかもしれないんですけども、本当にそういうことをすると、料理を一品追加で出させていただいたりとか、本当に国士館大学の学生で良かったなと。お金も無い時代だったので、本当に良かったなという思い出もあります。夜もみんなでご飯を食べたり飲んだりしている時も、少しテンションが上がっていろいろな方と喋る時も、国士館の学生だということ、少しご馳走していただいたりとか、そんなことがあったなというのが思い出としてあります。ですけど、自分が国士館大学に入って一番良かったなと思ったのは、本当に多くの仲間に出会えたということ。自分はさっきもいいましたが、6年かかったので、4年の時に多くの仲間が卒業してしまって、自分一人だけ残ってしまったものですから、学校もなかなか行けなくなってしまって、僕の下宿しているところで、ずっと部屋にいたりとか、引きこもりではないんですけども、そういう生活を過ごしている時に、大学の時の同級生がたまたま石黒さんに修行に行っていて、ここの社長さんに、浜松にあるうなぎパイの会社の社長の息子だ、引きこもりじゃないんですけど、引きこもっていて大学にも行っていないということを相談していただいた時に、その社長さんが友達と一緒に来てくれて、「君は本当に大学を卒業する気があるのか」といわれたので「はい、あります」と答えさせていただいたら、「本気で卒業しようと思っている子は、今、大学にいつている時間だよ」といっていただいて。で、「大学に今行く気がないなら、うちに遊びにおいで」と声をかけていただいて、そこから遊びに行きながらお小遣いくれるなら、くらいの軽い気持ちで行き始めながら。また、その修行をさせていただいた石黒社長に「大学に行きながらこっちにおいで」ということを途中でいっていただいて、5年、6年と、その後2年かかったんですけども、大学と二足の草鞋でなんとか卒業させていただきました。本当に国士館大学で出会った友人やまわりの人たちに支えられて今があると思っておりますので、ここでの経験は自分の中でのターニングポイントの一つではないかなというふうに思っています。

今の学生の皆さんにも、自分が何をこの場でできるのかなと思っただけですけども、自分は夢や目標がなく大学生活を過ごしていたので、遠回りをしましたけれども、何か大学時代の時に、「自分がこうなりたい」とか「こうしたい」とかやるべきことが見つかるような時間であってほしいなと思います。また、社会に出る前に少しでもその目標に積み重ねる期間として使えるような時間だったら素晴らしいのではないかなと思っております。自分の経験とか、自分は菓子屋なものですから、お菓子とかそういうものを、観光とかも含めて、いろいろな中で皆さんに何か伝えることがあったらお伝えさせていただいて、何かいいヒントになれるように頑張らさせていただきたいと思いますので、よろしく願いいたします。簡単ではございますけれども、挨拶と代えさせていただきたいと思います。よろしく願いいたします。

はい、ありがとうございました。では続きまして、佐々木さん、お願い致します。

**佐々木**：花巻東高校の野球部の監督をしています、佐々木です。

こういう素晴らしい会でふさわしい話ができるかどうかかわからないんですけども、大学時代の思い出とですね、大学との関わりについて話をしたいと思います。

国士館大学の野球部にですね、スポーツ推薦でとっていただいて、一関学院高校という野球が強いんですけども、岩手県で。その方も国士館大学の政経のOBで、去年辞められたんですが、横浜単人高校というところの野球部の監督さんも国士館大学政経学部のOBですね。その人たちの伝手を使いながら大学に入らせてもらったんですけども。当時の大学でしたから、どこもいろいろな上下関係があって大変な時代だったと思うんですけども、まさに我々の時も、どこの大学も国士館も大変だったというところですね。実はうちの硬式野球部、当時2年生になると、使えない選手は退寮制度というのがあってですね、新入生を寮に入れなきゃいけないので、出てください、と。あとはアパートから通え、ということなんですけども、事実上リストラになるわけなんです。岩手県の田舎から出てきたものですから、できれば東京で一人暮らしをしてみたいなと、退寮だったら退寮でもいいのかなということは、実は、頭で描いていたんです。大学2年生の時に無事、リストラに遭いましてですね、寮を出されたんです。なので、私も正直、当時の国士館に良い思い出があったかというところで、辛い思い出が非常にあったんですけども、寮を出させてもらってですね、当時、テレビも自由に見られなかったですし、昼寝もできなかったような状況でしたのでね、本当に退寮になって喜んでですね、スキップしながら不動産屋に行ってアパートを契約して。国士館の近くの、場所はちょっと忘れちゃったんですけど、町田街道のほうですかね、マクドナルドとかあった郵便局のほうを降りて行ったその辺のアパートを借りてですね、田舎もんですからお風呂とトイレは別でなきゃいけないとか、わがまをいってアパート借りたんです。もう本当に幸せだ、と思って。東京で一人暮らしが始まった、と思ってですね。



当時はですね、ダイナミックダイクマというのがありまして、ダイクマに行って、アパートのものを全部あつという間に1日で、ガラスの1980円くらいのテーブルとか、ソファとか、テレビとか、全部買ってですね。これから彼女でもつくって、友達でも呼んで、楽しい東京で一人暮らしだ、と、思っていたんです。その日のエネルギーというのはハンパじゃなかったですからね、一人暮らしできるということで、喜んでですね。ただ、全部セットした後にですね、テレビをつけた後に衝撃が走ったんです。あれだけテレビを自由に見られなくてですね、一人暮らしもしたいと思って初めてソファも、パタッと倒して上がるような安いやつだったんですけども、そこに座ってテレビのリモコンスイッチを入れた時に、私に電気が走ってですね。私自身。そこが私のスタートだったと思っていますんですけど、「何をやっているんだろう」と、初めて思ったんですね、その時に、寮を出てですね。できれば社会人とかプロで活躍するような選手になりたいと思っていたんですけども、本当にその時のスイッチを入れた時に自分にスイッチが入ってですね。今までの人生、初めて振り返ったんです。「なんで俺、こんな人生になったんだ」と思っています。で、その日のうちに、実は、本屋に走ったんです。私、マンガ本も見ると、当時、活字を見るのが嫌いなんです、その時、迷っていたんで、本屋に行って自己啓発のところに行ったんです。よっぽど迷っていたと思うんですよ。読みたくて読んだんじゃなくて、腹立って取った本がですね、ナポレオン・ヒルという人が書いた『思考は現実化する』という本だったんです。「本当か」と思って、「こんなことあるわけねえだろう」と本を買ったんです、読んでみようと思ったわけじゃなくてですね。そうしたら、そこにすごいことが書いてあったんです。「本当か」と思って、私も疑い深いので、また本屋に走ってですね、同じようなことが書いてあったらですね。夢の叶え方について書いてあったんです。で、我々は「夢を持って」「夢を持って」とすごくいわれてきたんですけども、その夢の持ち方というかですね、夢と目標の違いとが、目標と決意の違いが曖昧なままだったんです。なので、思っていることと、行っていたことが全く違うことは、大学時代でもですね、雨が降ったらラッキーだと思っていましたし、今日、監督がいなければラッキーだと思った、練習が楽だなと思ったりしたことがですね、その20歳の時に気付いたんです。で、目標の立て方が「数字を挙げなさい」と書いていました。初めてそのことを知ったんです。これは数学の方程式を教えるよりも大事じゃないか、と、教科書で。「数字を挙げなさい」と書いてあって、それから「期限を決めなさい」ということが書いてあったんです。私その時20歳で、ズタズタで、お先真っ暗で、指導者になることも何も決まっていなかったんです。寮を出されたので。そこに「紙に書け」と書いてありました。ビジネス書に「手帳に書け」って書いてあったので、次に文房具屋に走ってですね、20歳の予定のない私が紙に書いたんです。その時に「28歳で甲子園に出る」って書いたんです。選手としても失敗したと思ったので、「期限を書け」「年齢を書け」と書いてあったので。よくよく考えたらですね、今日も話をさせてもらっているんですけど、これ母校の、国士館じゃないですよ、国士館で喋れるような人間になれると思わなかったのが、私がですね、自分の高校の母校も旧制中学なんですけど、一度も甲子園に出ていないので、甲子園に出たら講演に呼ばれるなと思ったんです。で、「ワクワクするようなことも書け」と書いてあったんで、私、黒沢尻北高校の出身なんですけれども、「黒沢尻北高校で講演」って書きました。で、次、私、江釣子中学校の出身で「江釣子中学校で講演」って書いたんですね。そしたらですね、ここに花巻東に採用になったの

も新聞を見て受けたんです。監督と呼ばれた訳じゃないので、社会科教員と呼ばれたんです。実は、最初はソフトボールの監督をしてですね、あ、バドミントンだったんです、その次にソフトボールをしてですね、そして野球の監督をやらせていただいたんですけど、初めて甲子園に出たのが28歳の時だったんです。もちろん、高校でも講演しましたし、実は、国士館大学でも講演させてもらったんですけども。しっかりと具体的な数字を挙げてですね、期限を決めると、目標が達成するんだなということを大学の時に学んでですね、今、それを実践しているということで。大谷翔平が目標シートを書いているのをご覧になった方もいるかもしれませんが、実は、そういうことですね、数字を挙げてですね、例えば「160km出す」とかですね。当時、最初からメジャーに行くって書いていた、迷ってジョン万次郎のように漂流していたらアメリカに行ったんじゃないくて、アメリカに行こうとしたから行った、と思うんです。

そういうのを大学時代に気づいて、そこから、20歳の時から、自分の人生、リストラにあって変わってですね。本当に、国士館時代には何も成し遂げられずに皆さんに迷惑をかけたんですけども、花巻東に縁ができてからは、今の教頭も菅原というんですが、国士館のOBで、当時2、3人国士館の先生がいらっしゃってですね、本当に助けていただきました。実は、私が今勝たせてもらっているのはですね、部長も政経学部のOBで、流石というんですけども、大学の監督さんから紹介してもらって連れてきたんです。やっぱりナンバー2、コーチこそ大事だということで、学校が誰かつけるよって言われたんですけども、私の血筋、国士館の血筋がいいと思ってですね、校長にさんざん推薦されたのを断って、流石というものを連れてきてからですね、勝たせてもらっております。コーチは足を引っ張ることもできますし、監督の座を奪うことも簡単だと思うんですけども、本当に忠誠を誓ってですね、ここは国士館じゃないかなと思ってるんですね。今、サッカー部には柱谷哲二さんも来ていただいて、監督も2人とも、監督、コーチ、また今年、国士館から呼んだんですけども、大澤理事長のお力を借りてですね。柱谷さんとも交渉させていただいてですね。副部長までサッカー部は国士館でして、スタッフ4名、国士館。今、学校がほとんど国士館なので、国士館大学付属といわれていますが、本当にそれくらい理事長をはじめご協力いただいて、花巻東、国士館のおかげで成り立っています。本当に、大学時代、何も成し遂げられなかった私がですね、理事長室に入った時は本当に感動しまして、話させていただいて、震えるような思い出です。何もできなかった私が理事長室に入れるなんて、想像もしてなかったんで、本当に国士館を出て良かったなと思っておりますし、何よりも財産は、本当に国士館のOBの方々に支えられて、可愛がられてですね、なんか国士館って、他の高校と違って、そういうふうなつながりというか、面倒を見るとかですね、ここはうちの大学の一番自慢できるところじゃないかなと思って、誇りに思っています。

野球部から私の卒業生、教え子を今日調べたんですけど、55名くらい、実は国士館大学に行っておりまして、私の大事な受け皿になってくださっていますし、そこでまた育てていただいたことが、いろいろなところで指導者になってくれていますので、本当に誇りに思っていますね、少しでも、今後とも国士館大学の名前を広げられるように、私自身も頑張っていきたいと思っております。本日はよろしくお願いいたします。

はい、ありがとうございました。続きまして、磯崎さんお願いいたします。

**磯崎**：はい、改めまして、茨城県ひたちなか市から今日はやらせていただいております、磯崎自動車工業株式会社、磯崎と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

まずはですね、国士館大学政経学部創立60周年、大変おめでとうございます。先輩方、先生方、OBの皆さん、学生の皆様方、本当におめでとうございます。

私は平成15年に卒業ということで、今日、一番皆さんの中で年下という形になります。昨年40になったばかりで、やっと迷いなく人生を歩んでいるところでございます。

私は世田谷通りに住んでおりまして、確か、世田谷線の上町駅の近くのサイゴンというベトナム料理ですかね、多分、今もあると思うんですけど、そのすぐ近くに住んでおりまして、学生生活を謳歌した覚えがあります。自分が住んでいる茨城県も田舎なので、田舎者が東京に行って、非常に背伸びをしたことを、昨日のこのように覚えております。学生時代、政経二部だったので、昼間はアルバイトをして、夕方から学校へ行くような生活をしていたんです。学生時代は、世田谷通りのレストランでアルバイトをしていまして、ちょうど世田谷通り沿いの、農大との間ぐらいですかね。農大の学生とか、国士館の大学の先輩方とかいらっしゃって、いろいろな学生の方々和交流したというのが学生時代の思い出です。学生時代、私自身はゼミの印象がありまして、野下先生に大変お世話になったんですが、3年生、4年生と2年間、同じ野下先生のもと、ゼミ長をやらせていただいて、そこでの仲間が非常に面白い人がたくさんいて、二部学生だったので、社会人の方で学生をやられている方も結構たくさんいらっしゃって、多種多様な方がいっぱいいらっしゃいました。俳優をやっている方もいらっしゃいましたし、自衛隊の特殊部隊の方もいらっしゃいましたし、あとは、5浪くらい、5回くらい受験してやっと入ったという先輩もいました、同級生なんですけど5個上の先輩もいましたし。親に反発して学費を一切もらわずに、リサイクルショップでずっとアルバイトをしながら生計を立てているということで。ちなみに、その子は、その後、そのリサイクルショップの副社長になったそうです。そのまま、こうやって人生を決めている方がいらっしゃいました。

そういった学生時代ですね。学校に行ってみんなと遊んで、多分皆さんと似たような学生生活を送っていたんですけども、その後、家業が車屋ということで、実家がスズキの販売店をやっていますので、山崎社長の浜松のほうの本社のスズキにいていまして、スズキの販売店をやっております。地元が車社会なので、車がないと生活ができない場所なので、地域のインフラになればいいかなということで、少しずつ会社を大きくしているところでございます。会社としては、地域貢献をしっかりとやっていこうということで、小さい会社なんですけども、僕自身は野球をやっておりまして、大学時代はやっていなかったんですけども、スポーツが大好きなので、会社で利益を出したら、スポーツで地域貢献しようということで、地元のJ2の水戸ホーリーホックっていうところがありますので、もちろん、あと、バスケの茨城のロボッツというところもありました。選手とかを見ると、国士館大学の選手がいるので、そういうところを応援してあげたくなったりす



るところでございます。茨城県ひたちなかでも国士館大学という名前が非常に有名でありまして、話がですね、「お前も国士館か」みたいなことをいわれてですね、親近感を持っていただけるということで、ありがたく感じているところでございます。まだまだうちの会社としては、もっともっと規模を大きくしてですね、ぜひ国士館大学の学生をたくさん受け入れられるような会社をつくっていききたいなと思っておりますので、今後とも、頑張っていきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

すみません、短いんですけども、よろしく願いします。

はい、ありがとうございました。皆様方が大学に入られて、将来のことについてどういうふうを考えていらっしゃるのか、また、皆様方ご活躍されていますけれども、その道筋につながったきっかけといいますか、大学との関係というところも、少しお教えいただければと思いますが、いかがでしょうか。では、三浦さんいかがでしょうか。

**三浦**：私は特別、偉そうなことをいえるような学生じゃなかったんですけども、ただ大学に入って、とにかく夢中でしたね。まわりの先輩とか学生とか先生の熱で、夢中に動き回ったような感覚の中で学生生活を送っていたんじゃないかと思えますけど。その中で、私自身が尖っていたところをちょっと削られて、削られて、だんだん人並みに人間関係をつくれるようになっていたのかなと、そういうようなことを感じています。そんなような学生でした。答えになっているかどうか。

先ほど国士館大学に入られて、だいぶ刺激を受けられたというお話があったかと思うんですが、その熱というのは、まわりの同窓生だとか、教員といったところからの刺激だったのでしょうか。

**三浦**：はい、そうですね。刺激の中で、自分も少しずつ熱量が出て、活動意欲が出てきたように思いますね。「井の中の蛙 大海を知らず」といいますが、私は佐々木先生と同じで岩手出身で、私の場合は、岩手の最も北になります。そういうところから出てきていますから、とにかく東京に出て、また大学にいて、日本全国から集まってくる学生、同級生であったり、先輩であったり、そういう人たちに触れるたびに驚きだけだったんですね。だから、そんなことで、いろんなことを自分の中で学んだり、身につけて、少し成長させてもらったのかなという気はしていますけど。そんなことで答えになっているかどうかわかりませんが、皆さんから聞いていただければ。

はい、ありがとうございます。では、山本さんいかがでしょうか。

**山本**：はい、今お話を聞いていて、うちの妻も岩手県の出身で、学校は花巻。あ、北上でした、花巻に近いんですけど、あっちのほうだったし、大船渡出身だったので、岩手はすごい縁があるんで、なんか親近感が湧いてきます。この世の中で、僕はこういう縁で、今こういうふうに住事をさせてもらっているの。

私の高校は、他の大学の付属だったんですけども、そのサッカー部教員で監督が国士館大学のOBで、体育の先生で来られていました。サッカーが地域で強かったんで、そこでサッカーをやるのかなと中学校の頃に思っ。高校1年が入った時に、最初の国士館大学とご縁は、その大学のOBの監督がですね、僕はいろいろ陸上の方とかも結構あれだったんで、先生が1年生の夏休みにですね、高校のクラブは休みになるんですね、高

校1年生でまだ子供の時に、国士館大学のサッカー部の練習に「お前、1週間、面倒を見てもらえることになったから」って。卒業生の先輩もいたんですけども、今の澤理事長が監督で、1週間、突如、明日から楽しい夏休みかなと思ったところ、「鶴川に行きなさい」ということになりまして、もう「ええ」と思っ。高校1年生の子供で、今、大学の職員でやっている先生方のサッカー部の指導者の方も大先輩でいた時に、大学の4年生と高校1年生だから圧倒的に力の差があるわけですね。それで泣きながら練習をして、「1週間経ったら家に帰れる」と思っ。僕は静岡の三島の学校だったんで、実家が沼津のほうで、「1週間、我慢すれば」って。本当に練習きつかった覚えがあります。で、寮から帰って、高校で、高校3年生、2年生、僕1年生とで練習した時に、高校3年生が子供のように思うんですよ。大学4年生と練習してきたんで。そこから僕のサッカー人生が変わりました。高校1年生なんですけど、高校3年でもへっちゃらだと思っ。試合に出られるようになって。そのうちに監督が大学の出身なんで、大学にいつも練習試合に行っ、Aチームとはできないんですけども、下のBチーム、Cチームと試合をやっ。大学のことはかなり詳しく知っ。鶴川で政経学部は授業をやっ。まわりから全部聞っ。状況がわかってたので、大学に入る時にはかなり状況がわかってたので、政経学部の方が練習が楽だと思っ。鶴川で練習するんで、世田谷まで通わなくていいということがわかってたので、サッカーで練習するにはこっちのほうがいいと思っ。将来、社会人でやるしかないんで。

僕の小学校6年生の時の夢がですね、どんなことが書いてあったかという、「オリンピックで日本代表になって、サッカーで金メダルを取る」と書いてあるんですよ。小学校6年生の夢。この夢を追いかけてきたんで、20歳以下の日本代表で初めて海外遠征に行っのも大学1年生の時でしたし、代表に入ってオリンピックやワールドカップ予選も大学時代でしたし、全てをここで学んで、そのスタートが、その届かない世界、未知の領域、そういうチャレンジをしたことで、自分が知らない間に、一生懸命それについていったら、伸びていたという。「お前、ついてこれないだろう、邪魔だな」「お前、そっで休んでおけ」みたいなことを言われて、泣きながら走ったりしてついて行っ、1週間経ったら自分が成長していたという。だから、できない経験というのも恐れずに、学生の皆さんにはぜひ飛び級でチャレンジしてもらっ、その間、きつんですけど、終わってみたら、伸びているという。これを続けると心が折れちゃうんで、僕らの指導の中では、そういう飛び級の経験をさせたら、また下のカテゴリーに下げて、そこで余裕を持ってプレイさせて、またできないようなことを経験させる、っていう、繰り返して伸ばしていく、ということが、トレーニングの手法としてはあります。そんな理論がない頃に、体感させてもらったということでは、本当に感謝しかない、というのが今の思いです。できない経験をさせていただきました。

はい、ありがとうございます。では、山崎さんいかがでしょうか。

**山崎**：ありがとうございます。自分は、大学の中で、一番、目的とか意識とかがない中に入っ。友達とか出会いですね、自分が何をすべきかというのを気付かせていただいたので、そこで気付けたということがあります。

今、我々も会社で大学生を結構雇わせていただいているん



ですけれども、その子たちに聞くと、うちを目指して来ていただいて、その入社後、2年後、3年後の時に話をした時に、「何でうちに入社してくれたの？」という話をすると、条件とし

て近かったとか、待遇が良かったとか、いろんなことが本音としていっていただいているんですけれども。でも、漠然と入ってきた人もいますし、本当にパティシエになりたかったとか、うちの施設で接客をしたかったとか、いろんな部分部分のいいところを取っていただいている子もいる。今、自分が仮に大学生だったとしたら、何をすべきなのかなと思った時に、一歩前に出ることが自分は大事なのかなと。夢がある子たちは夢に向かって進んでいくと思うんですけれども、自分の大学の時みたいに何も考えていなかったとしたら、自分は何が好きなんだろうとか、何をしたら楽しいんだろうという、楽しいことがわからなかったら、いろんなところに出て経験をしたりとか、話をしたりとか、そういうネットワークが今いっぱいあるので、そういう中で、簡単にインターネットとかそういうものをツイッターとか、SNSとかだけではなくて、現地に行ってみたりとか。そこまで行くと、必ず誰かとの出会いがあったり、話をしてくれたりとか、その中で今まで身近では経験できなかったりとか、知り得ないということを知ることによって、もしかしたら、これは自分に合うものがあるんじゃないとか、自分にこれはあるんじゃないとか、そういうことができる、そのきっかけづくりにもなっていくと思うので。今ある大学生活という自分の中のカテゴリーがあるとしたら、その枠の中から一歩前に、横でもいいと思って、前に進むという、一歩、事を動かすということをしていくことで、多分、目標というか、目的を見つける一つのきっかけづくりになる。見つけたら、もう皆さん、多分進んで行けると思うので。進んでいけるような能力はあるのに見つけられていない、っていうのが一つ問題というか、そういうことがあるのかなと思うので。自分が今、学生の立場だったら、いろいろなところに足で出向いて。コロナ禍なので今はなかなか行けない状況かもしれないんですけど、動いて、足を使って、じゃないんですけど、そういう中で見つけていけるというのが、一つ、大きなきっかけづくりになるのではないかなと思っています。答えになっていなかったら、申し訳ないんですけど、ありがとうございます。

では、続きまして、佐々木さん、お願いできますでしょうか。

**佐々木**：私は当時の大学の監督にですね、方向転換をして指導者になろうと決めてからですね、「神奈川に残って勉強してけ」っていわれたんです。それが、すごく近道になりました。当時、東北地区はレベルが非常に低かったの、岩手県なんていうのは抽選会でくじを引くと笑われていましたので、そういう意味では、監督さんからそういうアドバイスをいただいたの、本当に良かったと思います。で、修行に行ったのがですね、それこそ横浜単人高校というところだったんですよ。この間、息子さんも預かって卒業させたんですけども。国士館のOBの先輩のところに行って、神奈川の激戦地区で学ばせてもらったのは、非常に良かったです。20歳から、実は、指導者になろうということで、大学生でありながら高校に行ってコーチの手伝いを始めたんです。みんながコ

ンパで遊んでいる時にですね、私は単人高校の監督さん、非常に交友関係が広い方だったので、毎日のように当時、年配の方々を接待していたんですね、焼酎をつくりながら「早く終われ、終われ」と思いながら、毎日接待に付き合っていて。かたや、みんな遊んでいたんですけども。ただ、今振り返ったら、あの経験が、20歳の時に、みんなが20歳の女の子たちとかと遊んでいたその会話と、私は20歳の時にかなり年配の人たちの話を聞いていたんですね。当時は「早く終われ」と思っていたんですが、ただ、そのことがいろんなことが残っていてですね、人より早くいろんなことを学べたんじゃないか、と思っているんです。したがって、大学4年間って、人生の中で一番大事なんじゃないかなと、すごく思います。ある程度、自由もききますし、いろんなものにチャレンジできるというか。

今、私は学生には、「大学に入ったら、とにかくアイテム、ゲームじゃないですけど、アイテムをいっぱいつけろ」という話をしているんです。私自身も20歳で大型免許を取ったり、いろんなアイテムを大学時代にとりました。また、卒業してからですね、違う免許が欲しくなって、近くの大学で体育の免許をとろうとか、いろんなことを考えたんですけども、なかなか時間がなくてですね。スクーリングがあったり、実は他の所でも免許を取りに途中まで通信で通ったんですけど、なぜ大学時代にアイテムをとらなかつたんだろう、と、思っています。ましてや、国士館大学は体育学部もあれば、文学部もあってですね、いろんなアイテムをつけられる素晴らしい大学なのに、なぜアイテムをつけなかつたんだと、この時間の時に。今、学生には、「とにかくいろんなもの、アイテムをつけておけ」と。今、私も学校をクビになっても、それこそ大型バスでもトラックの運転もできますし。大学時代に小銭稼ぎにアルバイトに出かけるんだしたら、そんなことは世の中に出てから大金を稼げるように、いろんなことを勉強すべきだ、と。アルバイトに時間を費やしているのはもったいない、あとでお金を稼ぐんだ、と。本当に私は反省ばかりの人生なんですけど、この大学4年間を学生さんには有意義に送っていただきたいと思ひますし、残り時間少ない学生さんもいると思ひますけども、アルバイトにお金を使っているの、もったいないと思ひますね。あとから大金は返ってきますので、それこそ本を読んだりですね、私の人生も本で変わったんですけど、そういう時間に当ててもらえればいいのか、というふうなことを、偉そうに話させて頂きました。

ありがとうございます。では、磯崎さん、いかがでしょうか。

**磯崎**：そんなに大した志もあれなんですけど。自分自身、家が車屋だったんで、大学に入る時は、将来は車屋さんに就職して、結果的にスズキにお世話になったんですけども。まわりでも社会経験されている同級生が結構いたので、振り返ってみると、今でもSNSとかで同級生の動向を知ったりするんですけども、本当にみんな、学生時代に好きなことをやって、それを磨き続けて、今でもそれをやっている子が多かったです。好きになってやり続けることってすごく大事だになって、改めて思うところがあります。

本当に大学時代の4年間って自由なので、先ほど佐々木先生がおっしゃったんですけど、いろいろなアイテムじゃないですけど、いろいろな経験をされるということは、自分の道しるべになるのかな、というのは改めて思っています。僕も学生時代、もっといろいろなことをやっておけばよかったなと、今でも思うので、時間の大切さというのは、大学の時はあまりわからなかつたんですけど、いざ社会に出てみると、時間が一番大事なんだと、振り返ってみ

ると思いますので、ぜひ大いに学んで、大いに遊んでいただいて、自分の道を楽しく探していただければいいな、というふうに思っております。以上です。

ありがとうございます。今、ひと通りお話を伺って、印象的な言葉でいいますと、三浦さんの熱量とか、山本さんから話しいただきましたご縁とかですね、そういう人と人との関係から生まれるもの、それからいろいろな経験を積むということが将来に生きてくるんじゃないか、という話をいただきました。

こういったところを考えると、今、入ってくる学生たちはこちらから働きかけをしないと、なかなか昔の大学生のように能動的に行動するというのは、どうもなさそうな感じがするんです。そうした時に、国士館大学では、または、その国士館大学の中でも政経学部では、どのようなことをもう少しやっていくと今の学生たちに良い経験を積ませられるのか、先ほどの言い方を使わせていただきますと、多くのアイテムを身につけさせられるのか、そういった何か我々のほうでこういうことをやっておけばいいんじゃないか、というようなご意見等、ございますでしょうか。

**三浦**：はい、今、皆さんが話したようなことに尽きるかなと思いますけども、私は会社で、今、新入社員とか高校生、大学生に毎年、入社していただいていますけど、その時



にお話させていただきますのが、私は岩手出身で、東京に出てきた時には、もう本当に恥ずかしいことばかりですね。私の個性は、言葉もうまく言えないし、大学へ行くと訥弁で恥をかきました。でも、僕はそれでいいんじゃないかなと思いました。新入社員とかみんなはいろんなところから集まってくるから、個性はあっていいし、考え方は十人が十人違って当たり前と、そんなようなこと話していますね。考え方が違って当たり前なのは、生まれたところが違う、育ったところが違う、親が違う。これは、考え方が正しいということはありません。ただ大事なことは、みんながそういう考え方もあるんだな、それもあるんだ、じゃあ自分には何が一番合うんだろう、自分は何を取り入れていこうか、そんなようなことを考えていくことが大事だよということ。

それと、じゃあ1年後、2年後、3年後、何になりたいのかな、どうしたいのかな、というのを考えて、そこに向かうことが大事だよという。先ほど佐々木さんですか、数字の目標設定が大事だよという、まさしくそれが大事で、数字で目標を設定していくと、必ずそこにいく方法が考えられるんじゃないかと、そんなことをよく話しています。

これがご参考になるかどうか、もう皆さんが話していることに尽きるんじゃないかなと。私みたいに昔の感覚で、今の若い子供たちの話をしたら、とてもじゃないと引いて、みんななかなかついて来られませんから。そういう意味では、ただ共通しているのは、やっぱり誠実であったり、約束を守ることであったり、嘘をいわないことであったり。人の役にちょっとでも立ちたいなということで、人間関係を大事にしていたら、良い人間関係が生まれて楽しくなるよと、そんなようなことをよく話しています。

どうでしょうか、答えになっているかどうかわかりませんが。

ありがとうございます。山本さん、いかがでしょうか。

**山本**：ありがとうございます。そうですね、僕ら、選手が終わった後に、指導者として強いチームづくりというのをしないと、プロの世界で評価されない中で、結局、自分がプレイするわけではないので、選手にどういうふうにやってもらおうかということなんで、僕らは伝えることが仕事ではないんですね、伝わった結果が勝負なんで、その伝わった結果というのは心を掴まなければ、選手がその気になってやるという感情のマネジメントみたいなこと。先ほどの主語の話もそうですし。試合前であれば、個人に向けつつ集団に理解させるようなテクニックというのも学びます。

サッカーの世界ではS級ライセンスというのがないとプロの監督ができないんですね。そのS級ライセンスに行くために、下からあるんですけど、代表クラスの人は、C、B、A、Sと行くんですけども。Sは1年間、座学も含めてサッカー協会と大学とコラボしているやつで、ずっとやらなきゃいけない、海外研修もある。そのS級は年間に20人しか受けられないんですね。で、この中でいろいろなこと、ディベートだとかいろいろなことを学んでいって、指導者として成長していく。でも、30くらいで下のライセンスを取っている指導者というのも結構いたりして、一生、勉強するチャンスがあるというところがいい。大学を出たらそれで終わりじゃなくて、大学はただの免許であって、その免許を使って、政経学部に卒業したという免許を使って、どうやって社会に貢献していくか、というようなことの話だと思うんです。僕らはやっぱり自分の長所を生かしてもらいたいと思うし、自分の強みを生かしてもらいたいと思うし、自分にしかできない特別なことがあれば、間違いなくそれは才能なんで、その才能を生かして社会に貢献していく、というようなことができれば、すごいことになるんじゃないかなと。

もう一つ、アドバイスというか、僕らが勉強したことで、未知の領域ですよ。僕らでも未知の領域がまだあって、その未知の領域とか、前人未到とか、そういうわからない世界に行く時は、一生懸命に勉強することはもちろん大前提なんですけども、経験のある人に聞くということが正しい道だと思います。世界一になった人、日本一になった人、大先輩の先生に、できれば失敗の経験のある人がいいですよ。そっちはダメだったよ、ということを教えてくれる道だと思うんで、そういう良い道しるべになってもらえるような先輩、恩師、そういう人をどう見つけるのかっていうか、そういう人が増えると、本当に困った時に、そっちはだめだよって教えてくれるし、こういうのもあるんじゃないかって教えてくれると思うので、そういう人脈は重要なかなと思っております。

とにかく若い子供たちには、本当にチャレンジしてほしいです。挑戦する才能が一番大事な才能だと思うんです。はい、以上です。

ありがとうございます。では、山崎さん、お願いしていいですか？

**山崎**：ありがとうございます。自分も失敗を恐れずにやっていただきたいと思っています、いろんなことにチャレンジするっていうのが大事なんですけど、なかなか自信がなくてとか、何をしたらと思うと思うんですけど。

多くの高校生や大学生を雇っていますが、サークルの中で、例えば、自分がリーダーを取れていたとすると、会社の中でも同じようにリーダーを取れたりとか、多分その子でリーダーを取る責任感を持ってやっていたりするんですけど、これって、その子だけが得ているわけではなくて、例えば、意識をして5人とか6人で喋っている時に、1時間の中でいかに自分がいっぱい喋って

リーダーシップを取れるかって意識して喋るだけで、リーダーシップのコミュニケーション能力もついてくると思うんです。何か日常生活の中でも成長する場面はもちろんありますし、そういったことで、1つずつ自信をつけていってもらいながら、次の一步に進めるような、きっかけづくりみたいなものを自分でとれたら一番いいのかなと思っています。

また、本当に多くの方に出会える唯一の時間、大学生活ってそうなのかな、自由もあるし、ある意味、半分大人でもあるので、高校の時には行けなかった場所とか、できなかったこととか、動く範囲もそうですけど、国士館大学には県外から多くの学生が来ているので、今はちょっと行けないですけど、夏休みとかそういう時に、いろんなところへ足を運んでいただきたいです。地方の会社、例えば、静岡の浜松の我々みたいな会社を見ていただくと、こんな会社があるんだとか、東京とはまた違った空気があったりするので、視野が広がって行って、自分たちで検索をしたりとか、出会うことでこういう学校がある、こういう会社があるかと思えると思います。今はコロナで本当にかわいそうだなと思いますが、それでも何か今やるべきこと、できること、今日みたいなこういうリモートもそうですけど、そういう中でいろんなことを聞きながらとか、それを聞いてヒントにして、一步前に入るきっかけになっていただければいいなと思います。

今あるこの時だけでも、できる範囲で自信を持つこともできるし、学ぶこともできる。それが必ず社会に出て役に立つという、自信を持ってじゃないですけど、そういうことが必ず生かされるということを知っていただきたいなと思っています。結果、何もしないのではなくて、一步前へ出る、踏み出ること、気が付いて、大事にしてもらいたいなと自分は思っております。

ありがとうございます。では、佐々木さん、お願いします。

**佐々木**：私、先ほどアイテムの話させていただいたんですけど、今、社会の勉強も、社会科ではなくて、地歴公民で分かっているんです。私は、実は、地歴しか持っていないで、実はあとから玉川の通信に通うことになっちゃったんですけども、公民を取らなくてはいけなくて。うちの国士館卒業生の部長はですね、2つ持っていたんです、両方、大学時代に。それから、図書館司書の免許までアイテムを付けていましてですね。すごいやつだなと思ったんですけども。

政経学部を選んだのは、当時、大学にスポーツ推薦で入ると、経済が経営から選んでくれということだったんですけども、将来的に岩手に帰ってきた時に、社会人で野球を持っているのが金融関係とかですね、岩手経済連というチームがあったので、経済を出ていたほうがいいかなと思って、安易に、深く考えずに経済に行ったんですけども。最終的に今、高い給料でもないで、それではちょっと株でもやるかと、今、思ってますね。本とかも読んだんですけど、私、そもそも政経学部経済学科でですね、もうちょっと経済のことを、それこそアイテムじゃないですけど、勉強しておけば良かったなとすごく思っているんです。

なので、今の学生方にも、政経学部を出たらどんなアイテム・資格を取れるんだとか、そういうふうなことを長期のビジョンを持たせてですね、4年間遊んで、後の70年苦しむのではなくて、4年間でしっかりアイテムをつけて、後の70年間すごく楽しい人生を送るんだ、というふうなことで、考え方のマネジメントから始めて、学生に取り組ませればですね、意欲とか意識も変わるんじゃないかなというふうなことを感じて。今、うちの学校でも、教科書

をすぐ開くんではなくて、アチーブメントっていう人材育成の能力開発の会社と提携してですね、最初に人生ビジョンを掲げて、目標を掲げて、そして計画を持たせて高校3年間、そして1日を送るというような、今日は何をすべきかということですね、目標を持たせて取り組んでいます。ぜひそういったことも、学生に教えていただきながら勉強すると変わるのかなというふうなことも、ちょっと考えたりはしています。

ありがとうございます。では、磯崎さん、お願いいたします。

**磯崎**：はい、ありがとうございます。あまり偉そうなことはいえませんが、今日の私自身のこの場というのも学びになっているのと一緒に、学生さんたちもこの素晴らしい先輩方がいらっしゃるということをもっともっと知ってですね、ぜひ交流していただいて、いろいろ学んでいただけるといいのかなと思います。

私自身のことなんですけども、3回くらい、実は野下先生、お世話になったゼミの先生に呼ばれて、大学のほうに、最後に行ったの3年前くらいなんですけども、学生さんとゼミの中で交流をさせていただきました。自分のつたない経験というか、今、真面目な顔をしていますけども、本当に学生時代どうしようもない学生だったんで、それでも何とか社会で生きていけるよという、なんとなくハードルを下げて喋らせてもらったのを覚えています。本当に学生さんたちと交流するのは、我々も学びになりますし、ちょっとでもヒントになればいいのかなというふうに思います。たくさん素晴らしい先輩方がいらっしゃいますので、ぜひその方々と交流をたくさんしていただくと良いかなというふうに思います。以上です。

はい、ありがとうございました。

いろいろと今の学生のためになるようなお話をいただきました。我々としては、話の中にも出てきました通り、いろいろな経験を積ませるために、素晴らしい先輩方がいらっしゃるということで、学年とか世代を超えた交流の場というのを、もう少し機会として与えられる努力をしていかなければいけないというふうに思いました。皆様にも、今後、またいろいろな機会を通じてご協力をお願いすることがあるかと思えます。引き続き、国士館大学政経学部に対して、ご支援いただければと思います。よろしくお願いたします。

本日は大変お忙しい中、貴重なお時間を頂戴いたしまして、ありがとうございました。

**皆様**：ありがとうございました。

それではこちらのほうを閉めさせていただきます。ありがとうございました。(※オンライン座談会の映像、終了)

最後に、閉会の挨拶を、学部長、お願いいたします。

**学部長**：政経学部創設60周年記念講演会を無事、終わることができました。これもひとえに、本日、ご列席いただきました方々のお力、そして、こういった会を成功に導いてくださった教職員の方々に、心からお礼を申し上げます。本日は、本当にありがとうございました。

以上をもちまして、国士館大学政経学部創設60周年記念講演会を終了いたします。長時間にわたりご参加いただきました皆様、ありがとうございました。



# 政経学部創設60周年 記念事業実行委員会

実行委員長 岩元浩一  
実行委員 石山健一  
竹市勝  
上村信幸  
熊迫真一  
石見豊 (年史編纂)  
川島耕司 (記念論文集)  
的射場敬一 (年史編纂)  
柴田徳光 (年史編纂)  
多部田直樹  
野下保利  
永富隆司  
川村哲章 (記念講演会)  
貫名貴洋 (記念講演会)  
鍵屋公一  
田野ひなた

## 国士舘大学政経学部創設60周年記念誌

発行日 令和4年3月18日

発行 国士舘大学政経学部  
学部長 岩元浩一  
〒158-8515 東京都世田谷区世田谷4-28-1  
TEL 03-5481-3152

印刷 株式会社プリントボーイ  
〒157-0062 東京都世田谷区南烏山6-24-13  
TEL 03-3309-0234



国士舘大学

政経学部